第廿年第十二號
十二月一日發行

中央公論

要目

THE CENTRAL REVIEW

明治卅一年九月廿九日第三種郵便物認可(每月一回一日發行)

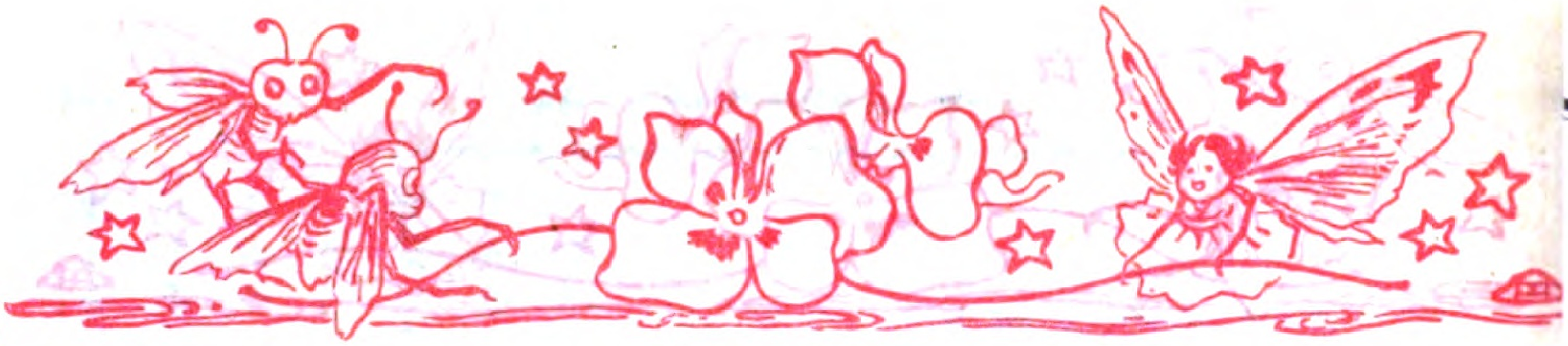
前號要目

（二百號）

○二百號に對する諸新聞雜誌の批評は本號の終りに附せり、尙四小說に對しては無名氏の細評載して本號文藝時觀にあり

○殘部二百餘部のみ御入用の方は至急御注文をなふ

定價二百號に限り三十錢郵稅共



本號目次

明治三十八年を送る

明治三十八年も且さに玆に暮れんとす、過去十二ヶ月を回顧すれば、吾人は我帝國に取りて如何に光榮なる歳なりしやを思ひ、欣喜極まる處なし、然り、開闢以來二千五百年、未だ曾て斯の如き光榮ある歳はあらざりし也

光榮ある此一年間に於て、本誌は社會に向つて如何なる貢獻をなせしか、顧みて自ら忸怩たるものなきにあらずと雖も、而もまた吾人の全力を傾注して社會國家の爲めに働きたる、讀者の諒とせらるゝ處ならんと信ず、而して本誌が此一年間に著しき進歩發展をなせし事も恐らく斷言するに憚らざるべきを信ず、惟ふに本誌の發展は即ち本誌が國家社會に盡し得る勢力の發展ならずんばあらず、此點に於て、吾人は聊か滿足の意を以つて明治三十八年を送り得べき乎

然れども吾人の前途や實に多望也、多事也、吾人が畢生の力を揮ふべきは或は今日以後にあらん、吾人は諸君と共に大なる希望と理想とを抱いて此光榮ある歳を送らんかな



第二十年
第十二號
(二百一號)

大廟御親拜の思想界に及ぼす影響

我が天皇陛下は、日露戰役に偉大なる成功ありしと平和の克復したるとを皇祖皇宗の靈に感謝するため、伊勢に幸して大廟に御參拜あらせられたり

而して東郷大將も是より先き海軍の大勝利を感謝するため、殊に將士を率ひて大廟に參拜したりき、蓋し日本海に於ける海戰の大勝利の意外に大にして、敵艦隊を全滅し、其の巨艦と司令長官司令官以下數千人を捕獲したるに拘らず、我が損傷する所は僅かに水雷艇二隻のみなるは、畢竟神明の冥助に由るものにして、皇祖皇宗の威靈の然らしむる所なりと信じたるが爲めなり

元寇の來るや、朝廷の憂慮甚だしく、龜山上皇は伊勢の大廟に祈るに、玉體を犧牲として國難に代らんとを以てし玉へり、日露戰の初め、申すも畏こけれども、我が　天皇陛下の軫念は吾人臣民の意料の外にありしなるべし、露は歐洲の强大國にして、其海軍の勢力幾んど我が上に出つるのみならず、陸軍國としては實に獨逸と共に世界に冠たりと信ぜられたれば也、假令東亞の一端に於てするも、之と戰ふて全局の勝利を收むるが如き、凡そ人力の豫期し能はざる所なれば也、萬一戰ひ利あらざらんか、啻だに滿韓に於ける我か主張を拋つて、之を露國の領有たらしむるのみならず、我が古來の領土をも亦割讓せざるを得ざるやも亦保す可らざれば也、事若し玆に至らんか、我が金甌無缺の國體は殞せられん、今上陛下としては實に皇祖皇宗の靈に

對し玉ふの御面目なければ也、殊にバルチック艦隊が威風堂々遠く一萬里の海濤を凌ぎて我が日本海に來るに及び、一戰我れに不利ならん乎、海上權は彼に制せられて、滿韓に在る我が百萬の兵民は、其の後を斷たれ糧を絕たれて、全く釜中の魚たらざるを得ず、旅順口を陷れ、鴨綠江に勝ち、遼陽を取り、沙河に捷てるものの皆無効となり、降を露軍に乞ふの外なきに至らざる可らず、吾人臣民一び之を懷ふも、坐ろに毛髮の悚然たるを覺えざる能はず、况んや民を愛し國を憂へさせ玉ふと最も深く且つ渥き　天皇陛下に於かせられてをや、申すも畏こけれど、當時　天皇陛下の御軫念は、吾人臣民の切に推察し奉つる所なり

凡そ人至難の境に立てば。智勇の外尙ほ求むる所の至大なるもの無きヿを得ず。人力の及はざるを知つて更らに人力以上のものに賴らんとする信念湧然として生ぜざるヿを得ず。是れ人心の始めて崇高最妙なる禁線に觸るゝ時にして、即ち神佛を祈り宗敎を信ずるに至るの最先の動機たり。三び申すも畏けれど、我が天皇陛下は實に日夕皇祖皇宗の威靈を信念して敵を攘ひ國を安くするヿを祈らせ玉へる所なるべし、然り、東鄕大將も、敵艦隊を邀擊するに當つては、思はず神明佛陀を祈念せざるを得ざりしなるべし、陸軍の諸將士亦常に斯の如くして。其の信ずる所の神佛を祈念せざるはなく、假令宗敎を信ぜざりしものと雖も、砲彈雨飛し銃劍林立する下に進入しては坐ろに人力以外の或るものを祈念せざるを得ざりしなるべし、海陸軍の人其の勝利を奏する每に必らず天佑を稱せざる莫かりしは其の明證なり、四び申すも畏けれど、日本海戰の捷報を得て、　天皇陛下が東鄕大將以下に賜はれる勅旨に於て殊に『汝等の忠烈に依り祖宗の神靈に對するを得るを懌ぶと詔らせ玉へるは則ち其の明證ならずや

天皇陛下が大廟に參拜し玉へる大御心は、則ち是れ國民一般の心也、國民擧げて祖先を崇め、皇室を尊ぶと、猶ほ　天皇陛下が皇祖皇宗を尊崇し玉ふに同じ、而して此の敬虔の心や、是れ竟に進んで宗敎信奉の道念となるべきもの也

今や海陸軍人の多數神佛を信じて謙抑自から持し、而して國民亦漸く眞摯敬虔の風に移らんとす、近時の新聞紙上屢々天を欽び、天を祈るの言を做すものあるは其の一證にして實に悦ぶべき趨勢と言はざるを得ず、此の時に方つて宗教家依然舊時の陋態を改めず、自から躬行實踐を以て教祖の遺澤餘烈を宣揚するを努めずんば、是れ時勢に叛て走るなり、吾人は切々偲々以て彼等の反省を求め奮發を促さざるを得ざる也

對韓策の大進步

伊藤侯大使となつて渡韓し。竟に韓國保護協約を締結したり。是れ我が近時の一大成功なり。想ふに外交智識に於て著るしく缺如する我が國民中。此の成功とすべき事由を解せざるもの多からん。吾人乃ち數言を費すの甚だ重要ならざるを信ず

（第一）

神功皇后は曾て三韓を征服し玉へり。若し支那の舊史によりて百濟を韓半島の西部より南滿州に及び（鳳凰城。遼陽等をも包含す）。新羅を半島の東部より北滿州の一部に及ぶものとし（吉林は實に其の城內にあり）。而して高麗を半島の北部より中央滿州に及ぶものとせば（興京。撫順。奉天。鐵嶺。昌圖。長春より哈爾賓。伯都訥。寧古塔等を包含して唐時の所謂渤海なり）。啻だに韓半島のみならず。滿州の大部分をも亦一時我が配下としたる也。蓋し滿州。韓國及び日本は共に同一人種にして、支那人其の他とは全く相異なれり。我が滿韓に深き關係ある素より多言を要するなし

殊に韓半島は一時全く我が管下に屬し。其の南部は則ち任那に於ける日本府の統治する所なりき。然れども繼體帝雄略帝以後。其の叛服常ならず。隨つて歷代征伐の事絕えざりき。五代に次で隋唐起るに及び。單に韓半島を臣屬せしめたるのみならず。其の餘威遠く日本を壓迫したりき。故に聖德太子は不出世の英才を以て半島回復の大方針を立て、國內を統一して專ら力を大陸に用ひんとを圖らせ玉へり、大化革新の萌芽全く茲にあり、此の革新の大立者たりし天智帝は、唐と

韓半島を爭はんがため、久しく帝位を辭し、太子として鋭意軍事に努力し玉へり、長門の黒木殿は實に其の好個の紀念物ならずや、而かも唐の勢力雄大にして、天智帝の雄武を以てしても。竟に恨みを呑みて暫らく手を韓半島に絶たせ玉ひき

豐太閤の文祿役は、聊か聖德天智の御志を紹ぎて、遠く神功の遺業を恢復せんとするもの丶如かりしも、尙ほ全く明軍を敗るに至らず、殊に外交上に失敗し、事業未だ成らずして殂せしを以て、唯だ韓國人民の家屋財物を焚燒し劫掠したるに止まり、其の慘害は延きて韓民の怨恨を招けるのみ、而かも天智帝以來日本國民の體内に循環せる血液は、玆に至つて再び沸騰し、韓國に對して永く絶つ可らざる志望を固くしたりき

（第二）

今上陛下維新中興の浩業を創し玉ふや、萬里の波濤を開拓し、普て國威を海外に擴張して祖宗先帝の神靈に對へんとを詔らせ玉へり、蓋し韓國經營の如き其の主たるものなるべし。故に明治六年西鄕、副島、板垣諸參議の征韓を唱ふるや、事幾んど決せんとしたるも、岩倉、大久保、木戸、伊藤の諸氏新たに歐米より歸り、先づ内治を整へ、實力を蓄積して然る後外に伸ぶるの可なるを主張するに及び、陛下は後者の議を採納し玉へり

此の時に方つて淸國は韓國を屬邦視して頗ぶる威を半島に振へり、而して我れは始終之と競爭の態度を執らざるを得ず、明治十五年及び十七年の變は則ち淸國と開戰せんとして果さゞりしもの、隨つて韓國問題は頗ぶる悲觀すべき地位に在りき

明治二十七八年役は、我れ隱忍を破りて竟に武力を以て淸國と韓半島を爭へるもの也、我が連戰連捷の結果、淸國は全く手を韓半島より引けるを以て、我れは即ち戰勝の效果として韓半島に我が利權を確立すべしと思惟せられたりき、詳かにいへば、明治初年の詔勅玆に達せられて、韓半島全く我が下風に立ち、聖德天智以來の政策は將さに一大步趨を進めんとは豫期せられし也

然れども露國は日本を威迫して遼東半島を還附せしめたる餘威に乘じ、狡智なる閔妃と相應じて、韓王をして日本に信頼せしめず、動もすれば日本の勢力を驅逐せんと欲す、井上伯が京城を去るや、閔妃は一個のクーデターを行ひ、日本主義者として內務大臣たりし朴泳孝氏僅かに身を以て日本に免かるゝに至れり、實に廿八年七月七日なり、井上伯再び渡韓するに及び、閔妃屏息し、金宏集內閣新たに成りて日本主義者また當路に立てるも、井上伯去り、新たに三浦梧樓子公使と爲るや、閔妃の陰謀又々繰返され、日本派の大臣を多く斥け、閔族の棟梁閔泳駿を招きて新內閣を組織し、日本式に訓練せられたる軍隊を解散せんとしたり、玆に於て三浦公使は大院君を擁して參內し、而して暴徒等宮禁に闖入して閔妃を斬殺したり、此の一擧に依て日本の威信將さに地に墜ちんとし、政府僅かに小村壽太郎氏を京城に急派し、且つ三浦氏を入牢せしめて以て其の後を善くせんとを計れり

然れども十月八日の事變は、韓國の君民をして甚だしく日本を怨恨せしめたるを以て、露國公使ウェバー氏は縱橫の策を用いて竟に日本の勢力を一掃せり、二十九年二月十日露國水兵山砲を引きて京城に入り、翌十一日國王世子宮嬪等と密かに露國公使館に移り、勅を發して第二のクーデターを斷行し、金宏集等を白日大道にて斬殺したれば、日本の勢力は全く韓半島より驅逐せられ、露國の勢威八道の草木を風靡するに至れり

想へ、玆に至て日清戰役の効果の一半は全く失墜せられたるなり、天智帝以來の傳統政策は正さしく一大頓挫したるなり、當時我が國民にして苟くも外交智識なるものあらば、此の一大失敗に憤激し、政府者を鞭撻して大に爲すあるべき筈ならずや、而かも事實は如何なりしぞ、軍人中扼腕して露國と一戰せんとを主唱したるものありしも、參謀總長川上子と外務大臣陸奥子之を抑へしのみ、國民の多數は斯の如き事實をも知らず、單に遼東半島の還附を憤慨して、盛んに政府者を攻擊し續くるのみ、韓半島の大問題には漠焉として

關知せざるが如く、甚だしきは則ち閔妃の慘殺を痛快なりとし、三浦公使を入牢したる伊藤内閣を柔軟なりとして攻撃したるのみ、蓋し我が國民の外交智識は、單に强硬と柔軟の二端を知り、硬を悦び軟を排するに過ぎず、幾んど四五歳の腕白小兒と齊しく極めて幼稚、極めて淺薄なり、而して此の氣風今日に至つて多く替る所無し、新聞記者等動もすれば政府者外交の無能を非難するも、何ぞ知らん、國民の外交智識の淺薄なる、最も慷して且つ慨すべきものなることを・

（第三）

廿九年二月十一日の變に由り、我が勢力全く韓半島より一掃せらるゝを看るや、大同江を境界として日露兩國の勢力圏を定めんとしたる政事家すらありき、是れ二十七八年戰役の効果をして、僅かに韓半島の南部に止まらしめんと欲する也、既にして山縣ロバノフの協約となり、廿九年五月の小村ウエバーの締約となりて、露國は韓半島に於て全然我れと同一の權利を有することとなれり

露國は着々として手を韓國に弘げ、幾んど韓廷を左右し得たるも、明治三十年十月公使スペーア氏露人アレキセーフを度支衙門の顧問と爲し、英人ブラオンを逐ふて關税權を掌握せんとするや、英國政府怫然として起ち、十二月下旬東洋艦隊を仁川に入らしめたるを以て韓王辟易し、竟にアレキセーフをしてブラオンの下風に立たざるを得ざらしめたり。次て露國政府海軍貯炭所として絶影島を借らんとするや、韓民群起して露國を攻撃し、露國派の外務大臣閔種默を非難し、物議紛出したるのみならず、韓王も亦稍々露國の凶横を厭ふの氣を生ずるに至り、公使スペーア氏去りてマチユーニン氏之に代れり。露國政府は暫らく手を韓國より緩めて、更に大に清國に活動せんと欲し、明治三十一年四月東京に於て西、ローゼンの協約を結び、日本の韓國に於ける商工業の發達を妨碍せざることを誓約したり、茲に於て我が韓半島に於ける勢力の一部は聊か回復するを得たるが如きも、尚ほ全く露國を凌駕するに至らず、韓王は日本若し一歩を進まば乃ち露國に依

賴せんとし、巧みに日露間を操縦して以て自家の地位を固守せんとし、而して政權爭奪と利益掴取に日も惟れ足らざる韓國の政客は、或は日本に賴り、或は露國を恃みて互ひに相排擠し競爭して、醜態百出すると數年に渉れり

(第四)

露國が旅順大連を租借し、茲に巨資を投じて大經營を立て、更らに東清鐵道を布設して滿洲併呑の實を成さんとするや、我が政論は不活潑ながらも略々二派に分岐したり、一は斷然露國の勢力を滿韓より驅逐せんとするものにして所謂征露派たり、一は滿洲を露國に與へ、其の代償として韓半島を我が勢力範圍に置かんとするものにして、乃ち滿韓交換論是れ也、前者は民間者の一派之を唱へ、露國の東洋に於ける凶暴を切齒せる我が國民の多數之を賛し、後者は主として伊藤侯之を主張し、民間者中には尾崎行雄氏の如き其の同論者たりき

然るに加藤高明氏が伊藤內閣の外務大臣と爲るや、能く英米兩國の同情を得て、露國に滿洲撤兵を迫り、極めて强硬なる態度を固持し、明治三十四年四月五日には我が元帥會議を開かれ、外務大臣參列し、而して陸軍省は戰鬪準備の調査に着手したりき、英國が日本の背後に在て有力なる聲援者たりしとは言を俟たず、茲に於て露國俄かに讓步して竟に撤兵を約するに至り、同時に滿洲經營上日本が一個の妨害者たるを認めたるも、尙ほ十分日本を畏憚するには至らざりき

桂內閣代り、小村壽太郎氏外務大臣たるや、專ら加藤氏の政策を繼承し、滿洲に於て露國の正面に立つの態度を取れるも、而かも奇なる哉、滿韓交換論全く跡を絕たず、現に伊藤侯の歐米漫遊を機とし、露都に至つて日露協商を締約せしめんとしたるとすらありき、想ふに日露協商の目的は、韓國を以て日本保護の下に置き、日本は滿洲に於て單に通商上機會均等主義を執らんと欲するに在る乎

然るに英國政府進んで同盟を求めたるを以て、明治三十五年一月下旬日英同盟俄かに締結せられ、二月十

一日公表せられたれば、日露協商は未だ交渉の端をすら開くに至らずして止みぬ

日英同盟に對し、露國は露佛同盟の東洋にも及ぶとを宣言し、一方には撤兵條約の全部を實行せず、且つ海軍大將アレキシエーフ氏を極東總督として、至大の權力を之に附與し、着々滿洲併有の實を擧げんとせり、隨つて我が國論大に沸騰し、近衛公を首領とせる對露同志會の如き、公然征露論を主張し、政友會進歩黨の如き大政黨も、亦翕然として討露說に傾かんとしたり

斯の如くして内外の形勢漸く切迫したれば、小村外務大臣は明治三十六年七月を以て公然露國と滿韓問題、殊に韓國問題を解決せんとしたるも、露國政府の横着にして而してアレキシエーフ總督の倨傲なる、日本の要求に應ぜず、却つて海陸軍備を進めて日本を威嚇し。韓王に鴨綠江伐木の密約を承認せしめて龍巖浦を占領し、益す日本を挑發したるを以て、翌年二月竟に開戰に至れる顛末は、尚ほ世人の記憶に新たなる所なるべし

（第五）

我が連戰連勝の効果は、實に偉大なるものを解決したりき、第一に開戰の理由たりし韓國問題及び滿洲の撤兵還附を實にしたるに止まらず、第二に露國の旅大租借權を放棄せしめて之を我が手に收め、第三に長春以南の東清鐵道本支線及び沿道の一切の利權を我が手に收得したれば也、

世或は韓國問題を既成の事實とし、別に露國をして誓約せしむるの要なしと論ずるものあり、是れ思はざるの甚だしき也、韓國現に獨立國として列國と對等の交際を爲す以上、之を我が保護權の下に置かんとせば、露國をして明かに之を承認せしめ、且つ之を妨碍せざることを誓約せしめざる可らず、啻だに露國のみならず、韓國と條約せる列國をして、總て此の旨義を承認せしめざる可らず、韓國の國主と其の政客とは、世界無比の變心者譎詐家なるに、列國亦野心を其の間に逞ふせんとせば、猶ほ日清戰役後に露國ありしが如く、日露

戰役後、第二第三の露國現出して、再び我が戰勝の効果の一半を滅却するに至るも亦知る可らざれば也、日清戰役は我が外交に於て實に苦き經驗なりき、其の過失を再びせざらんとせば、露國は勿論、列國をして總て韓國に於ける日本の地位を承認せしめて、以て外に對する一切の禍根を絕つに如かず、韓國の內より發する禍亂は之を鎭定する自から法あり、我れ立ろに之を辨じ得るも、其の禍根列國に關聯するに至つては、我れ單に韓國に手を下すに止まらず、また列國と折衝する必要ありて、幾んど絕えず列國と抗爭し、戰鬪せざるを得ざれば也、

此の故に吾人は、小村氏が日露講和條約に於て露國をして明白に韓國に於ける日本の特權を承認せしめたるを以て、極めて當を得たる措置なりと斷言す、之を無用とするは全く實際の形勢に通ぜざるものゝみ

且つ新日英同盟に於て、日本の韓國に對する特權を明記し承認せしめたるは、第一露國が陰謀を以て他國を煽動し、其の國をして韓國に於ける第二の露國たらしめて以て韓國を紛亂せしめんとする場合、第二露國の陰謀に由らざるも、或る種の外交資源と爲さんがため、若くば或る目的を以て、韓國の君臣を誘惑して日本の保護監督を承認せざらしめんとする場合、第三韓國が不法に日本に反抗せんと企てたる場合には、彼等總て日英兩國と武力を以て爭ふの決心なかる可らざるとを明示せる也、是れ韓國に對する一切の禍根を絕つ所以にして、韓國に於ける日本の特權は、日露及び日英の兩條約に於て幾んど全く確定せられたりと謂べし

今や伊藤侯大使として往き。韓國と新たに五ヶ條の協約を締結し、其の外交權を日本に收めたり、玆に於てか韓國の列國に對する地位、換言すれば韓半島に於ける日本の優越なる地位は、實際に於ても法理的に於ても、全く確定したる也、況んや韓國に日本の總督を置き、其の國政を管掌するとをも明約したるをや、對韓策の大進步に非ずして、何ぞ

之に由て韓國には幸ひに明治二十八年以來の變亂無

きを得べく、我が特權は確乎不拔なるべし、今後利權爭奪に急なる政客儒生の徒、亂を煽し變を計るも、素より外國の援助あるに非ず、我が武力を以て之を鎭定すると極めて易し、要は今日以後平和仁義文明の大主義を以て韓國民の最大多數を救助し、租税制度、刑典及び教育制度を定め、又道路を開き港灣を修築して、彼等の生命財産の安固を保障し、智見を拓き、利用厚生の澤に浴せしむるに在り、是れ我が天職也、而してまた聖德天智以來の志を成し、神功の遺烈を紹述する所以ならずや

男女學生交際論

東洋女學校長
文學博士　村上專精

突然男女學生の交際に就いて可否を御尋になりても私しは未だ充分にこの事を研究して居ない者であるから即答が出來ぬ、されど折角の御尋問であるから平素何となく私がこゝろに浮んで居るところを少しく申し陳へませう、全體この問題を解決せんとするには二の先決問題があるやうに思はれる、それは

一に人類交際の可否

二に男女交際の弊害

の二問題である、まづ第一問題より陳へやう、凡そ人は交際すべき者であるかまた交際すべからざる者であるかを問へば、何人も交際すべき者であると答へねばなるまい、人類の交際は社會を組織し而も社會の組織をます／＼鞏固にし、而も人類相互に娯樂し人類相互に幸福を增すの根原である、之に依て野蠻時代は交際の道が開けないが、少しても世が文明の度を增し來るに隨つて交際の道が開け來るのである、依て人は交際すべき者であると極めねばならぬ、交際は娯樂の本である、幸福の本である、文明的生活である、何人もこの交際を惡い事てふことは出來ぬ

いよ／＼人は交際すべき者であると極りて見れば、唯男子同士の交際で充分である女子は假令女子同士の交際はしても男子との交際は不可であるてふ道理は

立たぬ、乃ち男女相互の交際も至極善いことであると云はねばならぬことになりて來るは必然の理數である、全體交際に依て得るところの利益は同種類の人の交際に依て相互に得るところの利益が多いかまた異種類の人の交際に依て相互に得るところの利益が多いかといふに、寧ろ異種類の人の交際に依て得るところの利益の方が多いものである、私共色々の會に出て席上の談話を聽て得るところの利益は寧ろ我々とは異なりた思想を有しまた違た方面の事業に從事して居る人の意見を聽て皈るところにあるやうに思はれる、此に依て之を思ふに男子と女子との異性の交際は同性の者の交際よりも却て得るところの利益は多からうと思はれる、しかれば男女交際も至極善いことに相違ない

併し今は一般の男女交際でなくて別して男學生と女學生との交際に就いての御尋であるが、既に一般の男女交際が結構なことに極りて見れば、男學生と女學生との交際もまた善いことに相違ない、成るべくさうなりたいものである

男女交際は此の如き明かなる理由の下にありて決定せられながら、これを決行するに就いて異論を生し來れるは何故であらう、即ち男女交際に就いて言ふべからざる弊害があるからのことである、その弊害とは何んであらう露骨に之をいへば姦婬である、姦通である、殊に發情の時機に際せる男女學生等の交際に至りてはこの恐れが最も甚しいといふ所で異論が生し來るのである、處がこれも考へやうで、吾人は食物に制限をつけられると無暗に食欲が增して來るものである、それと同樣に男女の交際を禁すると反て男女相思ふ情の切なるものがある、云ひかへると男女相愛の戀情をして殊に切ならしむるものである、即ち餘計に姦婬姦通の行はれる恐れがあるといふ說がある、これも至極尤なことである私も同感である、この事情も乾度あるに相違ない、併し實際の事實はどうであらう元より無教育の野人ではあるが田舍などの農家や漁家などに至りては從來男女交際して少しもその隔てがないと謂つてもよい隨つて、彼れ等の中には野合姦婬の行はることは隨

分甚しいものである、この事は吾々多年田舍に栖んでよく知りて居る事實である處が學生となればそんな野人と違つて居る、同日に論すべきものでないと云ふ議論もあらう、なるほどそれも尤もである、併し今日の教育がそれほどまでに進んで居るだらうか、學生よりも教師その人がそれほど迄に立派な人ばかり揃ふて居るだらうか、また學生の家庭がそれほどまで立派であらうか、また社會全體がそれほどまでに清潔であらうか、學校にありての教師その人の醜聞も時に聞ぬでない、家庭にありての父其人は妾があるとか藝妓を呼ぶとかいふやうなことも隨分ないとはいはれぬ、その他新聞に小說に下宿屋に數へ來れば社會は發情の時機至れる男女の學生をして不良の道に誘導せぬものは殆んどないと謂つてもよいほどである

かくいふと無論監督の下で交際させるのだと云はるゝであらう、併しその監督が恰も乳兒を母が監督するやうに參るであらうか、隨分拔しられたものである、外國の例を聞ても亞米利加は別として英吉利もまだ一向男女の交際は開けて居ないそうである、佛蘭西や獨逸は尙ほ更開けぬそうである、故に今日に於て男女學生の交際てふことは餘程考へものである、つまり交際をした方が弊害少ないか交際させぬ方が弊害を防ぎ易いか、これを極めた以上でなくば男女學生の交際の可否を判斷することが出來ぬ、處が私しはどうも交際をした方が弊害多からうやうに思はれる

そこで結論はモット教育を進めねばならぬてふことになりて來る、モット社會を改良せねばならぬてふことになりて來る、モット家庭を立派にせねばならぬてふことになりて來る、モット立派な教育家を造らねばならぬといふことになりて來る、此に於て男學生も女學生も諸方面より立派な精神教育を受けて凛として犯すべからざる氣象を有するに至れは男女學生の交際も至極結構なことである、吾人は一日も早く其日の來らんことを待て居る者である、否自らこの事に及ばずながらも盡力しつゝある者の一人である（禁轉載）

男女學生交際論は現下教育界の一大問題也本誌は每號大方諸大家の高

論を紹介し、教育家及學生諸君の參考に資す、

▲二十年第九號（九月發行） 竹越與三郎氏
▲二十年第十號（十月發行） 三宅雄次郎氏
▲二十年第十一號（十一月發行二百號） 安部　磯雄氏

右は既に掲載せり、本號の村上博士の所論と併せ讀まば更に得る處多かるべしと信ず

思想界の革命

笹川種郎

明治三十八年十月、屈辱的媾和成るの頃、平民社同人は、戒嚴令の束縛と發行停止の抑壓とに堪へずして、自ら解散を斷行することを宣言せり。思ふに當局有司は之を以て社會主義鎮壓の功を奏したりとなさんか。嗚呼果して然るか。然らば則ち鎮壓なるものは頗る容易の業のみ。當局の手腕は正にビスマルク以上にして、革命時代の政府者が曾て夢想せざりし所を行へりと謂ふべし。然れども平民社同人は、噴泉の途に塞ぎ得べきにあらざるを告白し、豫言せり。吾人も亦實に此に疑なき能はざるなり。

社會主義を評論することは姑く此になさゞるべし。近時讀賣紙上の評論頗る首肯するに足るものあり。吾人は唯現代の趨勢をありの儘に述ぶるに止るべし。是れ事實なり。朝野識者が潛心して考慮すべき事實なり。社會主義を蛇蝎視するものも研究すべし。之を崇道するものも研究すべし。是を批判せんとするものも研究すべし。鎮壓し得たりとて凱歌を奏するは、早計なり。微々たる勢力として冷眼視するは陋見なり。吾人は思想界の革命が機正に熟したるに非ざるなきやを疑ふ。

露骨に云へば、平民社同人の傳道法は、雜誌に於ても、演説に於ても、書籍行商に於ても、女性的なり。愚痴ッぽく女々しく、嫉妬半分の模樣あり。吾人は其志士の風、剛骨不磨の氣象乏しかりしに慊焉たるものありしなり。善く云へば家庭的なれども、確に現代時弊に感染したる傾あり。平民社が割合に識者の同情を博し得ざりしは少からず此に基因す。且つその非戰主義を標榜して、國民愛國の氣象を殺がんとしたるは、平民社同人が依て以て誇る所なれども、社會主義傳道

の上より見れば、頗る策の得たるものにあらず。非戰主義と社會主義とは必ずしも一致合體するを要せず。日本に於ける社會主義傳道の大目的よりして云へば、縱令ひ非戰主義を抱懷すと雖も、斯る態度を取るを須ひず。靜に大勢を傍觀し、潮流の向ふ所を察し、直に大擧壘を拔くの方策に出でたかりしなり。しかも平民社同人の取れる策は事此に出てず、却て世間の同情を失ひし所あり。平民社同人は能く鬪ひしと雖も、遂に一たび旗を捲き陣を撤せざるべからざるに至りしは、一面に於て又此に職由する所なくんばあらず。

然れども平民社同人が播ける種子は到る處に芽を出しつゝあるなり。時代の潮流は之を培養しつゝあるなり。日露戰役以後に於ける社會主義の注目すべきは識者之を豫卜したるもの少しとなさず。しかも媾和條約に對する國民の不滿は殆ど薪に油を注ぐの觀あるに非ずや。吾人が曩に戰後經營の最急なるものを論じ、又善後策の最要なるものを說きしも、（日本人所載）亦之が爲めたり。戰爭の害惡は既に社會主義發展に利するものゝ少からず。戰後經營の巧拙は社會主義の勢力に影響するもの頗る多し。孰れにしても社會主義の爲めには好機會なり。しかも加ふるに、媾和の不滿を以てす。一社會主義の傳播は刃を向へずして解くるなるべし。一平民社は解散せり。一直言は停止せり。然も大勢は窮る所を知らざるなり。

文部當局者は大學教授の抗論に脅かさるゝと雖も、祿にありつくもの、官に衣食するものゝ、割合に能く爲す能はざるは、由來歷史之を證せり。讀賣の社會主義評論記者が官學の徒を罵倒したりしは、肯綮に中れり。官學の徒は自ら標持すること高けれども、順風に帆を上げたる連中なり。曾て逆境を味ひしこともなければ、味はんとする勇氣もなし、マルテン、ルーテルの氣魄なき以上は、昌平黌の學者と何ぞ擇ばん、唯それ野に叫へる聲か。泣齋高山彥九郞は官學の徒にあらず。海防僧月性は官學の徒にあらず。萩の明倫館が經書を講じつゝありたる際に、松下村塾の子弟は時勢を論じたりしなり。聖堂の學者が蠹書敗紙裡に殺し去り

し間に、水戸學は時代精神を鼓舞したりしなり。安政戊午のクーデターも浪人狩も徒らに天下の時運を急轉下せしめたりしに過ぎず。竹内式部藤井右門が放てる烱々螢の如き火は遂に崑崙を焚くの勢となりしに非ずや。大學教授の抗論は恐るゝ所にあらず。憂ふべきは、野に叫べる聲なるなり。

日露戰爭は平和の爲に戰ひ、人道の爲にその終を告げたるなり。人道主義と愛國主義との、衝突すべき場合はなきか。撞着すべき點はなきか。衝突し撞着すべしとすれば、その何れに從ふべきや。之を解する容易なるが如くにして、國家主義の見地よりすれば、實は甚だ難し。帝國主義は十九世紀末の一大勢力にして、今猶ほ强弩の勢、未だ末期に至らずとするも、個人福祉の上より見れば、大に惑ふべきものあり。國家主義は遂に永遠に能くその終を全うすべきや、是も疑なき能はず。トルストイが兵役を絶對的に否定し、租稅拒斥を勸奬するが如きは、事實の上に現れずとするも、時勢は冥々の裡に之を抱懐せしむるに至らざるなきか。日露戰役が光榮ある和約を結べば、よしや内部に暗潮の流るゝありと雖も、更に懼るべき所はあらず。少數の反對は免れずとするも、擧國一致は儼然として何の日にも再現三現四現するを得ん。國民に不滿なる媾和は最早暗潮として存すべきものゝみにあらず。思想界革命の到來を絶叫し、識者の講究を煩はさんとするは是が爲めなり。

媾和に對する不滿を以て戰爭萬能の害惡なりと冷評し、一部政事に不平なる聲なりとするが如きは、倶に國家を論ずる徒にあらず。但し是も或は思想界革命の飛火なるやも知れず。吾人は媾和の不利を以て思想界革命の機と信ずるとともに、國家成立の上より見て大なる講究を要し、密なる觀察を要し、如何にして此革命に對すべきやを豫め研鑽せんと欲す。

吾人は社會主義者に非ず。又國家主義を否定するものにあらず。實を云へば、帝國發展の上より見又時勢救濟の良策として最も殖民政策を隨喜し唱道するものなり。現代制度の惡弊を脱し、國家の發展するととも

に、個人の福祉を増長すべきを欲するものなり。思想界革命の先驅たるを欲せず、又之を防壓するの愚なるを知る。唯それ、思想界の革命は既に事實なり。豫言にあらず。燎原の火は杯水を以て救ふべきにあらず。吾人は冷眼に觀察する歷史家たらずして、熱意に之を講究する先憂者たらんことを欲す。(三八、十、二〇稿)

佛敎家の敎育事業

文學博士　芳賀矢一

禪宗、淨土宗、眞宗、日蓮宗、それ〳〵の宗旨に、それ〳〵の學校があり、大學林、中學林などゝいつて、自家の徒弟に宗門の學問をさせる處はあるが、國民全體を眼中に置いた學校は皆無の樣である。中學校の徵兵規則などに縛られ、文部省令に準據して、專門學校や、中學校の法規に合ふ樣にはして居るが、其精神は國民を敎育する意味から出たものでは無い。佛敎家の立てた幼稚園や、小學校はどこにあるか。敎育の樣な眞聖な事業は、佛敎家たるものが、喜捨の淨財を抛つても、全力を注ぐべき事では無いか。慈善事業や赤十字事業ばかりが、報國の業でも無く、保險會社設立の如きは決して褒めた事柄では無い。

この頃感じた事に就いて一言するが、こんな事は既にとくの昔先輩の言つた事かも知れぬ。たゞ感じた儘一言するのである。それは他の事では無い。佛敎家が奮發して師範學校を立てゝ、小學校敎員を養成したらどうだらうといふ考である。今日小學校敎員の拂底な事は識者の夙に慨歎する事であつて、全國府縣の師範學校卒業生では、とても其缺員を充たすとが出來ぬ。加之現在の小學校敎員も、動もすれば他に轉職を求めて、一生涯之に從事しようといふ人は極めて少數である。これは社會の待遇もよくないからやむを得ぬ現象である。二部敎授などをやつても、追付くものでは無い。その上に段々と國費多端で納稅の額も殖えるから、敎育費なども、さう澤山は出せぬ。今の儘で進めば、益困るばかりだ。學校の增築も出來ねば、敎員の增聘も出

來ず。已　學校の設備も完全にいかぬとなれば、誠に國家の爲に悲しい事である。

全國幾萬の僧侶達はこの際奮發して、いはゆる寺子屋の昔にかへり、小學校教員となつて、國民を教育する覺悟をもつてはどうか。それも老僧達にはだめであらうが、せめて眞宗あたりの息子株は一奮發してもよからうとおもふ。小學教員のやうな、眞聖でしかも薄給な献身的職業は、この實利主義な世の中には中々眞面目にやる人が無い。さりとて國家として、市町村として、その設備に骨が折れるとすれば、こゝは宗教家たるもの丶、一番の奮發を要する所ではあるまいか。

僧侶に軍人になれといひ、醫者になれといひ、職工になれといふのなら無理かもしれぬが、教員になれといふのは、そんなにむつかしい注文では無いかとおもふ。宗乘や哲學の研究にばかり憂身をやつさず、献身的に國民を感化するといふことに著眼して貰ひたいのである。爺さんや婆さんの説教よりも第二の國民の感化が大切とおもふのである。それは今の宗教學校の樣にむつかしい學科は入らぬ。各宗で地方の師範學校の樣なものを澤山つくつて、文部省の監督の下に小學校員を作り出すことに骨折つて貰いたいのである。もし徵兵が免れたければ、それも行く〳〵は六週間現役兵で濟む樣になるであらう。今の佛教家の學校はどうみても利己主義の學校であつて、利他主義では無い。衆生濟度を目的として居らぬ。しかも無暗にえらい學者ばかりを作り出す主義だから、增上慢比丘が澤山出來て、學校の騷動などが折々聞える。誠に見苦しい次第である。

僧侶が小學教員になるのに便利なのは僧侶自身にお寺といふ立派な黌堂をもつて居ることである。まづ其本堂を教場として使へば、隨分町村の經費も省ける。必ずしも、椅子やテーブルは無くてもよろしい。教授法さへしつかりすれば、器具の設備などは、そも〳〵末だ。現に明治の初年、我々が始めて通つた小學校は、お寺の本堂を借りて居つたのである。お寺は大抵村の中央にあり、通學の便利も惡くは無い。先生は土着で

あつて、轉任などは無暗にせぬ。元來は榮耀榮華の念は無い筈て、一生天職として、その業務につとめる決心がある。さうすればどの點から見ても僧侶の小學校敎員が出來れば、國家の爲に非常な利益になる。今の徒に死人の世話ばかりする坊主は實に日本の穀つぶしである。宗敎家は現世の衆生の爲にも大に盡す決心が無ければならぬ。

佛敎家の一般國民の敎育に關しての事業は甚だ少いとおもふ耶蘇敎の方がその點では、優れて居る。日曜學校で英語を敎るだけの事も、佛敎家はしては居らぬ。お寺樣といつて鄕黨の尊敬を受けて居る身分ならば、大に鄕黨に盡す考がなければならぬ。全國數萬の僧侶達の奮發次第て、全國の小學校敎育は大に起る事になるかもしれぬ。これか余の所感である。(完)

韓國の處分

法學博士 戶水寬人

韓國を處分するには埃及の例に倣ふべきかチユニスの例に倣ふべきか抑々亦之を純然たる獨立の國として取扱ふべきか將た或は我が國の屬國とするの方針を採るべきかは須らく吾人の考慮を消すべき問題と思惟するなり

先づ第一埃及の例に倣ふ可きや否やを考ふるに余は其例に倣ふの不可なるを信ずるものなり今少しく其理由を述べんに英國人が埃及に於て行ふところの事物其主要なるもの三あり第一、軍隊を以て埃及を占領すること第二、英國の外交官が埃及の政を行ふこと第三、混合裁判所に裁判官を出席せしむること是なり

第一の軍事的占領は千八百八十二年アラビ、パシヤの亂に源因せり是より先さき埃及の君主サイド、パシヤは千八百五十四年位に卽き而して間もなくスエズ運河開鑿の議起りサイド、パシヤは是に關與したるが爲め

に始めて英國に於て外國債を起すこととなれり其次の王イスメール、パシャは千八百六十三年位に即き後ち六年を經て千八百六十九年即ち我が明治二年に至りスエズ運河開鑿の功程は成るに至れり、イスメール、パシャは曾て佛國に留學したることあり歐羅巴の事物は極端に之を崇拜して萬事歐羅巴人の好尚に投ぜんとしたりしかば驕奢に陷りて忽ち財政の紊亂を來せり加ふるに外國債は嵩んで山を爲し其處置に窮したるの結果、英、獨、佛諸國の政府は埃及の財政に干渉するの止むを得ざるに至りぬ而して土耳古政府は大に是を患ひて千八百七十九年六月二十六日を以て二個の電信を埃及に送り其一を以てイスメール、パシャの位を廢し他の一を以て其子モハメッド、チユーフイクを埃及王の位に即かしめたり

元來土耳古政府は電信の如き文明の利器を使用することを敢てせざりしものなるが埃及のことに關しては忽ち電報を利用して斯くの如き快擧に出でたるが爲めに啻に埃及人のみならず歐羅巴人も亦一驚を喫したりと云ふ此電信を接手する迄はイスメール、パシャは其子モハメッド、チユーフイクと甚だ親善なりしかども土耳古政府が廢黜の電報を發せし以來父子相疎んずるに至れり

モハメッド、チユーフイク埃及の君主と爲れるも歐洲の諸強國が埃及の內政に干渉すること瞬時も止むなく爲めに大に埃及人の激昻を招きてアラビ、パシャの亂を生ずるに至れりアラビ、パシャは素と是れ一兵卒より身を起せしものなるが其才幹衆に卓絕したるが爲めに此時既に大佐の職に在り歲方に四十、英氣欝勃として乾坤を呑むの概あり座して埃及の屈辱を見るに忍びず、埃及は埃及人之を支配す可しと絕叫して遂に兵を擧げ一蹶して歐羅巴人の壓制を掃蕩せんと企圖せり

此に於て英國政府は軍艦をアレキサンドリアに派遣して之を攻擊せしめたり、英國艦隊の司令官はシーモールにして直ちにアレキサンドリアを衝き陸兵を上陸せしめたりサー、ガーネット、ウオルスレーは英國陸軍

に將として千八百八十二年九月十三日テル、エル、ケビルに於て大にアラビ、パシャの軍を破れり、アラビ、パシャは埃及人中に於てこそ傑出の人豪なれ精悍なる英國軍隊に對しては固より當面の敵手にあらず結局捕へられて一度は死刑に處せらるゝの議ありしかど遂にコロムボーに流せられたり、我が邦人にして歐洲に遊ぶの人士中其途次コロムボーに於てアラビ、パシャに逢ひたるもの無きにあらず

アラビ、パシャの亂以前に於て佛國人は埃及に於て大勢力を有し居りしがアラビ、パシャの亂起るに際し英國人と協同一致の運動を爲さゞりし爲めアラビ、パシャの亂以後に於ては頓に勢力を失墜し英國人のみ單り埃及の軍事的占領を行ふに至れり、埃及に於ける英國軍隊の兵員は時に差違あるを以て精確の數を知ること能はずと雖も現時埃及に駐在する英國軍隊は約三千と認定して大なる誤算なかる可く但必要に應じて大に増員し得るの設備あることは言ふを俟たざるなり

第二に英國人が埃及に於て政を行ふに就き一言する所あらんに千八百七十九年佛國人尙ほ埃及に於て大勢力を占むるの際は英佛兩國人協同して埃及の財政を監督し以て歐羅巴一般人士の利益を圖りつゝありしが當時公然財政監督官の地位を得たるもの二人あり一は佛人ドブリニール他は英國陸軍少佐ベヤーリングとす而して千八百八十年に至りベヤーリング印度に轉任を命ぜられたる爲めにサー、オークランド、コルビン之に代りて財政監督官となれり

千八百八十二年アラビ、パシャの亂平定せられて後財政監督官を廢して換ふるに只一人の財務顧問官を以てすることゝせり佛國人はアラビ、パシャの亂に勢力を失ふたる結果其顧問官たることを得ずして英國人サー、オークランド、コルビンのみ其職に就けり然るに千八百八十三年十一月に至りサー、オークランド、コルビン其職を罷めサー、エドガル、ヴヰンセント之れに代れりヴヰンセントは年齒僅かに廿六歳なりしが英國人の人材を求むるに急なる斯くの如き弱年の人物を推して財務顧問官の如き重職に就かしめたるは大に注

目に値ひす可き點なるべし顧みて我が國の情勢を察するに年歯二三十假令傑出せる人材のあるも徒らに貫目が輕いと言ふて登庸せず何ぞ圖らん其貫目の足れりとする時既に其人老朽して用ゆるに堪えざらんとは、英才を老朽せしめて而して後之を登庸するは我が國の流弊なれども英國の如きは然らず弱冠廿六の年少者を擧げて埃及の財政顧問官に任じ敢て異しむ所なし英國の覇を世界に稱する蓋し所ありと謂ふ可し

千八百八十九年に至りサー、エルウヰン、パルマー之に代りて財務顧問官となれり財務顧問官は名義よりすれば純然たる埃及の官吏なるも之を指揮するものは埃及に駐在する英國の總領事兼公使なりとす英國の總領事は埃及の官吏にあらずして而して埃及の官吏を指揮するは其權域甚だ奇なるが如しと雖英國の總領事兼公使の位置なるものはクロマー子爵即ち前に述べたるベヤーリング少佐其人にしてベヤーリング少佐は曩きに印度に轉任を命ぜられしが千八百八十三年再び埃及に歸任して總領事の職に就きサー、イヴリンベヤーリングと稱せり、千八百九十一年六月子爵を授けられロールド、クロマーと稱せり

ベヤーリングは固と銀行家の息子なるが頗る財務に長じたるを以て埃及の行政は今や此人の指揮監督の下に支配せられ名は總領事兼公使の官職を有するに過ぎずして別に最高顧問官の名義を有するにあらず又埃及の官吏に列し居るにあらずと雖埃及の政を掌握し居るは實に此人にして埃及の今王アブバス、パシャは千八百九十二年に即位したるも要するに虚位を擁するに過ぎず、クロマーの意に反しては何事をも爲し能はざる境遇にあるものなり

第三には混合裁利所に就きて一言せんとす、千八百七十六年二月一日即ちイスメール、パシャの時代に於て埃及に混合裁判所を開設せり初審の裁判所はカイロー。アレキサンドリア。及びマンスーラにありて控訴裁判所はアレキサンドリアに在り

債權法に關する事は混合裁判所の管轄に屬し居るも親族法に關する事件の如きは此裁判所の管轄以外なり

混合裁判所の始めて設けられし頃は英國人の勢力が未だ大に埃及に伸びざりしが爲めに裁判所の用語はアラビヤ語及佛語に定れり其後伊太利語を以て用語中に加へしが英語は今尚ほ用語として採用せられず近き將來は必ずや裁判所の用語中に列せらるゝことと疑ひを要せずと雖未だ此議の確定せられしを聽かざるなり

混合裁判所の判事は外國及び埃及の判事を以て之に充つるなり外國人の判事中には佛人あり英人あり他の各國の判事もありて英國人の獨り專らにする所に非らずと雖兎に角英國人も亦混合裁判所に判事を列席せしむるものと知る可し

夫れ斯くの如く英國が軍事的に埃及を占領し且つ其行政に關與する所以の者は他なし第一に英國はスエズ運河に關して勢力を保持せざる可らず若し然らざれば英本國より印度に至る航路は他國の妨害を受くる憂ひあり第二、英國は阿弗利加に於て大勢力を持立する者へにて數年前より阿弗利加縱貫鐵道の架設に着手しつゝあるが故に埃及を其勢力の下に置くの必要あり第三、英國と埃及との貿易は他の列國と埃及との貿易に比して遙かに多額を占め居るを以て英國人は鋭意して熱心埃及の事を經營し居るなり

英國と埃及どの關係夫れ斯くの如し然るに英國が埃及を以て其領土と爲さゞる所以のものは他なし埃及は土耳古の屬國なるが故に每年土耳古皇帝に對し若干の金額を貢納し居れり今其金額を我が貨幣に換算する時は六百七十五萬圓に當る、若しも英國が埃及を以て其領土とせば土耳古皇帝は每年其貢納金を喪ふの恐れあるを以て必ずや强硬なる抗議を爲す可しと期待せらる而して土耳古の背後には佛國あり露國ありて是等は機會だにあらば大に英國を苦しめんとなしつゝあるが故に英國人は敢て手を下して埃及を其領土中に加えんとはなさゞるなり

英國が埃及に於て有する所の利害關係と我が國が朝鮮に於て有する所の利害關係とを比較對照する時は其類似せる點もなきにあらず第一、我國は韓國の鎭海灣を我が掌中に收むるの必要あり是れスエズ運河に關して

英國が有する利益に比較すべきものなり第二我が國は韓國を段階として亞細亞東部の覇權を掌握すべき位置にあるものにして是れ英國が埃及を段階として阿弗利加の覇權を握らんとするに比す可きなり第三我が國と韓國との貿易も多額にして他の列國と韓國との貿易に比較せば遙かに其の上位にありと謂ふを得可し

翻つて我が國と韓國との關係、英國と埃及との關係が大に相異する點を擧げんに埃及の人口稠密にして到底他國人の移住に適せず其一平方里に九百廿八人の多數を包容せる如き埃及國內の耕作し得可き土地が歐洲何れの國よりも稠密なる如きは人口稀薄なる韓國と相異る顯著なる一事例とす可し

埃及の人口は總數九百七十三萬四千四百五人にして內土民九百萬八千、土耳其の領土內より移住し來れるもの四萬にしてベドウインスは五十七萬四千なりとす其內八萬九千は遊牧民其他外國より埃及に移住したるもの十一萬二千五百人なりとす今之を細別せんに

希臘	三萬八千人
伊太利	二萬四千人
英吉利	一萬九千人(駐在軍隊をも含む)
佛蘭西	一萬四千人
墺太利	七千人
露西亞	千四百人
獨逸	千三百人
其他諸外國	二百人

此表の示すが如く英國人にして埃及に移住し居るもの甚だ多からず是れ蓋し故なきにあらず埃及は到底移住に適せざるを以てなり

翻つて韓國の事情を顧みるに韓國に移住する人民は我が邦人最も其多きを占め而して今後益々移住民を必要とする事情あり其土地の如きも開拓耕作し得可き地域頗る廣汎にして此點より論ずれば韓國と埃及との狀境は大なる相違あり今後我が日本の勢力を更らに大に韓國に對して扶植發展せんことを企圖するには埃及に

於ける英國の行爲の如きは毫も傚ふ可きものにあらずと信ずるなり

次ぎに韓國を處分するにチュニスの例に傚ふ可きや否やを論ぜんにチュニスは固と土耳古の屬國なるが千八百八十一年チュニスと佛國との間に葛藤を生じ遂に干戈を交ふるに至れり其結果チュニスは敗れ佛國の保護下に立ちたるなり千八百八十三年に至り諸外國は何れもチュニスが佛國の被保護國たることを承認したるを以て千八百八十四年以來佛國の總駐在官がチュニスの政を行ふことゝなれり現今のチュニス王はシーヂー、ムハマドにして千八百八十二年即位せしが只是れ回々敎徒の土民及び猶太人を支配するのみにして佛國人は他の外人耶蘇敎徒を支配し回々敎徒即ち土民に對する民政も又佛國の監督官及び其屬僚の監督を受け居れり而してチュニスの大臣は大半佛國人にして之を統御するものは佛國の總駐在官なり而して其下に副駐在官ありチュニス王の歳費は三十六萬圓にして他の諸王族の歳費は合して三十一萬二千圓に當る

チエニスの人口は百九十二萬五千にして之を人種別にすれば左の如し

バルバルス	六十萬人
亞刺比亞人	五十萬人
亞刺比亞人とバルバルスとの混合	五十萬人
ムーア人	十萬人
蘇丹の黑人	四萬人
猶太人	六萬人

而してチュニスに滯在する歐羅巴人は十二萬五千にして其内伊太利人七萬二千佛人三萬七千五百（軍隊をも含む）モルタ人一萬二千希臘人一千其他は英、獨、墺の諸國人なりとす

現今の趨勢を以て推すときは佛國人が早晩チュニスを以て屬國と爲す可きは略ぼ察するに難からず而して其段階として先年チュニスを以て其被保護國と爲せるなり併しながら如上の人口表に因て見る如く佛國が假令チュニスを以て自己の領土とするも佛國人の多數を

移住せしむること能はず是れ佛國がチュニスを以て屬國とするを急がざる一の源因なる可し

我が國が韓國に對して今後如何なる事を爲す可きやと言ふに佛國がチュニスに對して爲しつゝある手段は參考するの價値ありと思惟するなり併しながら單に是に倣ふを以て未だ滿足す可らず其理由の如きは請ふ後段に於て述ぶるところあらん

次ぎに第三には韓國を以て純然たる獨立國として取り扱ふ可きや否やと言ふに其不可なることは我が國民一般の輿論なるが故に今之を詳論せざる可し

第四には韓國を以て我が國の領土と爲す可きや否やと言ふに余の見る所を以てすれば領土と爲す可しと思ふ畢竟は英國か緬甸を處分したると同樣に韓國を處分するの考へなり緬甸の太祖はアローン、パヤにして千七百五十五年より千七百六十年に至る迄で國王の位に在りしが第六代の王はボドー、パヤにして千七百八十一年より千八百十九年迄其位にありしなり其次ぎの王はボドー、パヤの孫バギードー、パヤにして千八百十九年より千八百三十八年に至る迄王位に在りたり

緬甸と英國との間には前後三回の戰爭あり第一回の戰爭はバギードー、パヤの時代千八百二十四年に起りて千八百廿六年平和條約を締結したる際にアッサム地方及びアラカン地方は英國に收められ第二回の戰爭は第九代の王パガン、ミンの時代即ち千八百五十二年に起りしが此戰爭の結果としてペーグ地方即ち蘭貢等悉く英國の領土に皈せり、パガン、ミンは千八百五十三年二月十八日に位を廢せられ異母弟ミンドン、ミンは國王となれり此人は千八百七十八年死せるに因り其子チーボー代つて王となる第三回の戰爭はチーボー王の時代即ち千八百八十五年に起り其翌千八百八十六年緬甸亡びて英國の領土となる

是より先き英國のロールド、ダッフアリンは全權大使として土耳古の首府コンスタンチノープルにありたる際即ち千八百八十二年埃及にアラビパシャの亂起り其亂の平定するやロールド、ダッフアリンはカイローに赴きて埃及の事情を視察して是を英國政府に報告し

且つ埃及を以て直ちに英國の領土と爲すの不可なるを論じたり英國政府は其報告に基き埃及を以て英國の領土と爲さず是に對して單に軍事的占領を行ふことに決したるなり

ロールド、ダッファリンは其後英國と緬甸の第三回戰爭の際即ち千八百八十六年二月を以て緬甸の首府たるマンダレーに赴き緬甸の事情を視察して是を純然たる英國の領土と爲す可きことを建議せり、而して是が爲めに英國は緬甸を以て其領土と爲せり緬甸と埃及との事情の大に相違せることと推して知るべきなり

余の見る所に因れば韓國は寧ろ緬甸に類似して埃及チュニスの事情と相異れるを認む故に畢竟は韓國を以て我か領土と爲すの得策なることを信ず、併しながら是を決行するには餘り急激の處置を執るの必要なかる可し曾て佛國がチュニスに於て行ひし行爲を參考として韓國を處分し然る後英國が緬甸を處分したると同樣の方法を韓國に對して行ふことを可なりと思惟するなり尙具體的に詳言すれば韓皇は必ずしも是を廢止するを要せず現皇帝の在位中は相當の敬禮を表し是に對して一定の歲費を捧ぐるも亦可なり

併しながら韓國の行政は一に是を我か日本人の手に皈せしめざる可らず啻に中央行政のみならず地方行政も擧けて是を我が掌中に皈せしむ可し單に內政のみならず外政も亦日本人の手中に收む可く而して是を爲すに就ては歐洲並びに淸國日本等に駐在する韓國公使を速かに撤廢せしめ次ぎに韓國に駐在する外國公使を退去せしめ我が駐韓公使も勿論京城を去らしむるを可とす而して我が政府は別に總駐在官を韓國に駐め韓國を以て純然たる被保護國と爲す可きなり是を行ふこと若干年にして我が國の勢力益々韓國に加はるを俟ち以て除ろに純然たる領土と爲すも未だ遲しと爲さゞるなり

日英新條約第三條を見るに

日本國は韓國に於て政事上軍事上及び經濟上の卓絕なる利益を有するを以て云々

日露講和條約第二條を見るに

露西亞帝國政府は日本國が韓國に於て政事上、軍事上及經濟上の卓絶なる利益を有することを承認し日本帝國政府が韓國に於て必要と認むる指導、保護及監理の措置を執るに方り之を阻礙し又は之に干涉せさることを約す

云々とあり余は是等の文面を以て敢て滿足すと言はざるも併しながら以上述べたる余の議論を實行するに於ては斯くの如き文面は何等の妨碍をも爲ざる可しと信ずるなり

想ふに我が政府當局は韓國を以て純然たる被保護國と爲すの意なる可し余は是に對して敢て異議を挾ますと雖、併しながら近き將來に於て更らに是よりも進步せる處置を採られんことを切に勸告せざるを得ざるなり

▲豫告

來年一月の本誌には

男女學生交際論　下田歌子女史

を掲載すべし



本誌に掲載する處の海外新潮に依つて歐米列國の大勢を知らんと欲するもの頗る多きが如し、歐米の大勢を知るは即ち世界の形勢に通ずる也、吾人が之に多大の費用と勢力とを傾注するもの、各國語に通ぜざる人をして現世界をより多く熟知せしめんが爲め也、これ蓋し我國現時の急務なりと信ず

英露和解論

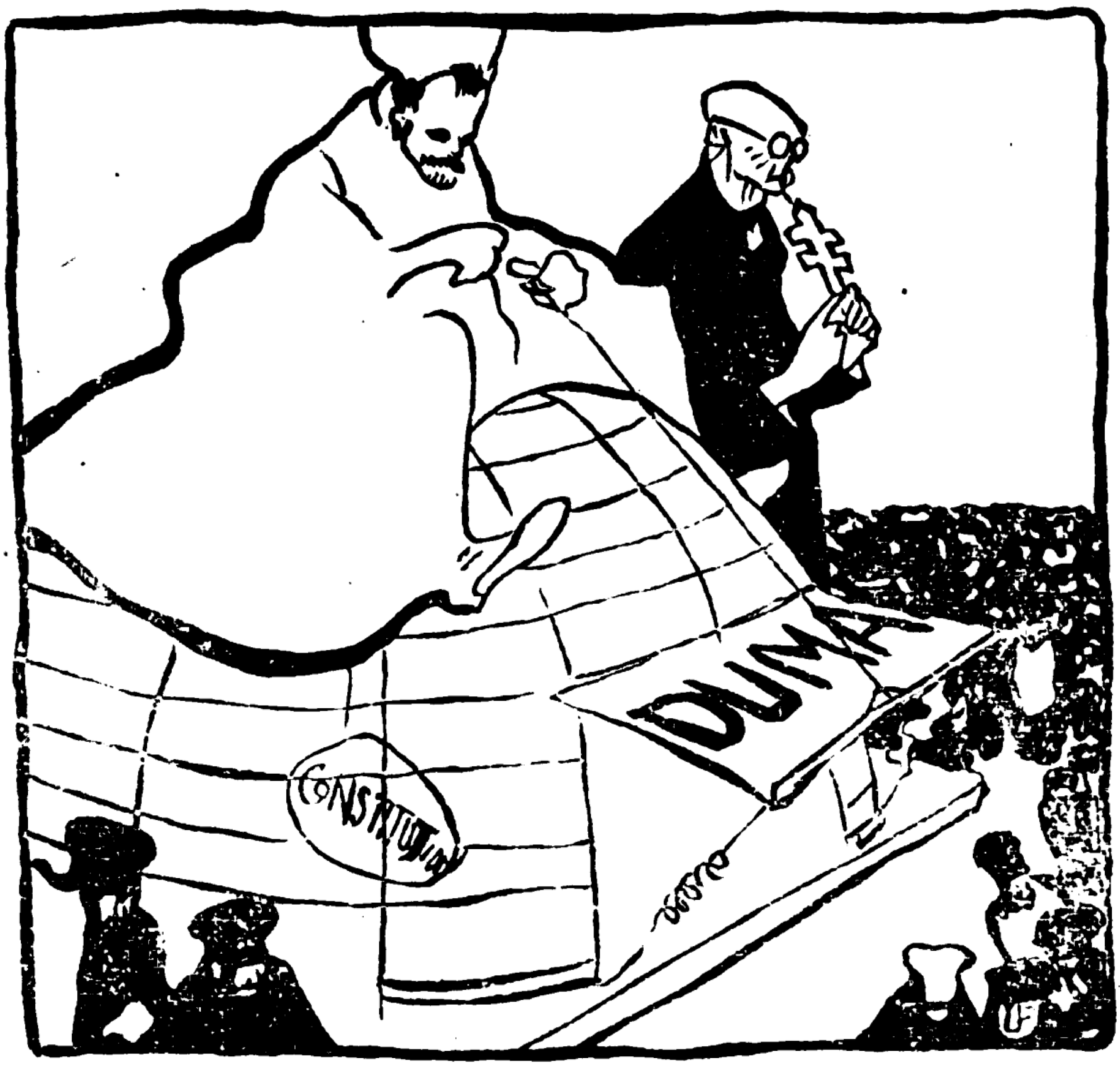
「スペクテートル誌」

英露遂に衝突すべきか、將たよく和解すべきかは實に世界將來の運命に關する一大事件にして、同時に又我國直接の利害に係はる重要問題也。吾人はこゝに英國側に於ける英露和解論の代表とも見るべき「スペクテートル」の所說を譯述し、以て如何に彼等が和解の成立を熱望しつゝあるかを示さんと欲す。苟も世界の大勢と我國の將來とに注目せらるゝの士は、乞ふ之を輕々に看過せらるゝなからんことを。(譯者志るす)

吾人は露國新聞に於て英露和解に關する興味多く且つ暗示的なる一文を見たり。惟ふに此文にあらはれたる思想は露國に於ける多數の思慮ある國民の意見を代表せるものなるべく、而して我英國政府も此機を利用してかゝる和解を成立せしめんことに盡力すべきを疑はず。吾人は日本と同盟國の關係を有し、又戰爭中吾人の同情は全く日本の上に注がれつつありしに拘らず、吾政府も人民も未だ嘗て英露和解をして不成立ならしむるが如き行爲を露國に向つてなしたることなく、加之講和談判中に於ては露國側の最上の利益を計りたることは些も疑なき事實なり。然れども誤解する勿れ、吾人が我政府に向て英露和解を成立せしめよと勸告することは決して所謂英露同盟を形成せしめよとの意にあらざるなり。げに今日同盟といふ文字は屢々濫用せられ其意氣の曖昧となり、從て他の文字との混雜を來したるを實に嘆ずべし、英露同盟といふが如き密接なる契約は決して成立せざるべし、同盟は其性質上單に一國又は一團體の國家とのみなし得るに過ぎず、故に今日英露同盟などゝいふは極めて愚なる說たるを免れざるも、而かも露國と親密なる和解をなし得ざる理由何處にありや、かゝる和解は決して日本と結びたる義務に反對することなく、且つ英露互に非常の利益を受くべきなり。吾人が屢々論議したるが如く英露兩國が互に敵視すべき何等根本的又は必然的の理由あることなし。露國は疑もなく過去數十年間亞細亞政策に腐心し、從て世人は我英國の利益をも害することあるべきを危みたりと雖も、然れども內實に立入りて彼の眞相を探れば彼の眞の野心は歐洲政策にありて、東南歐羅巴の天地にスラヴ人の優勝を示し、スラヴ人の理想を行ひ、且つコンスタンチノープルを占領せんとするが其本來の志望なり。然るに一旦英國が首動となつて其歐洲に於ける野心を犧牲せしめし以來彼は亞細亞に向て其勢力を轉じ、而して吾人を以て甚しき障害物と考へ、常に印度に於て吾人を復讐し且つ驚嚇せんとしたるに過ぎざるなり。かゝるが故に彼の露國が我が印度に向て惡意を有するに至りたるは印度を占領せんといふ目的よりは寧ろボスフオラスに於て英國より受けたる打擊を復讐せんとするにありき、チヤタムが獨逸に於て亞米利加を征服したりと誇りたるが如く露國は亞弗汗の國境に於てコンスタンチノープルを征服せんことを望みたり。然れども歲月の久しき、初め手段として用ひたる印度攻擊の行爲は遂に露國の目的と變じ、今や殆んど其歐洲政策を忘却せんとする程に立ち至りたり、然れども露國の極東に於ける大失錯は大なる反動を惹起し、積年の方向を變じて再び歐洲政策に意を轉ぜんとするの傾向極めて著しきに至りぬ。

若し吾人にして智慮ある國民ならば鐵の熱したる時に於て之に槌を下さゞるべからず、吾人が露國と和解すべき最良の時機は實に露國が公然印度侵害の計畫を抛たんとする現時を措て他にあるべからざるなり。而して吾人は一方に於てサリスベリー卿のいひたるが如く露國に反對して土耳古を保たんとしたるは惡馬に錢を置くが如き失策なりしを公然自白すべし。吾人の意見によれば吾人は率直に露國に向ていふべし、吾人は最早オツトマン帝國の獨立安全を以て英國の利益と認めず、バルカン半島の獨立國の全然破壞するは冷靜に看過する能はざるべきも而かも此等の土地の上に露國の權利の存在することは英國に惡意あるものと思はず、且つコンスタンチノープルの占領と共に當然其手に歸すべき小亞細亞の合併を以て全く英國に無關係なるものと思惟するものなりと。露國は勿論小亞細亞及びシリアに關して佛、墺、伊、獨の諸國と自ら商議せざるべからず。されど吾人は兎に角コンスタンチノープルを以て英國と戰爭を開かずしては露國の手中に收むる能はざる土地なりと考へざるに至りたることを知らしむべし。かゝることは一見露國に對して何の利

する處なきが如くに思はるゝやも知れれど、事實は而してさにあらず。露國は今日尙吾人がコンスタンチノープルの占領に反對を試むべきことを恐れつゝあり、若し吾人にして之を拒否することなければ露國は誰に憚る處ありて土耳古處分について墺太利と協議を開くことをなせざる。墺太利はサロニカの良港及びボスニアヘルツゴヴイナの諸州よりエーヂアン海に出づるに便なる土地とを得べく其他は露國の欲する儘に之を處分し得べきにあらずや。げにかゝる處分をなすにあたりて墺太利の權利を尊重すべき保障は是非共與へられざるべからず、何となれば墺太利は常に英國に忠實にして且つ好意を有したるを以て吾人も亦彼の權利を尊重すべきの義務あればなり。佛國の利益に關しては吾人殆んどいふの要なかるべし、何となれば佛國は露國の同盟にしてシリアに於ける佛國の權利を侵害せざることは露國の義務たることを信ずればなり。伊太利についても多言を費すの要を認めず、何となれば北亞弗利加の最良部たるトリポリ及びシレニア半島の復歸權は已に佛國及び我國に於て承認せられたるを以てなり。以上吾人の所說を一見すれば或は土耳古分割を推奨するが如く見ゆべきも吾人は決して急激又は冒險的手段をとらんことを露國に勸誘するものにあらず、吾人のいはんと欲する所は英國は實に露國の南歐に於ける政策を妨害し又はコンスタンチノープルに對する露國の野心を阻礙するものにあらざることを知らしむるにあり。吾人は斷言す、サルタンは最早や吾人の同盟にあらず、又佛、墺、伊の諸國にして相當なる考察を得且つバルカン諸國の安全にして害せられずんば吾人は最早や土耳古に對する露國の野心を妨害することなかるべきことを。



NICHOLAS II—"My dear Pobiedonostzeff, I hope the mice will be fools enough to take my bait!"
—*Jugent* (Munich).

吾人は斯くの如く英露和解の成立せんことを希望すと雖も、かゝる政策を實行するの障害は甚だ多くして且つ大なるものあるの事實を掩ふ能はざるなり。第一吾人は露國の軍人の反對を豫想せざるべからず、彼等の勢力は戰爭の失敗によりて大に挫かれたりと雖も、而かも未だ甚だ强大なるものあり。而して軍人社會の首長は總て皆反英國黨なり、彼等は何れも英國を侵害せんことを希望し、露國の權利を擴張せんとするの外、英國を打擊せんこと夫自身を以て彼等の目的とするが如し。彼等は一戰

して直ちに印度を破り、充分なる大功を樹て得べきものと信じつゝあり、これ或は事實なるべし、然れども又一方に於ては印度の征服は我同盟國たる日本兵とも戰ふべきものたるを覺悟せざるべからざることも事實なり。然らば事決して彼等の信ずる如くしかく容易なること能はざるに至るべし、第二の障害は獨逸皇帝及び政府の野心（獨逸人民とはいはず）にあり、獨逸政府は疑もなく英露和解によりて其政策を妨げられ、小亞細亞、コンスタンチノープルの占領によりて其勢力を削減せらるゝ如く感ずべし、吾人は明白にいはん、獨逸のかゝる和解を恐懼すること決して謂なきにあらず、從てかゝる和解を妨止せんとすることも當然のことなりと。故に勿論彼等は其全力を揮て英露を離間せんとするなるべし、而して之をなす彼の力は決して侮ること能はず、是れ獨逸皇帝の露國に有する個人的勢力の爲めのみならず、又實に明了ならざるも而かも有力なる獨逸國民全體の勢力が露國政治の上に加はりつゝあるの事實より推察することを得べし、恐らくは佛國外交の力によりて或程度まで獨逸の妨害を排除することを得べし、然れども吾人は此點に關しては獨逸の力遙かに佛國の上にあるを認めざるべからざるを奈何せん。

吾人は前述の如く英露和解の上に横はる困難の多くして大なるを認むと雖も而かも吾人は決して失望することなかるべし、若し我が政府にして堅忍持久、直ちに其結果を收むるに急ぐことなからんか、吾人の主張する英露和解は終局には必ず成立すべきものたるを疑はず、若し彼等にして迅速に和解の實を收めんとすれば固より失望せざるを得ざるべし。我政府は直ちに其目的に向て進み、此最良の機會を捉ふることを怠るべからざるも、而かも彼等は其結果を二三年の後に期し、英露の全き和解は數年の後初めて成就すべきものたるを思はざるべからず。或同盟に對して去就何れとも決せざるの政策は決して成功を直ち得たる例なし、若し吾人にして確然たる根據に座して露國に對せば露國亦彼の眞利の何處に存するかを解するに至るべし。然れども吾人の露國に對するや、常に露國は吾人を以て實際よりも遙かに露國嫌の人民なりと誤解しつゝあることを知らざるべからず。若しよく此呼吸を呑み込みて吾人の政策を採用せば必ずや數年にして完全なる英露和解の成立を見るべきなり。

ステッド氏の露帝解放論

「倫敦タイムス」

「評論之評論」の主筆にして兼て「露西亞眞情」の著者たるステッド氏、今回露國に漫遊して親しく彼國の形勢を視察し、流麗暢達の筆を揮うて數篇の論文を起草し、以て本國の論壇をして時ならぬ花を咲かしめたり。殊に十月十二日の倫敦タイムスにあらはれたる「露帝の解放」（The emancipation of the Tsar）と題する文章の如き、同紙の三段半に亘る大論議にして、次第に文章の寂れゆく新聞界の一偉觀なりといはざるべからず、「亞歷山二世の農奴解放は十九世紀に於ける人間進歩の一階段を劃したるものなりしが、今や國會の力によりて成就せられんとする露帝解放は現代に於ける自由發達の一大階段を劃せんとするものなり」の冒頭より「警察權の壓制を受けざる自由選擧によつて國會の成立を見るの時こそ、即ち是れ自由人民が解放せられたる皇帝に向て熱心なる忠義の歡呼を捧げんとするの秋なれ」の結末に至るまで論理貫徹、文意明晰、流石に大記者たるの盛名に背かざるの筆致を見る。吾人は全文を譯載せんことを欲すと雖も、奈何せん之が爲めに多大

の紙數を割くの自由を有せず、止むを得ず同日の同紙に出てたる氏の論の梗概のみを摘譯するを以て滿足せんと欲す。讀者乞ふ之を諒せよ(譯者志るす)

吾人が本日の紙上に掲載せるステッド氏の長論文は氏が莫科斯より送りたるものにして、氏の一種の豫言者的態度を窺ふに足るべし。氏の信ずる所によれば全露國の上に掩ひかヽりつヽある暗憺にして紛亂極りなき恐怖の雲影は、迅速に且つ容易に消散すべきものにして氏自ら之を消散せしむべき方策を知悉せりといへり。而して氏の方策は極めて簡單なり。曰く露帝解放は唯一の方法なりと。露帝解放とは何ぞや。曰く彼をして日夜彼を束縛し、且つ露國民より彼を離間せんとする官局政治(ビューロクラシー)の煩勞より解放せしむるをいふと。而して今や解放の機は實に眼前に迫れり、一度び自由選擧による國會にして成らば專制政體の四肢を束縛したる鎖鑰は忽ちに取除かるべし。茲に於て皇帝と國民とは初めて顏と顏とを相見ることを得、兩者互にこれはこれはとばかり恐悦の叫びを放つべし。ステッド氏は又露國に於てさへもかゝる融和成立を危むものあることを指摘し、其等の人の信し執きことを攻撃したり。現皇帝の在位十一年間、皇帝が多く人民の權利を尊重するの功績なかりしことは事實なり、されどステッド氏は之を以て全く皇帝の境遇に歸し、幼少にして何の經驗なく、未だ皇位に登らざりし時より已に官局政治の惡政に擒にせられたる結果なりといへり、皇帝の心中に於ては彼常に「人民の君主」とならんことを欲し、時々種々の努力をなさんとしたることは世の認むる所なり。而して國會はよくこの擒縱より彼を解放することを得べく、一旦解放せらるれば皇帝の人物始めて顯揚せらるべしとはステッド氏の見解なり。氏又曰く普通世人に傳へらるヽ露帝の人物は悉く其眞相を解せざる謬見に過ぎず、ニコラス二世は彼の大臣の何人よりも勝れたる才能を有し、且つ或事件の要點を捉へて之を解決するの手腕決して尋常にあらず、殊に人と應待するの態度に至ては從來極めて範圍の狹少なる官廷の人物に限られしに拘らず、殆んど先天的美質を有せらるヽと。而して現皇帝の人物は彼得大帝又は亞歷山三世の如く鐵石の意志(アイオン、ウヰル)を有せらるヽにあらざる。、現時の如き秋に當り



THERE'S NO DOUBT OF HIS SINCERITY THIS TIME.
—Wilder in the Chicago *Record-Herald.*

ては寧ろ鐵石の意思を有せざる君主こそ却て此難關に處するに適當なれと論じたり。

吾人はステッド氏の豫言の實行せられ、露國の光榮ある救濟の事實とならんことを希望すといへども、而れども單に善良なる計畫のみを以て大事をなさんことは頗る難事なり。所謂鐵石の意思はかゝる時に當りて最も須要なるものにはあらざるか。吾人暫らく局外者の地位に立ちて今后の成行を注視せんと欲するものなり。

カルネギー氏の世界平和同盟論

アンドリユーカルネギーは蘇格蘭なる聖アンドリユウ大學の『ロードレクトル』に再任されたりしが、十月十七日、右叙任の式場に於て世界平和同盟を形成するの急務たるを演べ、戰爭廢絶の手段としては英米獨佛露の五大强國若くは英米佛三强國間に一の平和同盟を形成し、更に餘の列國をも勸誘して此同盟に入らしむるに若くなきを論じたり、曰く、

現今大英帝國の官廳は陸軍改革問題に就て腐心しつゝあるが、殺人術の練磨研究に身を委ねんことを志願する人數の少きを感ずるは、歐洲諸强國皆な孰れも然らざる莫し、此に於て吾人は早晩世界列國間に平和の維持を目的とする大同盟の組織を鼓吹するの聲を聞くなるべく、かゝる同盟の成立は實に吾人の衷心よりして贊成し、且つ之が爲めに力を盡くすを辭せざる所なり。昔て北清に拳匪の動亂起るや、五强國は力を協はして之が鎭定に從ひ、北京駐在の列國公使を包圍の裡より救ひたるは今ま尙ほ世人の耳目に新たなる所、想ふに此の五强國の協力は、又た將來永久に戰爭を廢絶し、世界人類をして恒に平和に晏んずるを得せしむるに堪ふるならん。或は五强國の協力を得るなくとも、少くも三强國の間に平和同盟の成立するありて、爾餘の列國に向つて加入を勸め。且つ『戰爭は文明世界の何れの地方に起るにせよ必ず世界全般に重大の影響を及ぼすものなれば、今後は何れの國民も斷じて他に對して戰端を啓くを止め、或る必要よりして、是非曲直の爭はざるべからざるあらば、乃ち海牙平和會議か其他の平和裁決所に提出して之が裁決を求むべきことを約し、若し是に從はざる國あらば、全く同盟列國との交際を絶つことと爲すべし、然らば世界の平和は依りて以て永久に維持することを得るならん。

今ま或る一國あり、同盟列國の決議に服從せざるの故を以て全然世界列國との交際を絶たれたりと假定せよ、是れ豈に國民の堪へ能ふ所ならんや。而かも同盟列國は宜しく一層の愼慮を作し、交際斷絶の猶ほ以て平和を維持するに堪へざる如き萬一の際に處するの準備を整ふべきを要す、即ち此かる萬一の際に處するの準備として同盟列國に其の人口と富とに應じて各〻相當の軍隊若くは軍資を出さしめ此くして豫め必要なる兵力を備へて非常の用に供し、以て飽くまで同盟列國の決議を執行するを得せしむるを要す。

往きに露國皇帝は海牙平和會議を召集し、依りて吾人をして萬國平和裁決所を得せしめたり。若し英獨皇帝の孰れか若くは佛國大統領にして自國を代表して世界列國に告ぐるに『世界平和同盟の成立を議するが爲め各〻代表者を派して某地に參會協議せしむること』を以てするならば、列國の此の勸誘に應じて參會するを諾する者接踵相ひ嗣ぐべく、特に小弱なる邦國は皆な歡喜してかゝる同盟の成立を迎ふるなるべし。

英米佛三國間の關係親善なること今日の如きは曾てあらず、加ふるに三國各自の目的は相ひ一致し、各自の領土は既に確定し、各自の活動すべき範域は亦た全く異なる方面に存し、總するに三國の利害は、毫も相ひ衝突するの虞あらざるに因り、此の三國をして世界平和同盟の倡を成し、列國に向つて誠意勸誘する所あらしむるは決して望み難きの事に非ず、寧ろ却て易事なりといひて不可なし。而して此の問題たる、確かに英米佛三國君主の考慮を拂ふべき値ひあるの問題にして、吾人は衷心より三國君主の念ひを玆に致されんことを望みて止まず、蓋し世界の戰爭を廢絶して平和の永久維持を安固ならしむるの方法中其の最も容易にして且つ最も良善なること能く此の右に出づるものあらざればなり。

吾人は固より現存せる協調若くは仲裁の方法が、將來急速の進歩を成し以て世界平和の維持を安固ならしむるに與かりて力有るを疑ふ者に非ず、却て此の方法の用ゐらるゝ處常に功を奏するを見て其の依賴すべき有力の手段たるを察すと雖も、而かも一層優れる有効の方法尙ほ他に之れ有り、一旦之を採用して鋭意實行に勤むるならば、非常の際に臨みて能く流血の慘禍を止むるに堪ふべきことを銘記するは、一層人意を强からしむる所以ならずや。（日本人）



WHAT THE POWERS MAY HEAR.
It will likely be the voice of experience.
—Carter in the Minneapolis *Times*.

露帝の第二平和會議提唱を嘲る

「リテラリー、ダイゼスト誌」

露帝が再び第二平和會議を提唱したりとの風說は實に世上幾多の人を驚愕せしめたり、何となれば第二平和會議は北米大統領ルーズヴェルト氏によりて提唱せらるべしとの噂專ら高かりし當時なりしを以てなり。然れ共こはブルークリン、スタンダード、ユニオンのいふが如く、露帝がルーズヴェルト氏の承諾を得てなしたるものなること疑なかるべく、ルーズヴェルト氏も亦第一海牙會議首唱者をして第二回をも召集するの名譽を得せしめたる方穩當なりと考へたるべきを正しく當を得たるものなるべしと信ず。然れ共幾多の新聞雜誌は大に訝りて曰く、日露戰爭―而かも其開戰にはツアール自身の責任

も決して輕からざる日露戰爭を終結したるのみにて一方には尙ほ高加索其他の諸州に於て其臣民と戰亂を開きつゝある皇帝にして平和會議を提唱し、世界平和の使徒たらんとの野心を起したるは滑稽の極なりと。されどスタンダード、ユニオンのいふが如く若し露國皇帝の立塲より見れば彼自身は已に戰爭に厭き又一方に印度に於ては英國、他方に日英同盟を控ふるを以て全く戰爭より自身を保護するの必要を感じたるやも知るべからず、華盛頓イーヴニング、スターの如きは大にツアールを嘲りて曰く

「若し露帝の平和提唱を以て理ありとなせば、米西戰爭の後、若き西王アルフオンソも亦よく平和會議を提唱し得べし、（予は擲たれ我陸海軍は總て滅びたり、汝等亦我と同じ程度に軍備を縮少せよ、我と同列に立ちて世界の平和を計れ）と、かく叫びて平和會議を提唱せば大に公平且正直なるを失はざるべし。又澳太利のフランシス、ヨセフの如く一國の政治的分解に臨める君主ならば一層よく平和會議の提唱者たる役割に嵌まるべし、世界は疑もなく維納の尊敬すべき君主の警戒に謹聽すべし。彼は全く演劇すべき役割なく、保護すべき利益を有せざるなり。又半ば其國を失へたる瑞典のオスカルは平和の提唱者として最も雄辯を揮ふを得べく、白耳義のレオポルド、丁抹のクリスチアンの如きも適任者なるべし。嗚呼されどニコラス二世陛下！今の時期はなかなか笑談をいふべき時にあらざるべし、されど彼の此提唱は殆ど世界の四方より笑のどよめきを喚起する力あり云々」と

又華盛頓タイムスは露帝の平和會議提唱は輕蔑するだも堪へざる程滑稽なりといひ、凡そ世界の君主中ニコラス二世程平和の提唱者に不適任の人なしといへり。何れにしても彼の平和會議提唱は近來無比の滑稽なりといふべし。

露都の日本畫展覽會

「ノーオエ　ウレミヤ所載」

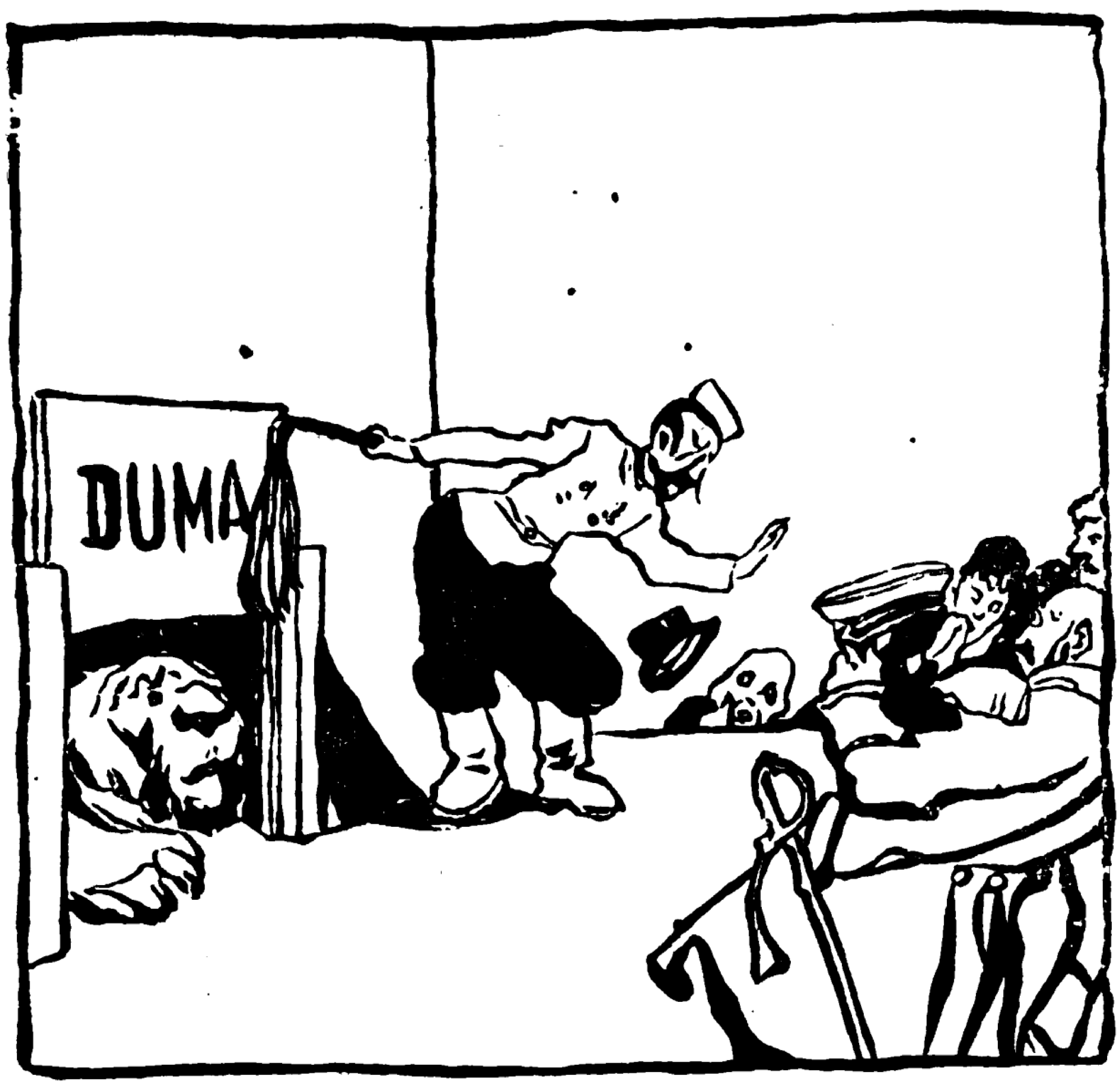
戰後露都に於て日本畫の展覽會を開きたる由なるが最近着のノーオエ　ウレミヤ紙上にクラフチエンコ氏は日本畫の趣味性質等に關して左の如き批評を爲せり

去る日曜日より技術奬勵協會に於て日本美術の展覽會を開きたるが特に日本畫の出品展覽を主とせる會なり此展覽會は中々の大會にて又甚だ趣味多き會なり勿論日本繪畫の展覽會は彼得堡の人々に取りて始ての事にあらず嘗て一八九六年にも美術大學校に於て同樣の展覽會を催ほせる事あり左れど日本の水彩畫家（露國の美術家は日本畫を以て一の水彩と見做すが故に日本の畫家を指して斯くいふなり）の驚く可き精巧なる技術と其想像と又其の驚く可き觀察力とは能く事物の特質を把持し一度之をその繪畫に現はすや觀者をして恍然他を忘れしむる活動を與へ然も其構想活動は悉く新奇の創意に出でざる無く觀者をして何時まで之を觀覽するも飽くことを知らざらしむるなり余は日本畫の展覽會が我國に始て開催せらるゝや此の驚く可き技藝が諸人に多くの趣味を感ぜしめたるを記憶せり又黑にて大膽なる輪線を畫き其に水彩繪工にて美妙なる彩色を與へたる此奇異なる灰色の卷軸の擴げられたるに對して人々が如何に注意して之を觀たりしかを記憶せり余は今回の技術奬勵會の展覽に往きながら嘗て余に與へたる彼の先きの強き感じは又余に刺激を與へざる可しと豫想せり而して此豫想は全く誤りなりき今回余の觀たる多くの日本畫の中には嘗て一度觀たる畫もありしが然も此高手巧妙の繪畫、この大膽なる畫紀この驚く可き水彩は余をして更に一層美に一層高雅に感ぜしめたり余は此繪畫に依りて日本の美術家中には其エロアトの古代より現今

に至るまでの我歐洲の美術の到底企て及ぶ可らざる程に自然人物動物等に通曉せる大美術家のある事を悟らしめたり日本の美術は是れ一種獨得の特種の美術なり日本の美術は我美術と大に異なれり我歐洲の美術家が數世紀間幾多の自然物を集め其材料を蒐集して出來得るだけ自然に近接せしめん事を努めたり然るに日本の畫家は只一物を取り來りて其れに生命を與へ且つ(屢ゝ一筆の暗示にて)其周圍の生活を畫き出し觀者をして其畫かれたる人物も動物も皆生きて飛動し物言ふかの如く感ぜしむるなり彼等の畫きたる想像的英雄の風貌は吾人がミケルアンゼロの古畫にさへも稀に觀る所の力と活動とを示せり其魚類鳥蟲動物の活動に至りては殆ど此類を見ざる絕頂に達せり

彼等日本人の想像は無盡藏なり此薄き畫絹の一小片を熟視すれば彼等の想像力は實に無限に働き始めつゝあり日本美術家の名は吾人は尙之を知らず其作者が北齋であれ四條家であれキシウであれ其は余輩の問ふ所にあらず吾人は只此目前に集蒐せられたる者と如何にして之を寫したかゞ必要なり無數の繪畫中には凡ての作の標本たる可き者あれば此日本の着名なる畫家の作を悉く我露國の博物館に蒐集するを得ば最も幸ひなりロンドン、ベルリン、パリー等の博物館には其目錄を一見するも日本畫の蒐集甚だ豐富なり而して是等の畫が露國より集められし者ならんには最も惜む可き事なり斯の如き繪畫を集蒐するは青年畫家の爲には實に是れ一大學校も同樣なり若し自家の甲殼の外他を知らざる我國の繪畫敎授が一度來りて此奇異なる繪畫を觀ば其敎授法を改良し後進を益する事如何に大なるや識る可からず

（時事新報）



NICHOLAS AS A BEAST TAMER.

THE CZAR (to his council)—"Don't be afraid, he can not get through so narrow an opening."　—*Kladderatsch* (Berlin).

面白き新研究

(一)接吻の種類　世界の多恨なる士女は市俄古のヘアルフレッドフロウラー氏の新發見に對し深く謝する所なかるべからずと云ふは氏が近頃專念接吻に關して研究する所あり一方ならぬ苦心を致して之に關する新著を大成せるが故なりといふ氏は之を入大別して情熱の接吻、慈愛の接吻(親子間)愛情の接吻(婦人間)敬虔の接吻、同胞の接吻(兄弟姉妹間)好奇の接吻、詐騙の接吻、害意の

る接吻の八種となし細密に之を說明し居るが故に人は氏の研究は氏の學位（バチエラー　オフ　アーツ）より値ありとせり氏は之が定義の興味あるものを抜粹せり

一、接吻は愛の天使なり（オヒツヮ）
二、接吻は愛の花なり（ニーン）
三、接吻は愛の細路なり（グラショー）
四、接吻は歡樂にあらず、歡樂への誘引なり（ラレドルフ）
五、接吻は心の本城を開く戸なり（レピス）
六、接吻は大膽、信念、愛情の表示なり（ネヒュス）

等數多あり又

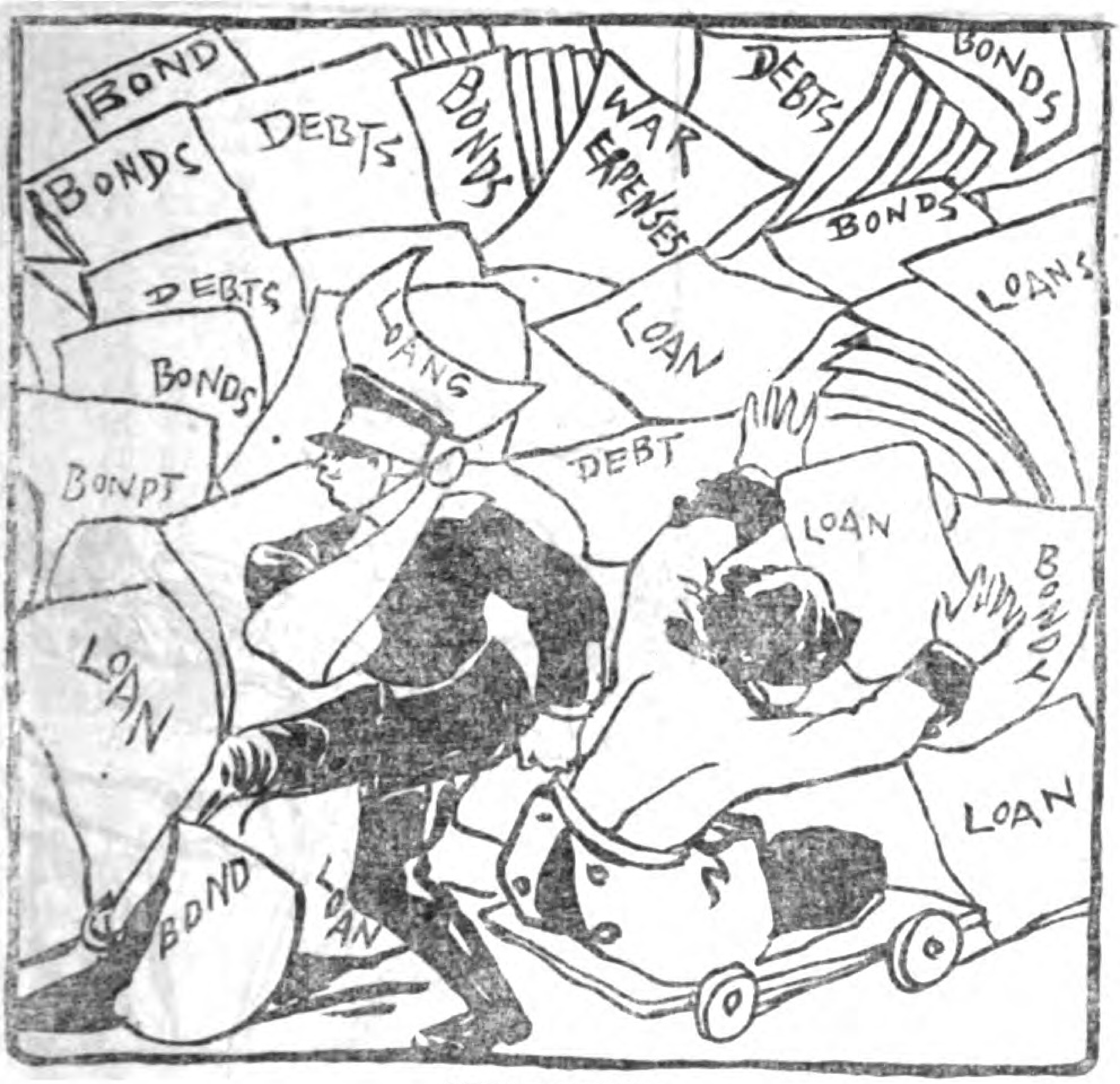
一、前額の接吻は智力の尊敬を表はす
二、頰の接吻は美の崇尊を表はす
三、鼻の接吻は不作法なる心意を表はす
四、頤の接吻は多少の親狎を表はす
五、手の接吻は謙遜なる聽したる樣を表はす
六、唇の接吻は愛情を來す

等諸種の觀察枚擧に遑あらざる程なり

（二）何故に上鬚を畜ふる乎

雜誌ガウロキの記者か一百人の名士に問を寄せて何故に上鬚を畜ふる乎の理由を質したるに其答樣々にして凡そ如左の割合なりし

削る事の面到故　六人
齒を隱さん爲め　一人
餘り鼻下長故　一人
寒さ凌ぎ故　三人
呼吸する空氣を善くす　三人
健康に必要なる故　七人
自己の好みによりてと云ふ者　十七人
細君の好みによりてと云ふ者　二人
女子の好まさるによつてと白狀するもの　六十人



AFTER PEACE.
The two combatants enter upon a harder struggle than ever.
—*Fischietto* (Turin),



樂天觀

竹越與三郎

近時世態人情の變遷に就いて、頻りに失望落膽の聲を聞くのは誠に歎息に堪えぬ次第である。教育家は口を開けば男女の學生が墮落して救ふべからざるとを云ひ、新聞紙は政黨議員の墮落を攻撃して止まず。道學家は又人情の輕薄、澆季、殆と形容すべからざるものであると云ふことを唱へ、多くの批評家は文學も亦退歩のみであつて、進歩の光を認むることが出來ぬと云ふことを論するのである。若し果して此の如く世態人情總て下りつゝあり、墮落しつゝあると云ふことであるならば、實に由々しき大事であつて、我邦は今や文明國であるとか、大國民であるとか云ふことを唱へて居るが、それは名のみであつて、實は亡國に近よりつゝあるので、世論が之に就いて憤慨歎息するは誠に尤もの次第であると思ふ。

* * * * *

併ながら世態人情が總て下りつゝあり、澆季となり、多くの階級が墮落しつゝあり、腐敗しつゝあり、退歩しつゝあると云ふことが、果して事實であるや否やと云ふことを先づ論定せねばならぬのである。抑々墮落と云ふことは、曾て高き處に在つたものが墮つることである、腐敗と云ふことは、清潔であつたものが、腐れたことでなければならぬ。今日墮落し、腐敗し、退歩しつゝあると云ふ世態人情は、曾て此以前に於ては果して清潔であり、果して健全であり、果して新鮮であつたや否やと云ふことを論究せねばならぬが、實は世間が墮落し、人情が下流に趨くと云ふやうな聲は、今日に始まつた聲ではない、凡そ社會が或る程度に達した時は、必ず既に聽いた聲であつた。吾々は古く支

那の書經に於て、惜しか秦誓であつたと思ふ、其中に人心惟微、道心惟危といふ文字があつて、此時代に於て既にもはや世の中が墮落して居ると云ふ聲を聞いたのである。吾々は又舊約聖書に於ても、世の中が末になりつゝあると云ふことを屢々繰返して聞いたのである。是より降つて支那歷代、及び我邦に於ても德川時代に於て、既に世は澆季となつた、世の中は末となつたと云ふことを屢々聞いて來たのである。若し當時に於て既に澆季となり、世の中が末になつたと云ふことが事實であつたならば、今日は此等の國民は、もはや滅亡し、若くは半ば獸類に化して仕舞はなければならぬ程のものであつたらうと思ふ。何となれば千百年の間腐敗の中に居つたならば、もはや豚が泥土の中に下つたと同じく、到底光明を認めて進むことは出來ぬからである。然るに此等の國民が今日如何なる有樣になつたかと云へば、澆季となつたと謂はれ、末になつたと謂はれた所の國民は、事實に於ては益々進んで來て、立派な國民となりつゝあるのである。支那は今日吾々の理想より謂へば、下流の民ではあるけれども、併ながら堯舜、六朝時代の民よりは、今日の民が遥に進んで居ると云ふことは掩ふべからざる事實である。今日が末であると云ふことは、堯舜時代を以て天國と認めて、天國は過去にあると信ずる一種の迷信から來る説に過ぎぬのである。又イスラエル人が今日最も人種として發達した頂上であつて、猶太當時の民よりも、今日の方が遥に進歩して居るのである。然るに猶太人を以て最も衰へたとか、墮落したとか云ふのは、これは天國はユーフレートにあつたのか、將た北極にあつたのか、さへも解することの出來ない迷信家が、天國は過去にあつたと信ずることから割出した迷信に過ぎぬのである。又翻つて日本へ來て見れば、我邦の漢學者が屢々人心の澆季となつたと云ふことを唱へるに拘らず、今日は武勇、公德、團結、紀律、獻身等の德に於て最も人心の進みつゝある時である、之を以て幕府時代因循羈絆の風に比較して見れば、雲泥の差があると云ふことは事實である。此の如く屢々聞いた所の、世

は澆季となつたと云ひ、人情は下流に趨くと云ふことは、事實に於て何等の結果をも生じて居らなかつたのである。是れ洵に其の歎息が悲観論者の着眼點の違ひから來るのであるからである。吾々はシュレーゲルの如く、人間は曾て善かつたものが悪くなつたのであるとは信じて居らぬ、吾々はヘーゲルの如く、善くも悪くもないものが段々善くなりつゝ進んで往くのであると信ずるのである。吾々は堯舜の時代は天國であるとは思はぬ。イスラエルの昔の時代が天國であるとは思はざるが如く、我邦の歴史に於て、天國があるとは思はない。然らば即ち今日は墮落末世でなくつて、寧ろ進歩の時代であると云はねばならぬ。此の如く歴史上の議論が既に間違つて居るのであるが、今日の人心を腐敗し墮落しつゝありと云ふことも、昔の儒者、昔の慷慨家が言つた如く、やはり着眼點が間違つて居るのではあるまいか。

* * * * *

先づ第一に男女學生の墮落といふことに就いて一言して見たいと思ふ。成程日々新聞の三面記事によれば、學生にあるまじき放埒亂行を試むる男子を見、又少女が學生に相應せざる擧動のあることを見ると云ふことは屢々である。併ながら之を以て今日の男女學生が、昔の男女學生に比して墮落したと云ふことを斷ずるに至つては、談、何ぞ易容ならんである。今日の政治家若くは老官吏が、口を開けば直ちに吾々が學生であつた頃は、今日の如きものでなかつたと云ふやうな事を並べるのは屢々であるが、併ながら是はいつもある事であつて、『おあん物語』でも『七十翁物語』でも『備前老人物語』でも皆な同一の事を繰り返して居るのであつて要するに老の繰語に過ぎぬのである。予は寧ろ今日男女の學生があるまじき事をする位の者の多いのを見て、直ちに世運の進歩であつて大に賀すべきことであると思ふのである。斯く言はゞ、予は男女學生の墮落を喜ぶかと云ふ者があるかも知れぬが、さうではない則ち學生にして不應爲の行がある位の者があると云ふことは、我が教育が普及したと云ふとを示すの

てある。則ち昔は僅に志ある者、若くは其の父兄長者に讀書家があるとか、若くは父祖の財産によつて一郷一郡の長者と謂はるる人の子弟若くは兒女ばかりが學問をして居つたのである。故に彼等は學問をせざる前に、もはや其の家風及び父兄長者の教訓によつて、立派な品行道德を持つて居るのであるから、學校に入つた後も亦必ず自ら信ずる所があつて、亂行若くは放蕩が少なかつたのである。然るに此等の一階級が學問によつて名を成し家を顯はすと云ふことゝなつて、教育の効果が大に現はれたに就いては、それ以下の者、即ち都市に於ては中等以下の商人の子供、郡村に於ては今まて舊家より卑められたる成上りの地主の如き者までも、其の子弟兒女を學校に出すと云ふことになつて、學生の範圍が非常に廣くなつたのである。則ち是に於てか其の家庭も、其の周圍も、其の交際も、不應爲の行を爲し易い傾をもつて居る學生が相率ゐて學校に入つて來たのである。則ち彼等は學問せざる以前に既に不應爲の行を恥ぢざる境涯に居つた者である、彼等が學校に入つた後種々なる不都合を行ふも敢て怪むに足らぬのである。今日短刀を揮つて喧嘩をし、其の友達を刺すと云ふ亂行の書生は、二十年前にあらしめば、田舍の鎭守祭りに相撲を取つて其腕力を誇り、郡村の子女を脅かし『ゐがみの權太』となりて得々として居るべき筈の人間であつたのである。今日三面新聞に唄はるゝが如き行状のある子女は、二十年前にあらしめば赤前垂をかけて、鮨屋のお里の如くに暮らすべき婦人であつたのである。然るに幸に社會の進歩によつて、此くの如き階級までも教育を受けると云ふ流風となつて、此の流風の爲に鮨屋のお里たるべき婦人が某女學校の生徒となり『ゐがみの權太』たるべき少年が某中學の生徒となつたのである。則ち彼等が墮落したるにあらずして、當然不應爲の行あるべき男女さへも、學校の生徒となつたのであるから、寧ろ社會の進歩であつて決して墮落てはないのである。當然不應爲の行あるべき男女すらも學問の必要を認めて學校に入ると云ふことは、寧ろ墮落にあらずして或る意味に於ては進

歩である。而して此新階級、則ち教育社會の新平民は、學校に入つて悉く亂行あるのではない、其中には切磋琢磨して、大工の娘が立派な女秀才となり、水呑百姓の息子が立派な學士となる者も少なくはない。此の如くして社會は日夜に進歩しつゝ、新時代の恩光は總ての階級に行渉りつゝあるのである。故に今日の教育は其の施すべき恩光を總ての階級に施し盡さぬと謂ふことは出來るけれども、男女學生が墮落しつゝあると謂ふことは、全く着眼を誤つて居るのである。教育は其の當然奏すべき効果を奏することが充分ではないと謂ふことは出來る、併ながら教育が全く失敗したと謂ふことは着眼の誤りである。

* * * * *

又政黨議院が腐敗したと云ふことに就いての攻撃も同樣である。政黨議院は他の社會と同じく、未だ其の天國として誇るべきものを過去には有つて居らぬのである、是から歩一歩を進めて益々吾々が理想とする所に達せんとするものである。其の理想に達せんとする道行に於て、或者は失敗し或者は不應爲の行がある。これは責むべき事ではあるが、併ながら墮落にはあらずして未發達であるのである。或人は明治十七八年の議員は今日の議員より盛んであつたと云ふことを言ふが、これは全く判斷が間違つて居るのである。今日の如く政黨議員に學識あり、品行あり、紀律あり、歩一歩と固めて、最後の目的の爲には多くの困苦を忍ぶと云ふことは、何時の時代にあつたか聞きたいのである。勿論之を理想に照して見れば、誠に不完全であつて、之を鞭つと云ふことは當然ではあるが、併し墮落腐敗と謂ふことは極めて不當と謂はねばならない。英吉利の政黨の如きもワルポール時代と號して、在朝者は總て黄金を以て議員を買つたと云ふ時代のあることは、世人の承知する所であらうと思ふ。併ながらワルポール時代を經、フォックス時代となつてもまだ〳〵此弊は去らなかつたのである、今日に於ても尚往々にして腐敗談を聞くのである。又英吉利の責任内閣の如きも、其の全然立派な制度となつたのはグレー若しくはメル

ボルン侯の内閣頃、即ち千八百三十年前後より、立派な責任内閣が立つたのであつて、今を距ること僅か七十年以前、始めて英吉利の責任内閣が根本より成立つたと謂つて宜い位なのである。それ以前にはカンニングの内閣も、グレンビルの内閣も、責任と云ふことは重んじて居つたけれども、確然たる基礎の立つたのはメルボルン内閣頃である。此の如く英吉利に於てすらも既に内亂を以て、暗殺を以て、又非常なる富の力を以て立てた責任内閣ですらも、其の由て來る所は僅か七十年以前であつた。而して其原因は千八百三十年頃より生じたる選擧權擴張運動と、ピール内閣の前後に生じたる非穀法運動の爲め、國民激昂して保守黨の中心たる貴族院に對して、非常の威迫を試みたるにあると云はるゝ位である。此樣の狀態であるから、加奈太の如きも責任内閣論は昔より存在するに係らず、眞に責任内閣の樹立せられたのは、千八百四十七年であつた。然らば即ち貴族院に味方して衆議院を擊つを主義とする新聞があり、議院政黨を讒誣するを職分として而して民黨の假面を蒙むる新聞紙がある我國に於て、三四年の間に責任内閣が立たぬからと云つて、議院政黨を腐敗したとか、墮落したとか云ふは、大早計の極と云はねばならぬ。予は在朝の老吏等が、政黨員新聞記者の腐敗を論じて、自から高しとする者あるを聞ごとに、笑止千萬に思ふことがある。今日の老吏中或は五十萬或は二百萬の產を有する者あり彼等の明治初年以來の月給を一錢も衣食に費さずして、貯蓄するも決して此巨富を作ることが出來る筈はないのである。然らば即ち其間他人に明言すべからざる手段によりて貯蓄したものと云はねばならぬ。此の如き老吏が國家の大柄を取つて居つた時代が、果して今日より清潔であると云ふことが出來ようか。余は嘗て實業家が議院の不潔を論ずる者あるを聞いて、不思失笑したことがあつた。そは此實業家は或る政黨の走狗となつて奔走する間に、其富を作つた者であつたからである。此の如き徒黨の飛揚したる時代は、果して今日より清潔であると云ふことが出來ようか。要するに政黨も亦他の階級の

如く進歩しつゝあるのである。議院も亦進歩の道行に居るのである。然るに僅か一二回の戰爭に勝つたとか、敗れたとかに依つて、一喜一憂し、甚しきは議會政治に失望する者を生ずるが如きは、實に短慮淺見の至りと謂はなければ成らない。予は大隈伯の口より往々議院政黨員の腐敗と云ふことを聞くごとに彼人の形影落莫を感ずるのである。諸君子は果して政黨が過去に於て天國を有すると思はるゝのであるか。如何な場合に於て政黨が吾々の理想たるべき位置を、過去に於て占めたことがあるのであるか。若し過去に於て立派な理想とすべき地位がなかつたならば、今日の政黨を墮落したと云ふことは大早計の斷言と謂はねばならぬ。思ふに我政治上の時代は、已に立憲時代に達して居るに係らず、其論客の多くは、漢學的の忠奸論を以て相爭はんとする人がある。其結果、反對黨となるや其政策の得失を論ずるに止らず、容易に其の心術を論ずるに至り、賄賂若くは權勢の分配を密約したりと云ふが如き文字を用ひて、他人を攻撃するの風がある。從つて無識の徒も、また之に雷同して一世を混濁したるかの如くに思ふに至る。普佛戰爭の時、巴里のコムミウス黨の新聞記者はチールが普國に讓歩したのはビスマークから賄賂を取つたからだなどゝ云つて、チールを攻撃したことがあるが、要するに立憲政體の進歩せざるは、此の如き忠奸論的の論法が勢力を逞して、一事意の如くならざるや、他を傷けんとして、自から其長城を破る者があるからである。近日一論者あり、余に對して議會の無能今日の如くんば、議會なき方然るべしと云ふ者があつたから、余は之に答て、議會は米の飯の如し。人其音澤に與れども、其美味を知らず、之を知るは飢餓に陷るの日である。此の如く國民が議會の有力を感ぜざる間こそ、有り難いので、若し議會の有難味を感ずる樣の時は、國家の不幸であると云つたのである。要するに政黨も議院も未發達である、發達しつゝある、進歩の道行にある。然るに此進歩の道行に於て、其の歩き方が鈍いとか遲いとか云ふことに就いて、失望し、若くは落膽し、腐敗し墮落したと云ふ

が如き聲を出すのは、新聞の三面記者が男女學生を見て、墮落したり腐敗したりと謂ふが如く、道學先生が己の若き時の善き事ばかりを回顧して、今日を澆季浮薄となつたと斷言すると同一事と謂はねばならぬ。予は此等の人々が進化主義を信ずるならば、支那人の堯舜時代を回顧することが不都合であると云ふことを了解せらるゝならば、政黨の理想を過去に置かずして、未來に置いて、大に人心を奮勵せしむることに骨を折つて貰ひたいと思ふのである。

* * * *

又一般の人情を墮落し、若くは澆季になつたと言ふ人に就いて、予は問ひたいことがある。過去に於て吾々は如何に誇るべき程の世態人情を有つて居るのであるか。泰西文明が未だ來らず、智識が未だ深からざる時代の日本は、今日の文學者若くは詩人の筆を以て之を歌つたならば、極めて醇朴にして愛すべき所があつたかも知れぬ。併ながらそれは或人或家であつて、社會全體としては矢張り亞細亞的の厭ふべき狀態を存して居つたのである。今日の世の中を澆季といふ人、腐敗したと云ふ人、墮落したといふ人は、如何なる時代に比して墮落したと云ふのであるか、如何なる時代が今日の人情よりも厚かつたのであるか、藤原氏時代であるか、鎌倉時代であるか、徳川時代であるか。予は日本の歷史に就いて研究をしたけれども、不幸にして未だ今日ほど進歩した時代を見て居らぬのである。吾々は文學者より、往々にして田舍は醇朴であると云ふことを聞く、併ながら詩人の詩、歌人の歌を取去り、而して田舍の靑き山、白き水を取去つたならば、村落の人情ほど不愉快なるものはない。單に人情より謂へば、都會の人情ほどコスモポリタンで、拘泥せず、洒々落々て、他を助け己も立つと云ふ文明流の人情に厚い所はないのである。之と同じく、過去の人情が美麗であつたと云ふやうなことは、一種の詩歌的の迷信であつて、決して實在の議論と云ふことは出來ぬのである。又歐羅巴諸國に比較して、吾々は我が人情を發達せぬと云ふことは、無論言ふことが出來るのである、

併ながら堕落したと云ふことは之を許さぬのである。歐羅巴と雖も今日の如き人情風俗となつたのは僅かに百年以來である、則ち最も歐羅巴の人情の美を發揮したのは、奴隷制度を廢棄したと云ふ一事である。併し其の奴隷制度なるものは、初めは基督教徒も見て少しも怪まぬのみならず、西班牙領の西印度諸島にネグロの奴隷を輸入して耕作せしむると云ふことは、耶蘇教の宣教師が始めて輸入したのである。其時は此宣教師は、西班牙の爲に勞力を輸入するのであつて、決して惡事とも慘酷とも思はぬてしたのである。然るに仁人義士が寄つてたかつてとう／＼之を廢棄することゝなうたが、此廢棄は今を距ること僅が百年以來である。一夫一婦の制度のやかましく言はれるのも百年このかたである。天涯萬里の地に傳道をせねばならぬと云つて非常の力を盡すやうになつたのも、新教徒としては五六十年このかたである。公德なる文字がやかましく論ぜらるゝことゝなつたのも、七八十年このかたの形况てある。此の如く最も著しい道德すらも百年このかたのものであつて、實に新文明が歐洲に富を與た結果である。何ぞ獨り日本が國を開くこと新しくして、人情風俗未だ歐羅巴に及ばざるを怪まんやである。魏の文帝の典論に、一世の長者、居處を知る、三世の長者服食を知ると云ふ文字がある。即ち三代分限にあらずんば、衣服飮食の眞味は譯らぬと云ふのである、况んや風俗道德をやである。我邦は舊邦と雖も其命維れ新たなりて、開國以來四十年、未だ成上り國である。其の風俗の雅醇ならざるや自然である。然れども是れは未發達に雅醇でないのであつて、腐敗でも、澆季でもない。故に之を我々の理想若くは歐羅巴に比較してまだ不足であるから、勉勵せねばならぬと云ふことは言へるけれども、もはや堕落した、腐敗したと言ふことは、實に大早計の斷言と謂はねばならぬ。堕落するにもせざるにも、腐敗するにもせざるにも、日本は未だ堕落すべき程の高き地位に居らなかつたのである。腐敗すべき程、清い處に居らなかつたのである、是より進むべき位置に立つて居るのである。

＊　＊　＊　＊　＊

余は樂天家である。余は實に時代の謳家者である余は時代の進步猶ほ春潮の來るが如く、靜かに然れども確しかに來りつゝあるを信じて疑はぬ。余は我社會が凡てに於て進步の途中にあるものであると思ふ。故に之をして其速力を迅からしめんが爲には、志士仁人が往々性急なる言辭を以て、之を鞭つと云ふとは、敢て異論はないのである、又之を鞭たんとして、屢々矯激なる言論を生じ易きは、亦人情の常であつて予は之を怪まぬのである。併ながら悲觀的に世の中を睨睥し之を罵詈し之を攻擊する、訐發的、彈劾的の言論が、古來幾千の効があつたかと云ふとは。予は少しく疑はしく思ふのである。之を聞く者は戒むるに足り、或は多少の効がないてはなからうと思ふ。併ながら概して世の中の改革の術としては、訐發的彈劾的の言論は甚だ効能が薄かつたてあらうと思ふ。世の中を導くは猶ほ日比谷の原に於ける大群衆を導くが如きものである。之を導くは唯高き旗の外ないのである。理想の旗を掲げ、慰樂の言論に依り、鼓舞し、作興し、之に勇氣を與へて、而して理想に導くと云ふとは、最も一世を導くに足る方法であるが、之を攻擊し、之を罵詈し、其短弊を訐發すると云ふが如きは、日比谷の大群衆に向つて劍を揮ひ、鞭を加へると云ふが如きものであつて、偶々彼等を狼狽せしめて、思はざる所に走らしめるの外、何等の効がないものであらうと思ふ。故に予は玆に樂天觀を述べて、一世の中の事必しも悲觀するに足らざることを說き、一世の士君子が樂天觀によつて國民を導くことに注意せられんことを望むのである。（畢）

明治闇黑史（十二）

有磯逸郎

○河野廣中等の福島事件（下）

『何んぢや、今度の騷擾て、河野廣中は、いよ〳〵拘引された！』、『ホ、左樣かい。我輩は、頓と、新聞など

いふものを見ないから、知らずにゐたが、河野廣中が、福島事件の昔日に若返つて、又候監獄の飯を食ひよるとは、ちよと妙ぢやわい……ナニ、我輩が前に言ひよつた言葉が、中らなかつたと、馬鹿を言へ、まだ豫審の決定も見ない中から、關係があるの、何のと、速斷する譯には行かぬわい、よしや、河野が關係があつたとしてもが、果して河野自身の發意で遣つたものであるか、如何か、判つたものでない。それに、我輩は、河野といふ男の性格から割り出して言つたので、世の中の事ちゆものは、性格通り行くと、天下泰平。いや、今度の事件は、如何でも良いとして、二十年前の、福島事件に泝つて、前號の話說を續けやう。』

『福島無名館から出張した鎌田直三、佐藤淸の二人は、會津地方に行く路にて、鎌田は、不意に、捕縛されたので、左樣ぢや、山都村で、捕縛されたのよ、佐藤、一人、若松地方に着き、新合村の訴訟事務所――同地方の、有忠の集會所ぢやつた訴訟事務所に着いて、彼の宇田成一等に會つて見ると、佐藤等が、福島て想像したよりも、役人等の暴狀甚しく、特に、耶麿郡などと來ては、人民は、夫賃の支拂を停滯したちゆので、一村の中、四百戶餘も、差押を食つてゐるといふ有樣。郡役所に出てて、法律を楯に、その亂暴を詰ると反對に、役人風を吹かせて、即時夫代金を完納せざれば、公賣處分に附すと、といふケンもホロ、の挨拶、餘りに郡役所の遣り口が、傍若無人ぢやつたから、渡邊數馬、飯田新五郎の二人は、郡書記の中里某とかいふ男に會つて、出訴中は、服從の義務なきを抗言すると、怒つた、怒つた、嚇と怒つて、屁理屈は聞く耳なし、理か、非理か、考へて見よ、といふ見識で、連れ立つて來た人民ぐるみ、まア亂暴な役人もあつたもの、渡邊等を家に歸へさず、郡役所の廣庭に、巡査に取り捲かせて、そのまんま、一夜を明かさせたといふ事、然かも、此れは、ちら／＼雪の降つた、十一月の末ぢやつたのよ。』

『役人といへば、下役人の郡書記でさへ、斯んな見幕ぢやつたから、土木工事附近の、村民等の反抗は、

日一日に激甚に趣き、佐藤が、若松に着いた頃は、方に、その絶頂に達してゐたのぢやつた。此際、郡長等は、ちとばかり手加減を用ゆると、大事には至らなかつたぢやらうに、郡長等は、ます／＼官威を笠に着て、差押へて置いた例の財産の公賣處分に取り掛つたのは、騒擾の根源、……渡邊等を、郡役所の廣庭に虐めて間もなく、十一月の十七日といふ日に爲つて、公々然と、掲示を掲げ公賣處分に取り掛つた、然かも江戸の仇敵を長崎で撃つ筆法て、骨の硬い連中を選んて公賣處分を食はせたのぢや。が、可笑しかつたのは、何者も入札に來る者が無かつたものぢやから、村民の嫌つてゐた土方の某に、そつと、鼻藥を與れて、漸やくにして、此日を胡麻化したそうぢやが、その落札價格は、酷いものぢやつたわい、米一石は、一圓五十錢！籾一石は、六十錢！箪笥一棹、二十五錢！疊一枚、四錢五厘！』

『佐藤淸は、福島に歸つて、此れ等の情況を報告したので、その報告を受取つた無名館の騒擾といふものは無かつた、東京に、急使を發して、寧靜館に應援を請ふと、前にいつたやうに、高知縣の壯士て、當時名高かつた荒尾角藏や、岡本正榮等は、來る、杉山重義、澤田淸之助も、若松地方視察として、東京本部の內意を含んで、來る、半生を陰謀の中に消らした、群馬縣の伊賀我何人等も、來る。參事院に出てゐた河野廣中も、來た。此時、寧靜館の幹事を遣つてゐたのは、後に、日本鐵道の開通を機として、高崎で、一擧に參議連を撃殺さんと謀りよつた宮部襄おやつたが、福島表の急報を得て、獨り笑壺に入り、大井や、星等と謀つて續々壯士を福島地方に派遣つたのぢや。』

『福島地方の御大將、河野廣中が、福島に着いたのて、無名館の作戰計畫は、爰に、略ぼ定つた、それは、彼の新合村の訴訟事務所を助けて、土木工事の中止を謀ると共に、更に、縣廳に開申書を出だすとに、方針を定めて、澤田淸之助等は、若松地方に出張すれば、中島友八、五十嵐武彦の二人は、委員と爲つて、縣廳に出頭するよと爲つたのよ。丁度、此時、時の內務卿

山田顯義は、福島縣に遣つて來たので、郡長等は、奥印付ないので、縣廳の出頭が延びてゐたのを幸機に、山田内務卿に會つて、當局者の暴虐を訴ふることゝ仕た。左樣ぢや、當時縣令に捧ぐる人民の開申は、所轄郡長の奥印を要する規ぢやつたのよ。』

『當時、中島友八は、縣會議員ぢやつたから、内務卿に面謁する便宜があるといふので、中島は專ら内務卿面謁の任を帶び、一封の陳情書を懷中にして、豬苗代疏水工事を巡覧してゐる山田内務卿を目途に、豬苗代の山潟村に赴く。山潟に着くと。内務卿は、安積郡の開成山に向はれたといふので、又もや、引ッ返へして、開成山に出て見ると、還は如何に内務卿は、須賀川に立たれた後ぢやつたので、中島は、驀地に、その後を追ふて、須賀川に着いて見ると、最う白川に立つた跡ぢやたから、流石の中島も、落膽したさうぢや、成程、中島の身に爲つて見るちゆと、其樣ぢやつたらうと思はれるが、更に、勇氣を鼓して、白川に辿り着いたのは、なんでも夜の十一時頃ぢやつたさうだ。東北に育つた中島は、深夜を推して、内務卿の旅館を訪ふと、内務卿は寢所に就かれたといふので、引ッ返へし、翌、早朝、午前四時頃、再び旅館に尋ねると、内務卿は、最う栃木縣の那須原に急行したといふ後ぢやつたのよ。その後、中島は、何時も言ひよつた、佐倉宗五郎が、江戸に出た心持は、斯うぢやつたらうと、内務卿の後を追つてあるいた、あの忙しい時に、胸中に浮んだと言ひよつたわい』

『中島の内務卿面謁は、斯んなブマに終つた、扨て、縣廳部面を擔當した五十嵐武彦の方は、如何ぢやつたといふに五十嵐は、郡長の奥書を拒みたる理由書を添へて、開申書を提出して、屬官を通じて、縣令に謁せんとを望むと、縣令は、近頃參廳がないと跳ね付けたので、更に事務を代理してゐるといふ村上書記官に接見したいと言へは、成規の手續を履まざる開申書は、受理し難しと、幾多の表情を籠めた、その開申書を投げ付け、つと、その儘、書記官の面接さへ辭つたので、此の五十嵐の方も、中島と同じく、不得要領に終つた

のぢや。此時、會津地方は、火花を散らして、土木工事の中止て、騒いでゐたが、福島の無名館——自由本部では、愛澤、平島、田母野等は、五十嵐の報告を得て、今更のやうに、縣官の暴狀に驚き、天を仰いで、浩歎してゐたが、會津方面から、日一日と櫛の齒のやうに、急報が來るので、田母野秀顯、平島松尾の二人は、河野廣中の甥の、河野廣體等と、荒尾角藏、伊賀我何人等を伴ふて、若松に出發した……ます／＼危急に迫つて來たわい」

「若松方面の有志者本部ぢやつた訴訟事務所は、此時、如何ぢやつたか、といふに、訴訟事務所の提出した勸解の申請が、若松裁判所で、棄却されたので、宮城控訴院に控訴せんと、宇田成一、山口千代作の二人は、總代と爲つて、宮城縣に出發したが、宇田等が、宮城出發の風聞傳はると、各郡の人民は、我も／＼と同意して、その數、八千餘通に及んだそうぢや、ハッ／＼、會津地方の村民等は、三島には、餘程手古つたものと見ゆるわい、宇田等が、福島に出て、無名館に、河野廣中を尋ねて、控訴の事を話すと、河野は勝敗の數明らかならざる今日、控訴を起こすは、輕躁なりと說破したので、山口は、東京に出て、法律家の交涉を擔當し、宇田は、その儘、會津に引ッ返へしたが、間もなく、此の六郡、六十六町、四百九十三村聯合の主動者ぢやつた宇田成一は、詐欺取財の嫌疑を以て、若松警察署の手で、拘引と爲つたのぢや」

「宇田拘引の報、四方に傳はると、豫て訴訟を委任してゐた町村民は、總代の拘引せられたるは、我々の拘引せられたるなり、救はざるべからずと、集つた、集つた、先づ耶摩郡の町村民は、喜多方、其の他に、集つた者、無慮、二千幾百名。宇田救援を名として、警察署を目指して、進行した。宇田成一の拘引は、導火線と爲つて、町村民の動搖が初ると、三島は、待つてゐたといはぬばかりに、本來の性格を發揮して、直に大捕縛に取り掛つたのぢや。今から思ふと、町村民の騒擾も、仰山ぢやつたが、三島の遣り口も、輪を掛けて、仰山に出たから、爰に、官民の一大混戰が初ま

つたのぢやが、是より先、何ぢやつたわい、三島メ、豫め覺悟しよつたものと見え、少しく腕力ある者と見れば、誰れ彼と撰はず、巡査に採用して、若松附近に配置したので、一時は、五百名以上も、新顔の巡査が出來た。そして、一々佩劍を與へよつたものぢやから、一時は、若松市中に刀劍の價が騰つたと聞いて居る。ハツ〳〵、三島も仰山な男ぢやつたわい』

『斯んな風に、初手から、三島は、喧嘩腰に出てゐたものぢやから、官民の間は、既に數月前から、睨目比、殺氣充滿してゐた最先、宇田拘引の急報が、傳つたものぢやから、堪らぬ、之を機會に、何人が煽動したといふでもなく、また何人が率ゐたといふでもなく、一聲に起つて警察署に推し掛けたのぢや。……此の亂民の間に、秘密探偵の安積戰メ、鼻棒に立つて、種々の献策を遣りよつたのは、我輩は、顔を知見つてゐる丈け、今に癪に障つて爲らぬ。左樣ぢや、あれは、警察署を襲ふた頃ぢやつたと思ふが、新合村の訴訟事務所て、赤城平六等は、長坂八郎、伊賀我何人、大木權平等と、かにかくと評議を凝してゐると、安積は、澄まアした顔で、

一、一村に差圖役を置き其村に什長を置き總て同衆の差圖を爲すものとす、但し差圖役は總理の命令に隨ひ、什長は差圖役の命令に從ふものとす

一、不慮の合圖の爲め、一村に太鼓又は番木を設け置き、事あらは之を打ち鳴らし、同衆を招き集むべし

一、急速武器を調達し、總理本部へ運送、並に各自も用意の事、但し運送の折は、菰包みとし、外見を憚る事

一、番木或は太鼓五ツ打ち鳴らす時は兵糧の用意を爲すべし、十五以上の壯士結束して、合圖の場所へ馳參する事、但し握飯の中に、梅干又は味噌を入るべし

右約束に背く者は首を斬つて同衆に狗ふものとす

といふ書付を、評議の場所に出した。暴動者自身には、未だ何等の準備もなく、警察署の襲撃なども不意に起

つたのは、探偵殿は、何處で、如何考へたか、整然と、早手廻はしに作戰計畫を書付にして居つたから、不思議だらうではないか』

『と、小田原評議を遣つてゐる中に、はや、三島流の大捕縛が初つて、警察署襲撃の起つた翌朝、即ち、僅に三四時間の後に、長坂八郎を初め、新合村に居合はせた連中は、悉く捕縛せられ、その翌々日――十二月一日の午前一時、福島表で、河野廣中、愛澤寧堅等は内亂陰謀といふ罪名で、捕縛されたのぢや。次いで、自由主義を執れる縣會議員も、續々と、拘引せられて、爰に、三島の獨舞臺で、わい／＼と騒いでゐる中に、福島事件は、大團圓と爲つた。……ナニ、河野等は、之で、如何して、國事犯と爲つたのぢやと！其樣な事は、我輩の知つた所ではないが、兎にかく！福島事件といふやつは、言つて見ると、あら／＼這んな事實さ、ハツ／＼、誓約書一枚が、唯一の證據と爲つて、イの一番に、政府に高等法院を開かせよつた河野も、豪いといへは、まア豪い男に仕て置かうよ』

＊　＊　＊　＊

初めて、本誌に、明治闇黒史を掲げたるは、本年一月。明治闇黒史も、十二回を續けて、明治三十八年も、玆に暮れんとす。余は、反省社主麻田氏の囑に應じ、別に、一冊として『明治闇黒史』を出だすの計畫あるを以て、本稿も、匆卒に、筆を收めて、之を以て完結とすべし、福島事件の如き、記すべき事多しと雖も、省略して、來春發行する『明治闇黒史』に詳述すべし。尙、『明治闇黒史』の發行は、本月を期したりと雖も、脱稿せんとする際に、意外の材料手に入りたるを以て、其の内容を完全にせんが爲に、發行を來春に延期す。讀者、豫告の相違を尤むるなくんば幸甚也。

有磯逸郎再識

▲豫告▲

怪物傳

覆面冠者

次號より、本欄に、題名の如き一大記事を續載せんとす。宗教家あり、實業家あり、發明者あり、探險者あり、美人あり、文人あり、壯士あり、強盜あり、其の生活と、境遇の變怪なるが爲に、世に冷視せらるると雖も、亦た一種の人才、人豪。覆面冠者は、其怪筆を以て、其の面目を發揮せんとす。讀者乞ふ新年號の出づるを俟て。

女王マリーの臨終

丘山生

二月七日火曜日、シュリスベリー及ケント伯はフォーセリンゲーに着して、女王に謁見を求め、其面前に於て死刑執行狀を讀み、且翌朝死すべき用意をせられむことを求めたり。マリーは騷がず動ぜず、靜かに終はり迄聞取り、上帝、耶蘇及生甦の名を念じて自ら十字を結び、「五體は死刑執行人の打擊を忍ばざるべからずとて、其を怨むの精神は決して天上の幸福を受くるの資格なし、縱ひ吾エングランドの女王が敢て一天万乘の聖體を汚すの先例を作ることを豫期せざりしとはいへ、さはいへ吾は神明が余の運命なりとて命ずる所のものに、喜んで服さゞるべからず」と宣ひ、猶曾々其傍へにありし聖書に手を置いて、バビングトンがエリザベスの生命を危くせんとの陰謀には、全く關知せざることを嚴かに誓じ給へり。女王は自ら手紙を以てエリザベスに要求したる事柄を兩伯爵に告げたれども、更らに要領を得ず。彼女は臨終の際に自宗の僧侶の侍するを許されたきこと、及己が信ずる宗旨より導き作られたる敬虔なる諸儀式によりて、慰藉を得たきことをいと熱心に懇請せり。されどこの殘酷極まる犯罪人にも許與さるべき恩惠すら、全然拒否するところとはなりぬ。

この會話の間、女王の從者等は面前にある二伯の威に恐れ、又僅かに其悲愁を抑へ得たりしとはいへ、流なす涙に濡れ居たりしが、二伯の退き去るや否や彼等は女主人の傍へに走り寄り、哀傷悲痛の最も痛はしき樣に取亂したり。されどマリーは自ら心を全く平靜に持したるのみならず、從者等の限なき悲嘆をなだめんと勉めつ。家人を悉く集めて共に膝つき、浮世の煩ひの今や終はりに近づきたるを天に感謝し、平然自若猶殘れる苦痛にたへ得んことを祈りぬ。彼女は夕への多くを此の世の事務を片附くるに費せり。彼女は自らの手にて遺言狀を書きぬ。金錢、寶玉

衣服は、其地位其の勲功に應じて、それ〴〵己が從者の間に分ち與へぬ。彼女はフランスの王國へ宛てゝ一通の短かき手簡を認め、他の一通はギイスの公爵に宛てぬ、これ等は柔和なるしかも大度なる情想に充てるものにして、彼女の心靈を神に祈られんことを求め、悲哀に沈める從僕等の保護を依賴せるものなりき。晩餐に臨んて彼女は日常(いつも)の如く適宜に食事を濟まし、平懸といふよりは寧ろ快濶に會話したり。彼女は從者の凡ての者の健康を祝し、彼に對する義務に於て苟も欠くところありしならば。そは許されよと求めぬ。日常の時刻に至りて彼女は床に就き、二三時間穩かに眠れり。

翌朝早く彼女は一間(ひとま)に閉ぢ込み、神への奉事にいと長き時を費やせり。八時に至り地方長官は其屬僚を率ゐて女王の室に入り來れり。時に彼女は猶聖壇に膝づきつゝありき。彼女は直に立上り、威ある態度、怖ぢざる寧ろ快濶の面持を以て、フォセリンゲーの城主なるパウレットの二人の從者に助けられつゝ刑場へと進みぬ。彼女は着こなしよく、華奢なる喪服を身に着けしも、そは稀に祭禮の折などに用ゐしのみにて、久しく仕舞ひ置きしものなりき。首には香ひ玉にて神羊を下げ、帶にはじゆずを、片手には象牙の十字像を携へたり。二人の伯爵は隣國より來りし數名の紳士を從へて、階下に女王を迎へぬ。女王の執事長なるサーアンドリュー、メルビルは數週間女王の身邊より遠ざけられ居たりしなるが、其處に最後の訣別をとることを許されたり。此の時此の場合、彼は彼が心より愛し奉りし女主人を一目見るや否や、忽ち涙にかきくれぬ。彼はスコットランドに至りて、かゝる痛ましき出來事の話を傳へよと命ぜらるゝや、女王の境遇を嘆き、己が辛き運命をかこちしかば、マリーは答へて、「泣く勿れ我メルビルよ、今こゝに喜ぶべき大なる理由あり、汝はこの日マリースチユアルトが凡て浮世の心配より引離され、兼れて待ち設けし如く長かりし苦痛のこゝに終はるを見るべし、我が宗旨に對して信を變へず、スコットランドに對しては確(かた)く忠實の心を失はず、フランスを愛することを終始變ぜずして死するを見屆けよ。我子にはよきに申せ。彼に告ぐるに我が彼が國に對して何等の害を與へず、又彼が名譽、彼が權利を傷くることなかりしを以てせよ。神に許せ、理由(いはれ)なくして我血に渇ける凡ての者共を許しませ」と。

懇請に懇請を重ね、漸くにして彼女は二伯を說き服し、メルビルをして他の三人の侍女と共に、斷頭台下の段迄つき從ふを許さしめたり。段は彼女が訊問せられし室に、少しく床の上を高うして立てられしもの、椅子、椅子蒲團、斬首台は皆一樣の黑布にて蔽はれたり。マリーは快濶に階段を上り、平然たる容貌を以て、これ等死刑の機械を見渡し、十字を結び、讚美を歌ひつゝ椅子に座をとりぬ。ビールは聲高らかに死刑執行狀を讀み上げたり。彼女は他の思ひに心を奪はれしごとく、それには無頓着に耳傾けぬ。ペーテルボローの監督牧師は彼女の現狀に適へる敬虔なる祈禱を始め、彼女の爲めに上帝に祈を捧げぬ。彼女は誠心其祈禱に聞く能はず、又相共に祈を捧ぐる能はずと言はせられて、自ら讀つき、ラテン語の祈禱を繰り返しぬ。牧師が其祈禱を終はりし時、彼女は

聞取得べき聲にて、しかも英語にて、沈淪せる我教會の狀態を神の救ひに依賴し、我子孫の繁榮、エリザベスの治世の平穩長久ならむことを祈れり。彼女はたゞクリストの死によりてのみ、慈悲を得んことを乞ふ旨を述られぬ、實に彼女は今其人の像の下に喜んで血を流すなり。かくて十字像を捧げて之に接吻し、猶「おゝ、ジユサスよ、汝の手が十字架に廣がれる如く、汝の慈悲の手を廣げて我を迎へよ、而して我罪を許せ」と宣へり。

かくて彼女は覆面をとり、上衣を脫ぎて首斬らるゝ用意をなしぬ。刑執行人の一人は恐々しく其を手傳はんとしたりしかば、彼女は穩やかに彼を斥け、微笑を湛へて、かゝる多くの觀客の前にて衣服を脫ぐことに馴れず、又さる從僕によりて助けらるゝことに馴れざる旨を語れり。落付たる毫も驚かぬ態度を以て、彼女は首を斷頭台上に橫へぬ。一人の刑執行人は彼女の手を抑へ、他の一人は第二の打擊を以て其首を打落したり。頭飾の落ちたるを見れば、心配、悲みのために頭髮全く灰色に變じたるを見たり。刑執行人は猶生血の流るゝ頭を高く揭げたり。監督牧師は「かくしてエリザベス女王陛下の敵は悉く亡びたり」と呼はりぬ。ケント伯は獨りたゞ答へてアーメンと、他の觀者は默すること依然淚にかきくれて、此場合、同情賞讃の外、他の感想あるなし。

侍女は一人も彼女の死體に近つくを許されず、遺骸は刑場に隣れる一室に運ばれ、玉突台より裂き取りし粗末なる布に蔽はれて、數日の間其處に橫はれり。斬首台及その下なる段、刑執行者の前垂、其他血に汚れたるものは悉く火に投じて灰となしぬ。程經てエリザベスは王者の壯麗を以て、その死體をペーテルボローの本山に葬ることを命じたり。されどこは空しく企てられし卑しき策略に過ぎざりき。如何に華麗なる葬儀の裝飾も、マリーを殺したりといふ人々の悲慘なる記憶を消すこと能はず。ヂエムスが英王の位に即くや、程なく遺骸をウエストミニスターアベーに移して、英王歷代の間に列せり。かくしくスコツトランドの女王マリーの慘憺たる死は、御年四十四年二ケ月、囚牢の身となりて殆ど十四年の後にぞありける

——蘇國史より——

本號には鏡花氏の苦心談を揭載する筈なりしも氏微恙ありて果たさず、鏡花氏と懇意なる某氏の此篇を以つて之に代ふ

著作中の泉鏡花

S T 生

招けば活きた魚も來る、睨めば美しい木の實も落つる、袖を翳せば雨も降るなり、眉を開けば風も吹くぞよ。とは、本題の鏡花氏が著作、高野聖中の一老爺が、その孃樣の事を序した言葉であるが、筆と劍との相違こそあれ、作家が其机に向つた時は、軍人が其戰場に臨めるにも增して堂々たるものであつて、彼の提督某

が、敵の艨艟三十餘隻を唯一晝夜にして全滅に皈せしめしが如く、又○軍の某が、難攻不落と恃みに恃みし敵の要塞旅順口を唯數ヶ月にして開城の據無きに陷しめしが如く、一小作家鏡花氏も、其机に向つては、何事も意の如くならずと云ふ事はない。

然ればと云つ鏡花氏には、何も參謀が居る譯ではない、數万の麾下が在る譯ではないけれども、渠には渠の天才があるので。

從つて其作物や、山無き處に山を築き、川なき處に川を鑿ち、雲なき處に雲を起し、招けば活きた魚も來る、睨めば美しい木の實も落つる。袖を翳せば雨を降るなり、眉を開けば風も吹くので……。いざ稿を草さうとなると其用意も一通りでない。

先づ其を申上げる前に、余は鏡花氏の武器と云ふのを一通り紹介しやうと思ふ。

武器と云つても、大砲や、軍艦や、小銃の事を云ふのではない。所謂作家が唯一の武器、筆と紙との事を云ふので。

△机

は白木造のお粗末なもの、と云つては失禮かも知らぬが、先師紅葉氏から贈られたもので。師の紅葉氏も、是に依つて金色夜叉を描き、是に依つて多情多恨を描かれたのであるが、實際、何處の勸工場にでもあらうと云ふ、抽斗の二つ付いた、長の高い、二尺に三尺ぐらゐの巾の。上には茶に唐草の模樣のある羅沙の机掛こそ懸つて居れ、氏は其ぐるみ貰つたのださうで、其さへはや色は褪せて居るが、先師が唯一の紀念として、女中に拂も當てさせず、掃除をするなら自分でするて、大事にして使用して居る。

△硯

是が又珍物で、珍物と言ふと、何か然も、大した端溪の硯か何ぞのやうに聞えるが、豈計らむや、大層な相違。石は、斑のある大理石？――惡くすると蠟石かも知れない――大きさは、其の机の上には、最も相應しくない小さなもの、金尺で三寸に二寸ほどもあらうか、厚さ、又之に適うて、中央が凹んで居る。

其が、何うして珍物かと云ふに、氏のお父さんの清治と云つて――今は素より亡き人であるが――名工の象眼師が、曾て故郷の金澤から、東京の博覧會へ、銀細工の香爐を出品して、其の景況を見に出られた時に、兄貴の鏡太郎へ土産にと云ふので、買つて歸られたものださうで、謂はゞ其時の紀念品、はや草双紙を讀覺えて、妻亡き象眼師が二階の一室、四疊半の書齋に籠つて、覺束なくも母なき稚子が小説の眞似事を始めた。八つ、九つぐらゐからの遺物。

師の紅葉氏が玄關に在つた時分は素より、志を立てゝ東京に出た時、鏡花水月を書いた時、食ふに困つて鎌倉へ行つて居て、錢がなくて、原稿用紙が買へなくて、法華經の裏に書いた時、乙羽氏の家で外科室を書いた時、大塚の家で湯島詣を書いた時、榎町の家で高野聖を書いた時、今の家で（神樂町）白羽箭を書いた時、逗子へ行つて居て胡蝶之曲を書いた時、皆此の硯に依らざるなして、引越をすれば引越した先、旅行をすれば旅行先へ、必ず其硯が――小さくて、携帶に便な所爲もあらうけれど――氏の身邊の何れにか附隨して居るのである。

此間も、余が鏡花氏を訪問した時、氏は久々で二日間ばかり、神樂町の自宅に歸つて來たのださうであるが、其でも――宙外氏から贈られたとか云ふ――會津塗の短冊形の、上に紅葉の蒔繪をした筆入の中から、右の硯を筆と共に出して來て、机の上に置かれるのを見受けた。

△筆

此の又筆がお粗末なもの。

何處へ行くにも著いて廻つて居る處を見ると、硯は[illegible]が劍のやうなものであるが――由緒こそ慕はしけれ、其さへ餘り名劍ではない處へ持つて來て、謂はゞ軍人の兵粮とも云ふべき、筆は牛込神樂坂上の魁雲堂とか云ふ小さな筆屋の、一本四錢もしやうと云ふ、たしか方寸千言、お負に其の兵粮一本で、二三十枚も書かうと云ふ騒。

△墨

是が又名墨でない。大きさこそ硯に相應しい小さなのであるが、仝じ魁雲堂で暮に買つた、墨寶、此價一本二十八錢也、然かも一年はあると云ふ話。

△紙

彈丸か。其さへ機關砲のやうな結構なのではない、別に鏡花用箋と書いてある譯でもなければ、罫が引いてある譯でもない、一帖二錢五厘か、三錢の改良半紙。但し仕入先は矢張神樂坂上の相馬屋。先師も此店が御用所だつたさうで。氏も永年の御贔負店、十數年は買つて居ると云ふ話。魁雲堂も師の御用店で、紅葉氏のは黒軸の狼毫小楷(一本四錢)と云ふのであつたさう。其も十數年の御贔負店なり。其換、鏡花氏のは、半紙を二つ折にして其間へ、十行二十字の罫紙を入れて書く。

△罫紙

罫は淺黄色の十行二十字、矢張相馬屋の出來て、改良半紙であるが、其も書く度／＼に新しく取換へるのではない、年數にして、二年、三年、四年、五年と、原稿紙にして、百枚、二百枚、三百枚、四百枚、乃至千枚、二千枚と、書けば書くだけ、古くなれば古くなるだけ、段々書心地が好いと言つて居る。と云ふのはその罫紙が古くなればなるだけに、紙質が段々薄くなつて來て、滑ッこくなつて來て、挾むにも挾みよし、罫も段々薄くなつて來て、最初は判然(はつきり)と移つてゐたのが、忙然(ぼんやり)上へ移つて來るので、筆が罫へ引懸らなくなつて來て、罫が邪魔にならなくて可いのださうである。

然れば、其罫紙に就いて面白い語がある。

其はまだ鏡花氏が乙羽氏の宅に居た時分ださうであるが、其頃文藝へ續物で出て居た五之卷か何かを書上げて、博文館の編輯へ持つて行くと、歸つて來て机の上に——いつもなら何はなくとも罫紙ばかりは乗つかつて居る筈の——罫がない。緣の障子でも開けた時に、風に吹飛ばされない用心をして、外へ出る時には必ず其上に文鎭を乗つけて行く、其の文鎭は机の上にあるが、何うしたものか、罫紙だけがない、さあ鏡花氏は

青くなつて探し出した。
　折角あれまでに使ひ込んだものをと云ふので――餘程書心地よく、古くなつてゐたものと見える――惜しくて惜しくて耐らない、が幾ら搜してもない、家の人達に聞いても知らぬ。
　明日からは何うして書かうとまで――換は、大枚二錢五厘さへ持つて行けば、相馬屋で二十枚はくれるが――夜一夜心配をしたくらゐ。
　と、翌日の朝になつて、事に依つたら昨日持つて行つた五之卷の原稿の中に一所に綴込んで持つて行きはしないかと氣が着いたから耐らない。
　直ぐに上の家（其頃乙羽氏の宅を新宅と云ひ、佐平氏の宅を上の家と云つて居たさうで）へ行つて電話を借りて、編輯の乙羽氏に、昨日の原稿は那のまゝに――活版所へは廻さないで――と頼んで、戸崎町の角の燒芋屋から俥に飛乘ると　そのまゝ博文館へ馳着けた。編輯へ行つて調べて見ると、又好鹽梅に五の卷の原稿の一番おしまひの處へ挾つて居たさうで、其時の嬉しさはと其頃人に話して居たのを聞いたが、其後大塚の家でも一度。
　乙羽氏の宅でその事在つて以來は、一々原稿を持つて行く時に、氣を着けて原稿紙を調べて、例の如く机の上に文鎭を乘つけて了はない内は、手渡しも、又持つて行きも、郵便で出しもしない事にして居たが、其てさへ、鏡花氏の作ではないが、忽焉として姿を隱して了つて、驚いてゐた事があつた。と然る人の話を聞けば、其時も蒼くなつて、騷ぎ出して、家の人達も手分をして搜し出したが。
　一體此の大塚の鏡花氏の宅と云ふのは、名題の鼠の多い家であつたさうで――矢張り此頃のやうに鼠が騷ぐ冬の夜の事であつたらうと思ふ――、然らぬだに木は嚙る、戸棚は嚙る、紙門は破るて、氏が坐つてゐた四疊半の書齋の、庭を前にした出窓の上にも、鴨居の壁へ穴を開けて、其處へ古新聞を引張り込む、お芋の尻尾を啣へ込む、と云ふ惡戯に氣が着いたので、試に棒でつッ突いて、中の古新聞を引張り出して見る

と、果して揉くしやになつた罫紙が出て來た。占めたと喜んだが半嚙になつて居る、虫食のやうな穴が開いて居る。氏は情無い顔をして、暫く怨めしさうに見てゐたさうであるが、其でも反古にするには偲びなかつたか、その穴だらけなのを裏打をして、その後も丁寧に使つて居たと云ふ事。

今使用して居るのは、たしか――鏡花氏が筆を執つてから――二枚目の罫紙と聞いたが、是はまだ大して古くはないらしい。

然し、原稿に消をした染だけは、氏が傑作の名殘を留めて、罫紙のおちこちに着いて居る。（未完）

鏡花氏の談と並べて柳川春葉氏の面白き自叙傳的の記事を掲載する筈なりしも紙面の都合により之を次號に廻すべし、そは春葉氏が初めて小説に志した頃より紅葉山人の門下に入つた頃。及び其同門下の鏡花、風葉、秋聲等諸氏との間に於ける日常の有樣、又は處女作を出した時の心持などもありて、一面明治文壇の史料ともなるべきもの、引續き出づべき著作中の鏡花と對照して非常に讀者の滿足すべきもの也



男女交際に就て

芳賀矢一

【時代思潮】

吾人の見る所によれば今日は寧ろ豫備時代である、修學時代である、理想上男女交際が善いとしても先づ青年の思想から一變してかゝらなければならぬ、つぎには家族上の制度習慣もあらためなければならぬ、そして結婚と云ふことも更に重大に嚴肅に考へるやうにしなければならぬ、今迄のごとく親の資産などをたよりにしたり、家族とも〲に同棲して親や姑を持て居つたり、乃至は結婚を以て近頃やかましい戀愛自由論的に感情を標準として行つたりしては到底圓滿なる結果は見らるべくもない。第一青年男女の性格が堅まつて居らない、第二周圍の事情が許さない。故に吾等は理想實現の準備として男女の自重心を發達せしめ、それから家族關係に就て能く利害得失を研究し、此關事情の許すを待て自然に歩を進めたら善からうと思ふ。凡そ一事の改革には多面的事情な

顧みなければならぬ、假令西洋館が可なりとしても、之を實行するには地盤、材料、次には衣服や、裝飾や、乃至は來客の足駄の處置にまで考へ及ぼさればならぬ。殊に過ち多き男女の交際などは愼みや試驗的に行ては取り返しのつかれ弊竇を流しはせぬかと案じられる。世の教導者は之に倣ふを思ふて大に言行を謹てもらひたい、靑年諸君は深く自己の力量と周圍の境遇とを自覺せなければならぬ。

樺太は北海道の化身なり

（教育學術界）

理學博士　横山又次郎

泰西の地學者中には、樺太島を、秘密半島と稱へるものがある。是れは間宮海峽の北部が、非常に淺く、少しく海水が引き去るとすれば、其の場所が干潟となりて、島は大陸に結び附けらるるからである。若し是れが半島となれば、加奈陀の東邊に懸かる、ノバスコシヤは、新世界に於ける、之が對例とても云ふべきものであらう。

樺太が、秘密半島と呼はるゝ位、大陸との關係が密なのは、畢竟これが大陸島であるからである。大陸島とは、地學上の語で、昔大陸の一部であッた所が、其の大陸から離れて、島となッたものを云ふのである。併し大陸島は樺太ばかりでなく、我が北海道、本州、四國、九州等のもさうである。只此等の島となッたのは、樺太より一層昔の事である。と云ふ差があるのみである。それて樺太は、此の邊の大陸島中、最も新いものと云ふに止ッて外に特に異ッて居る點はないのである。

西洋には、此の秘密半島と云ふ點を以て、地學上樺太を大陸の一部と見倣すの適當なるを唱ふる人もある。さう言へば我等も其の日本列島中に入るべきものであると云ふ口實を有ッて居る。それは即ち左に述ぶる如きものである。

我が國にては、北海道本島を、赤鱝と云ふ魚の形に擬したものである。此の比較は、伊太利亞を長靴に擬するのと同じて、先能く出來て居る方である。底て此の幅廣い赤鱝島が、鯨か鰯かの樣に細長い樺太に深い關係を有て居ると云ふのは外でもない。試に赤鱝島を南北に、餘ても伸ばす樣に、ずつと引き伸ばして見ると、其の形は、忽ち樺太の鯨島の樣になるのである。即ち同島南方のアニワ灣（新名東伏見灣）は、函館港前面の海に當り、東のシレトコ岬（新名重蔵岬）は惠山崎に、西のノトロ岬（新名近藤岬）は白神崎に、アニワ灣頭の千歲灣は、函館港に、樺太中部の忍耐灣（新名七郎灣）は、日高膽振一帶の海に、忍耐岬（新名片岡岬）は日高國の襟裳崎に當るのである。斯くの如く、形が似て居るので、九春古丹から忍耐灣沿岸を經て、ルイコフ及アレキサンドロフスクに行く道筋も、函館から火山灣に沿ひ苫小牧を經て、札幌小樽に行く道筋と大に相似て居るのである。即ち九春古丹を函館とすれば、それから北行して分水嶺を越えて東岸に出た所のナイブチは、森で、ナイブチから忍耐灣に注入するポロナイ河口の西にあるナヨロまでの海邊の道は、火山灣に沿うて苫小牧までの海邊の道に當り、ナヨロより、ポロナイ河を遡りて、分水嶺を越え、ルイコフに行く道は苫小牧より内部に入りて、札幌まで行く道と同じ樣である。又ルイコフと豐山府との間は、札幌と小樽との間の樣である。

實に兩島の類似さ、斯くの如くである。地質の上より見ても、北海道の第三紀層に富んで居る如くに、樺太も亦之に富て居る、第三紀層に伴うて出る石炭も、兩島共に之を産するのである。白堊層も同樣である。

北海道の火山岩や、古生岩も、樺太中央山脈にあると云ふ事である。それで、余は樺太島を稱して、北海道の化身變形と云ふのである。此の度、此の島が、我が日出帝國の一部となッたのも、實に自然の數と云はなければならぬ。併し其の北半が露國の手に殘ッたのは、偶然とは謂へ、秘密半島の因緣に符合して、鳥渡面白い。

國力の發達

『東京日々新聞』

戰後に於ける我經濟力の發達は如何なる程度に達すべきやは未だ知るべからずと雖も之を過去十年間に於ける狀勢に顧みる時は亦必ずや顯著なる發達を見るべきは異論の存せざる所なるべし而して最近十年間即ち日清戰後より今日に至る間に於て其の人口に於ても貿易に於ても貯蓄に於ても其他鐵道船舶等に於ても殆ど他國に類例なき發達を示したるは今更言ふ迄も無き所にして之あるが爲に今回の大戰に際して毫も財政的困難を生ぜざる所以にして世界列强も愈〻我財力の鞏固なるを信用するに至りたる次第なり然り而して其國力發達の程度が最近十年間果して如何の邊にありしか之を他國の發達力に比して如何なる狀勢に在るかを知らん爲め其の最も標準とすべき過去十年間に於ける輸出貿易額を取り他國に比較する所あらんとす即ち左の如し（千九百四年の調査なきものは二年乃至三年を取れり）

	一八九四年	一九〇四年	增加
英國	二、七三七、八五〇千圓	三、七一一、三八〇千圓	一・四倍
佛國	一、四二七、八八〇	一、六四三、四八〇	一・一
以太利	三九〇、一三八	五八三、〇一〇	一・四
米國	二、〇六〇、五五六	二、八四〇、二八二	一・三
獨逸	一、六五八、五九〇	二、三〇五、七〇〇	一・三
墺匈國	六四二、八一〇	八〇九、一七〇	一・三
露國	六〇七、六〇〇	七八四、四三〇	一・二
日本	一一三、七〇八	三一九、二六〇	二・七

以上英米獨佛等の文明諸國の輸出貿易は最近十年間に於て一倍一割乃至一倍四割の增利を示すに過ぎざるに我國にありては實に二倍七割と云ふ著しき增進を呈せり是れ豈に非常なる發達にあらずや米國獨逸の如き國力の發達異常なるものなりとして世界の驚嘆する所なりと雖も其國力の反射鏡とも云ふべき輸出貿易に於ては我國に及ばざること遠し即ち我國勢發達力の他國に類例を見ざる確證とすべし然れども以上の比較を以て未だ必ずしも獨り我國勢發達力の超絕せるを誇るに足らざるものあり何となれば以上の諸國は已に其の文明の度に於て最高の位置に達し經濟力の發達に於ても後進の國に於ける長足の進步は最早殆と見るべからざるの域に達せるを以てなり而して我國の如き比較的後進の國にして總ての方面に於て駸々として進步すべき狀勢に在るものとは必ずしも同日に論ずべからざるものゝ如し故に以上文明諸國の發達力に顧みると同時に其の文明の度に於て以上諸國の如くならず方さに開進の域にある他諸國に比較して其の發達力を見るは自ら必要の事に屬せん即ち左の如し

	一八九四年	一九〇四年	增加
亞爾然丁	二〇二、四九八千圓	四四一、九七〇千圓	二・一倍
土耳耳	二七三、九四六	三二八、三四六	一・二
伯西兒	三一九、五一四	三五四、[illegible]八	一・一

墨其西哥	四一、一一二	七九、二二二	一•九
羅馬尼	一四三、〇七二	一四六、六八〇	一•〇
セルビヤ	一八、八八〇	二七、八四〇	一•四
加奈陀	二三五、〇五〇	四五一、七〇〇	一•九
日本	一一三、七〇八	三一九•二六〇	二•七

亞爾然丁加奈陀墨其西哥等の諸國は近來著しき進步の狀態にありと雖も其の輸出貿易の發達力に至ては尙ほ未だ我國に及ばざること遠く其尤も發達の著しきものと雖も一倍九割乃至二倍一割に過ぎずして我國の二倍七割に比すべきもの一もあらず即ち最近十年間に於て我國の發選力が世界何れの國と雖も迻に及ばざるの優勢に在るを知るに足る

奇怪なる謝恩法

『時事新報』

東京市は日比谷公園内に高等茶店建築土地特貸を出願したる吉田助役に對し同助役が同公園創設に功勞ありたるを謝すると共に公園の監督を託するの意味を以て其出願に特許を與ふることに決したりと云ふ頗る奇怪なる謝恩法にして又頗る奇體なる監督方と云ふ可し吉田助役の功勞は勿論沒す可からざる者あらんなれども之に酬い之に謝意を表するには自ら其の方法あることならん然るに公吏たるものが其當然爲す可き一事一業に功勞ありたればとて斯る情實的特利特權を分與するの端を開かんか東京市否な自治團體は一の混然たる情實の府となるの嫌はなきか水道に盡したるもの水道上の特權を望み築港に盡したるもの築港地の特典を望み市區改正に盡したるもの改正地區に就て特別の利益を望みたらんには市は悉く其望に應ず可きか、抑又その一を諾て他の一は拒絕すべきか、甚だ謂れなきことならずや、或は公園監督の爲なりと云ふも茶見世の主人公園監督、是れ亦甚だ妙ならざるに非ずや若しも現在以上に監督者の必要あらば別に專門の監督者を設く可し半秋半公の曖昧なる理由を附して世間を糊塗せんとするが如き斷じて許す可からず今これを言ふは吉田氏其人に對しては聊か氣の毒なれども此一事、小なるが如くにして關する所頗る大、默して止むは公益の爲に非ざればなり

米國の文壇に於ける日本

ニウヨルク市に於て　石川半山

『報知新聞』

▲眞の紹介者なし　米國に於て日本の事を知りたいと思ふ人は多いのに悲しいかな眞に日本を紹介する人物がない、日本の事を書いて居る出版物の多くは、反古同然の者て、誤謬ばかり、嘘ばかり、出鱈目ばかりだ

▲正誤委員の必要　コウ誤謬ばかり書かれて有る國に於ては正誤委員の必要が有る、馬鹿と盲目と狂人と野次馬が爭ふて日本通を振り廻はして騷いて居るのだから、始末にイケない、金子男の如きは在米中正誤委員の如く、あらゆる誤謬を訂正し、眞の日本を紹介するに務められた樣で有るが、其の金子男の寄稿の中にも亦段々誤謬が有ツたのは困ツた者だ

▲金子男の誤謬　告める程の事でもないけれど男爵が寄稿された或る雜誌に元寇の事が書いて有る、此時の權力者を北條高時とせられたのは驚いた、北條氏中興の英雄時宗を其末路の高時と間違へられては恐れ入る

▲靑書生の惡戲　唯少しばかり英文が書けて何の素養もなく學問もない

ゴロツキ書生共が、新聞や雜誌へ日本の事を書てパンを買ふ資料を作て居るので途方もない無茶が出て居る

▲皇室の歲入廿五萬圓　或る有力なる雜誌に此類の馬鹿書生の一人が日本の皇室の事を書て、御料の歲入廿五萬圓と書いて居る、我輩が彼に向て年々の豫算に皇室費は三百萬圓と書いて有るが、其上に尙御料の歲入は多い者だが、二十五萬國とは誰れが敎へたのだと問ふたら、右の類の馬鹿書生が七八人集つて評議の末、多分二十五萬圓位の者だらふと一決したので其儘書いたと云ふのだ、不埒千極の沙汰で手が附けられない

▲米國人の日本通　コウ云ふ日本の馬鹿書生が無暗に嘘を書く所へ、米國人の中の日本通と云ふ忌むべき動物が居て、あらゆる誤謬を振り蒔いて居る、彼等の中には明治の初年に日本へ來た者もあれば、十年も前に日本を通り拔けたと云ふ男も有る

▲明治の初年と同じ日本　明治の初年に來た男は今も矢張り日本人は三十年前の日本人と同じ者だと考へて途方もない事を話して居る、ポストン市て右の類の一米國人と同席した所が、彼れの語る日本談は悉く舊日本の事情て有ッたから、我輩は悉く之を非認し、ソレも改良した、其話も今は無いと一々訂正したことが有る

▲地震は一週間に一回　右の自稱日本通が三十年前の日本談をして居り余が一々冷評的に訂正して居る時、談偶ま地震の事になり、彼れは得意になつて日本の家屋ど地震の關係から富士山の噴火に及び「日本は地震の國て、少くも一週間に一度は地震が有る」と言ッた、列座の貴女紳士が目を丸くして驚いて「恐ろしい國よ」と叫けんだから、我輩が「それも三十年前の事だ、今日は何事も改良し、新日本ては地震も改良して、百年每に一小震を感ずる位になッた」と云ッたら、一座大笑した

▲日本貴女は公然喫烟す　又アルッテライン市に於て或る日本通の米國人が日本の婦人の話をして「日本の貴女は皆常に愛らしい烟管を携へ公然喫烟す」と言ひ出して其の風俗を說くので、列席の貴女等は驚いて居たソコで我輩が其の日本通に向て「君が見た日本の貴女は自分が吸ひかけた烟草の烟管を君に吸へと言て出さなかッたか」と問ふた、スルト其の先生が變な顏をして何とも答ないから「若しもそうなら君の見た日本貴女は餘りに社交的の婦人で、眞の貴女では有るまい」と言ッたら、先生赤い顏をして去ッたが、日本の貴女が皆公然煙草を吸ふと言はれては專實でない、中には吸ふ者も有るが、正しい立派な家庭の夫人は吸はない人が多いと云ふ事は證明して置きたい

▲所謂日本通の外人　米國人中の所謂日本通はグリフヰス博士を筆頭として、到る所の市街に屹度三人や四人は居るが、嘘を語る者が多くて困る、前に駐日公使夫人たりしフレザア夫人も今米國雜誌の通信員にして日本に在て日本種子を仕入れて居られるさうだが、ドウか眞相を調べて間違はぬ樣に通信して貰ひたい者だ



此廣告により御注文の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

文學博士　坪内逍遙君序　三木竹二君　水口薇陽君校訂

近松全集

中卷卅九年二月
下卷卅九年三月 出來

洋裝全三冊菊版凡三千餘頁
總クロオス金文字入頗美本
定價一冊各壹圓六拾錢
小包各金十五錢

上卷

菊版一千餘頁總クロオス金文字入
十二月二十日迄に前金相添御注文に限り **特價金壹圓廿錢** 小包料十五錢

▲特價期限(十二月廿日)得は嚴に定價に復す
▲製本出來は十二月廿五日

上卷特價壹萬部に對し左記の景品劵五千枚挿入す

▲近松全集中下二册(三圓廿錢)　五百枚
▲近松全集中下の内隨意一册(一圓六十錢)　壹千枚
▲新冠(新體詩集)一冊(三十錢)　壹千枚
▲かるたゲーム繪葉書一組(十二錢)　五百枚
▲教訓歌集一册(四十五錢)　五百枚
▲百人一首改觀抄一册(二十五錢)　五百枚
▲かるたゲーム一册(二十錢)　壹千枚
合計金四千六拾圓

近松著作の上梓せられたるもの尠からずと雖も其數未だ八十種に充たず在りと知られて未見の珍書實に數十種に剩れるを拾芳索美の趣旨に基き力の及ばん限り未刻の珍本を蒐集せし結果今や遙に百種を超えしを以て毎卷割截する事としまた音樂上參考の資たらしめんが爲め勉めて曲譜の要點を存し一見當代俗曲の曲節發達を知しむべく斯道に精通せらるゝ三木水口兩先生の嚴密なる校訂を乞ひて成れる本全集は未曾有の珍書にして文學音樂界の寶典たるを疑はず

上卷目次

▲根元曾我▲盛久▲凱陣八島▲天鼓▲世繼曾我▲出世景清▲佐々木大鑑▲源我冷泉節▲天智天皇▲源氏十二段▲日本西王母▲新本領曾我▲松風村雨束帶鑑▲釋迦如來誕生會▲謙田兵衛名所盃▲賴朝伊豆日記▲百日曾我▲當流小栗判官▲源氏烏帽子折▲浦島年代記▲長町女腹切▲淀鯉出世瀧德▲蟬丸▲大掛物十幅對▲曾我五人兄弟▲大磯虎稚物語◉賀古敎信七墓巡▲最明寺殿百人上﨟

發兌　東京牛込矢來町　**園屋書店**

申込取次　東京神田　**東京堂**　東京本石町 大阪備後町　**寶文館**

此廣告により御注文の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ



寫實小說 にせ紫 後編

小杉天外著　鏑木清方畫

描寫或は極端に走りたらんも知れず、結構寧ろ露骨に失したらんも知れず、されど此の姦婦の肉塊、之を外にして傳ふる術なきを奈何。

▲實價七拾錢　郵稅八錢

前編三版印刷中（表裝を變更し意匠頗る斬新）實價六拾錢　郵稅八錢

小杉天外編

魔風戀風

十二版前編　九版中編　七版後編　實價各六拾錢　郵稅各八錢

發兌元　東京日本橋通四丁目角　春陽堂



（禁轉載）

青柳

（日本烈女の傳）

尾崎テオドラ作
ちよいん生譯

われは己れの生命よりも
なほ切に、なほ聖に
深く母國の幸を愛す。
（セークスピーア）

誰か己れの郷國の爲めには
狂喜の情もて血潮を流し

切なる願望も胸より裂き捨て
國民の幸福計らんと
勇んで死地に就かざらん。
（トムソン）

（一）

今回の日露戰爭に於て著しく顯然と示されました日本人の驚くべき愛國心の主因をなし、世間から種々の說明をうけ、又善意惡意樣々の批評家に驚愕と好奇心とを促しました精神の幾分は、中世の日本に於ける一烈女の小史傳をお讀みになると明かになることゝ思ひます。

昔の武士、今の日本兵が全く己れの死といふことを念頭に置かぬ程の勇氣を有して居るのを、偏へに東洋の宿命敎の力に歸する人が御座います、然しそれは誤りです。日本の軍人は自己の運命は前世から定まつたもので、個人の努力行爲を以ては到底動かすべからざるものであるとの考を以て戰爭に出掛けるのではありません。自國の光榮の爲めに死せよと召さるゝのを燃ゆるが如き熱望と萬事を犧牲に供して顧みざる希望とを以て戰場に赴くのです。赤十字病院に入つて病氣が次第に快くなつて來た一兵卒は私の友人に向て「人は一度死ねば二度死ぬ氣遣はありませんや、同じ死ぬなら戰場で死ぬ位結構なことはありませんよ」と申しました。

日本では自己の身體も精靈も、名譽も德義も必要の場合には、みんな義務の爲めには犧牲にしなけれ

ばなりません。そして最高無上の義務は何ぞといふとたゞ一語――忠義といふことに盡きるのです。封建時代の武士は其主君に忠義を盡し、今の世の軍人臣民は皇帝陛下に忠義を捧ぐるのであります。この君と國とに忠義を盡すといふ熱誠は實に年の經つと共に其勢を加へまして、其前途を沮まんとする何物をも燒き盡さんとする熱烈なる愛國の情焔となつたのであります。

そんなら日本の愛國心と西洋のそれとは如何樣に違ふかとお問ひになる方がありませう。其根本の差違は倫理上の關係で御座います。西洋では事の大なると小なると、物質的たると精神的たると、一時的たると永久的たるとを問はず、總ての事物に自我の究竟的救濟と發現とを求めるのが、人生と宗教との目的であります。「若し人全世界を得るとも其生命を失なはゞ何の益あらん乎」と基督敎徒は申します。日本人の申すのは「我身と魂を失ふともわが義務を行はゞ何かあらんや」といふのであります。臣民が皇帝に對し、家來が主人に對し、子が父に對し、妻が夫に對して自我を滅却するといふのは歴史あつて以來日本の宗教であつたのであります。

夫と主人に忠實なることは如何なる時代、如何なる事情の下にあつても日本婦人の最高の義務で御座いました。其目的に對して熱烈なる情火と一心不亂の精神とを持して如何なる運命をも迎えんとして起つた時には、つまらぬ小供らしき奴婢をしても、無意識的に一烈女と化せしめ、そしてかゝる烈女の勢力が戰場に打ち向ふ男子の意氣を鼓舞すること、公然婦人崇拜の行はるゝ國にもおさ〳〵劣らず、又其原因は隱れたりとはいへ、其等の國に下らざる瞑感力を與ふるのであります。

「吾子よ、爾の楯を捧げて歸れ、否らざれば其上に載せられて歸れ」というて其佩刀を戰場に向ふ我子に授けたといはるゝスパルタ婦人の精神は眞の日本婦人の胸中と割符を合せたやうであります。夫や子の敗走、降服するのを見るよりは寧ろ戰場に討死するのを婦人の喜といたしました。敗走とか降服とかいふのは日本人の頭胸には實に卑怯といふことの別名に外ならぬのでした。

身も魂も捧げて夫を熱愛した妻が、夫がわが身を思ひ、互の愛に惹かされて死に臨んで勇氣が挫け、卑怯未練の源とならんことを恐れ、わが身と愛の力を轉じて夫の義務を行ふ感奮力とならしめんとの希望に一心となつて夫よりも先きに自殺して此世を去つた昔譚が御座います。

それは即ち青柳の毅然たる勇ましき物語であつて、青柳と申すのは豐臣家の譜代大名木村重成卿の妻て大膽で愛國心の盛んな婦人で御座いました、そして此婦人の傳は自ら十七世紀初頭の大坂落城の物語と關聯して居るのです。

(二)

偉人太閤秀吉が老後に愛妾淀君との中に產んだ世子秀賴に世を讓らんとの計畫準備は德川家康の野心の爲めに全く頓挫しました。家康は天下を一統せんと欲しまして、秀吉が死んでからは世子秀賴に對する義務と二心なしとの誓言を無視しました。西曆千六百年關原に於ける天下分目の戰に家康は豐臣家の上に主權を確立しました、がそれから長い間兩家の爭が絕えず、千六百十五年大坂落城と共に僅かに爭が止んだのでした。

數年間家康は且つ計り、且つ待ち、且つ待ち且つ計りました。ですから其假借なき冷酷なる蜘蛛の巣のやうな詭計はいよ〳〵密に豊臣家を取り卷いたのです。狡猾い〳〵外交を弄して老猾政治家は陽に敗者に向て寛大を裝ひました。さうして時の經つに從て徐ろに賄賂を利用したり、又は仲間喧嘩を起さしめたりして、すべての勢力ある大名――關ケ原の役後に其時其場で直に秀頼を取除かんと短兵急にあせつたならば、主人の子に不忠の奴ぢやと家康に刄向たかも知れぬと思ふ大名共を、みんな味方にしてしまひました。

其後淀君と秀頼とはわが家勢を挽回せんと欲して天下無双の堅城大坂城に據つて居ました。然しながら家康は己れに逆はんとする無益の徒黨を擴けゆくのを恰かも蜘蛛が己れの巣にかゝつた蠅のあせるのを見るが如くにうち眺めて、城砦から彼等を惹き出し、靜かに之を手に入れることを計つて居たのです。然し淀君といふ人は道德上には弱點の多い人であるが利巧な婦人で、自身も我子もかゝる係蹄にかゝるのを防がんと賢くも思ひ極めました。千六百五年に淀君は遂に將軍に上使を立てゝこの城を去るよりは自身も我子も共に切腹すべしといひやりました。かくして幾多の挿話的戯曲を以て編まれたこの大いなる悲劇的葛藤はその悲慘なる最後に近づいたのであります。

遂に將軍は生前に於て是非共豊臣家を滅亡せしめんと決心しまして、秀頼は將軍家に對して陰謀を巧んで居るといひふらしましたので、秀頼もそんな途方もない要求を聞く譯に行かぬので戰を宣言せざるべからざるに至たので御座います。秋恰も一千六百十五年でした。然し秀頼の味方のものさへ、早晩落

城の運命の免るべからざるを悟つたのです。何故といふに指揮官の大野將軍は無能の武士てたゞ淀君の寵幸を以て其地位を保たのです。淀君は久しい間、此年若くして容貌美なる武士を其情人として居つたのでした。いかさま秀頼の生れた時でも秀吉の喜は實に非常なもので御座いましたが、然しそれを實の秀吉の胤であらうと信じた人は極めて稀であつた位であつたのです。

大野將軍が淀君に有して居る己れ一人の大勢力の爲めに大坂城内の將師の間には常に不和不滿が多う御座いました。總ての有力なる大名は皆或は家康の賄賂や私利の動機に動かされ、或は大野將軍に不平ある所よりして、秀頼方を見捨てゝ、何れも敵方に赴いたので御座います。

(三)

年歯僅かに二十一歳の若武者木村重成は勇氣果斷に富み、大膽にして容姿秀麗、最後まで不幸なる豊臣家に踏み止まつた、たゞ一人の大名であつたので、若年ながらも秀頼に事へて重く用ひられました。大坂側と家康方の交渉には屢々參與し、其任務を仕遂るには非常の機敏をあらはしました、新たに建立せられた大佛殿のために鑄造せられた大鐘の銘が家康の名を切斷して讀み入れたのは彼を呪咀する爲めてあるといふことを論據として甚だ機嫌を損じた時に、最後の使者として淀君の二人の侍女が靜岡なる家康に謝罪の爲めに送られましたが、其時に木村は婦人に佯裝して二人の侍女に同伴しました。これは將軍家の内情を知つた信任すべき武士の護衛を必要と考へられたからでありまするが、木村は即ち此風流なる役柄に選ばれました。當時は貴婦人の伴に男子が交るといふのは柳營法度によつて嚴禁されて居

たので木村は若い婦人に佯裝したのであります。日本の傳記にはこれを以て見ても重成がどんなに秀麗な若武者であつたかゞ分ると書いてあります。女にしても見まほしき程の美貌は當時の營中に使ふるものに珍らしくなかつたので御座います。

木村の母は秀頼のお乳の人で、彼と其妻の青柳とは豐臣家に他心なく奉使したものであります。

この物語の女主人公の青柳は秀頼方の一將薄田の娘であります。其美しさは城中一人の比ぶべき婦人がないと評判されました。重成と夫婦になる前に或一人の男が彼女を戀しました。然しながら此男の人物の弱點を敏くも見破つたので彼女は其求婚を斥けました。其夫重成との結婚は眞に彼女の幸福てあつたのです。

木村重成は秀頼方の望の絶えて、萬事こゝに休せることを悟りましたが、彼は君の爲めに更に一回死物狂の打撃を敵に與へ、若し戰ひ利あらずんば戰場に屍を曝さんと決心しました。さりながら彼の胸中には今より六ケ月前即ち正月の冬の陣に手兵八千を以て城前に押し寄せたる敵を全く掃蕩した時の如くに今回もやり得るかも知れぬといふ一縷の望を抱いて居つたかも知れません。ともあれ生命を拋つ覺悟から生ずる勇氣を以て彼はをめ〳〵生殘らじと決心しました。一千六百十五年六月元日、浪人眞田が城を去る十二哩の道明寺に於て頑强に戰ひつゝある時、木村は一萬の軍勢に將として城を去ること六哩の八尾街道に於て進み來る德川勢を喰ひ止めんとしました。此大膽なる若武者は其士卒六百人と共に此役に討死し、次て起れる敗走によつて數百人は殺されました。これがそも〳〵沒落の初めであります。其

後非常に悲慘なる最後の戰爭が二日間續たことや、叛逆人が城中から火をつけたことや、秀頼は自殺を行ひ、淀君は燃え上る焰の中で侍臣に介錯せられたことなどの大阪落城の運命は誰人でも御存じのことでありませう。

さて隨分長々と史上の最後まで語り續けましたのでいよ〳〵この物語の主人公と女主人公――木村重成と其若き美しき妻の青柳の事蹟に返らなければなりません。

最後の戰爭に出陣の前に木村は一小香爐を取り上げて類稀なる名香を燻らしました。其名香は多分今日も見まするやうに所々に金粉塗れる小さい薬形又は花形の錠に出來たものでありましたらうが、其香りよき煙の渦卷き登る上にわが兜を燻らしました。

當時、勝者は敗敵の首を切り、之を手柄の證據として將軍の前に具ふるのが其風習でありました。其獲た首が貴い人のであればある程其殺した人の得る功績は大きいのです。人が死ぬる時に屢々起る如く蟲が知らしたのでせう、木村はこれぞ最後と感じましたので、かくして其武士の名譽と其門地の自尊心とを保たんために、死して尚ほ敵前に算を亂す死骸に汚されぬやう、其頭髮の間に香の煙を浸み込ませました。

青柳は繪に書かれてありますやうに其夫の髮に油をつけ香を燻らすのに手助をしました。木村は侍臣の手から兜をとり、頭に載せて、常の如く頭を傾くることはせずに、紐を緊く結び、此緒を結ぶも此れを限り、再び解くの期あらじとの意をあらはさん爲めに忍びの緒を切りました。

此若武者が青柳を後に殘し行く此時の悲しみは實に非常なもので御座いましたらう。さらばと別離を告げて御辭義をする妻を玄關に置いて立去るときの彼れの胸中は必らず悲しみに裂けなんとしたのでありませう。况して青柳は姙娠の徴候がありましたので、二人の間に生るべき子供の胸の鼓動にふれては二人ともに身も世もあられぬ心地がしましたのでせう。然しながら涙も流さず、悔恨苦痛の心弱き樣も見せず、手も握らず、抱き合ひもせず、石の如く寂然として分れました。心の中では此世にて相見んことはこれ限ぞと引絞りたる弓の如くに悲しみ胸に漲れども彼等はたゞ普通の挨拶をなして互に別れ去りました。

身の廻りにぬかつく侍女等と共に青柳は、馬蹄の音の遙かに消え失するまで謹んで玄關に座しました。やがて青柳は其侍女を遠ざけて獨り己が室に退きました。彼女はやゝ暫く考へたのです。其夫は兜に香を焚いて悲壯なる討死の儀式をして出て行つたのです。青柳は夫の決心を判じ、夫の討死の覺悟を極めたことを充分知りました。わが室の寂寞した中でハツト我に歸りて激しく現在の地位を思うて白蓮の如く眞白に其色を變へた時に其眼は苦痛の流れざる涙に曇り、非常の恐怖心が彼女の全身を襲ひました。戰場に於て氣を緩むる暇なき時に若し互に慕ふ愛情を憶ひ起して夫の氣が弱つたならば、――討死せんと覺悟した夫の氣が挫けたならば――彼女はこんな事の萬一にもあらんことを氣遣うて彼女も亦死せんことを決心しました。其文机に力なくうちもたれて青柳は墨を用意し、柔かな眞白き卷紙を取上げて夫に送る次の手紙を書きました。この手紙は今日でも如何なる日本男女も嘆美せざるものはありませぬ。

（四）

一樹の蔭、一河の流れ、是れ他生の縁と承り候にこそ。そも一昨年の頃よりして偕老の枕をなして、たゞ影の形に添ふが如く思ひまゐらせ候。此頃承り候へば此世限りの由、かげながら嬉しう存じまゐらせ候。

唐土の項王とやらんは世にたけき武士なれど虞氏のため名殘を惜み、木曾義仲は松殿の局に別を惜みしとやら。されば世に望極りたる妾が身にては、せめては御身御存生の中に最後をいたし、死出の途とやらんにて待ち上げ奉り候必ず〳〵秀頼公多年海山の鴻恩御忘なき樣賴み上げまゐらせ候あら〳〵めでたくかしく

妻より

長門守重成樣

（五）

此手紙を漆塗の箱に入れて房附の絹紐にて結び、確な使者に托して送つて靑柳は再び我室に入りました。佛壇から物靜かに夫の頭と兜を燻らした臨時の儀式に用ひた小香爐を下ろし、机の上に載せて一炷の香を立てました。下には室の隅から持ち來つた大きい白い敷物を擴げ、其上に座つて死ぬる用意をしました。手も狂はずに其帶から懷劍をとり、鞘を拂つて右手に持ち、左手には念珠を握りました。やゝ暫くじつとして口に南無阿彌陀佛〳〵の念佛を繰り返しました。かく其心をも思ひをもわが熱愛する夫

に送つて、彼の義務を行ふ氣を鈍らする種となるよりは自ら死せんことを選だのてあります。突然其右手は上に進み、短刀は其柄まで大動脈を切斷してやさしき白き咽喉を貫きました。當時總ての武士の娘は、皆急所を教られて居たもので、青柳の手は驚くべく小さききやしやなものてありましたが狂ふことなく、又當時の婦人の數に漏れず、薙刀の名手でありましたので甚だ強くありました。彼女は一聲立てゝ敷物に俯伏ました。鮮血だら〱と赤い流れをなして迸しりました。此時初めて家内の人が之を知つたのです。

夫に送りし手紙が夫に達する前に青柳は三途の河を渡つて、毎日夫の家に歸るを嬉しげにしとやかに迎へたと同じ樣に、彼岸に夫を待ち受けて居るので御座いませう。

手紙は木村の今や戰場に赴かんとする處に着しました。此精靈の氣溢るゝ書簡を讀んで勇士の胸中一層勢力を得て、戰て死すとも、敗れて生きじとの決心ます〱固くなりました。前に述べました如く彼は八尾といふ所で、城を目指して進み來る敵を喰ひ止めんとして六百人と共に斃れたのてあります。

彼は戰場に斃れて其首は當日第一の獲物としてかき切られ、將軍の前に捧げられました。

家康と彼の將帥はすべて香焚き込めたる兜の裏より洩れ來る馨香に氣が附きました。彼等は此名香の薫りと堅く腮に結びたる兜の緒よりして此健げなる武士が望なしとは知りつゝも忠義のために死せんとしたる覺悟を悟りまして、其首を見詰居る彼等の眼よりはみる〱涙がこぼれました。

家康將軍は首に對して活ける人に向ふが如く「何人か此奥ゆかしきたしなみを汝に敎へし。若さに似

合はてよくもかゝることを知りつるよな。老功の武士が雜兵原の首などゝ見分つくやう計るとは誠のことぞ。さりながら汝のこの心掛てそはわが今迄見たる如何なる老武者にも勝るぞよ。さて〱も死なしたるは殘念なり。若し生きてあらんには名高き大將ともなりしならんに」と仰せられました。
焚き込めし兜の香は消え失せました。然しながら若武者木村と勇敢なる妻の青柳との愉快なる追懷は千歲生氣あつて赫々として輝き彼等の物語は日本帝國の存する限り、語り傳へられ尊敬せらるゝことでありませう。

（をはり）

（原文は本誌末尾にあり）

明月皎々歌

吉野臥城

木犀の香ひややかに、
里芋廣葉露を湛へて、
吹くとなき淸風白う
氣を搖りて、天地めぐる、
今し月まろらに、
白銀征矢のまばかりは

瑠璃水晶の虛空すべり、
退きゆく魔が雲の
乾霜葉の散りぢり落ちに、
天地は照りかがやきぬ。
野の樂手金鐘兒は、

しらべ出でぬ、天の讃歌。
地中の歌女蟋蛄の
曲ぞかすかに伴奏る。
萬象は樂にうるほひ、
靜歌に諸葉ふるひて、
聖なる夜、月の冴え、
ああ和魂のあこがれ、
解脫の常宮さびの水の、音、
誰ぞ暗愁の胸を抱く。

擣ち出でぬ、衣擣つ聲。
穂薄のうれを越え、
大地の隈より隈に、
暗きより暗きに隱れ、
咽ぶ音の音に共鳴るや。
傷を獲て、はた癒えて
歸り耕す農夫の子、
(百戰に生命ある我)、

孀婦の心情思ひやれば、
益荒雄のはらわた斷つ。
廟堂のひと、野の聲の
いと切に、悲しき知るや。
熱愛の、國を思ふ
老が血のひびきを知るや。
幾よろづ軀の犧牲は、
いさをし刻む光榮の柱、
蒼生の額の汗は、
柱を据うる光榮の礎。
將のちからや、はた何や、
その文字を塗る黃金薄箔。
謝せよ、爲政者。眞耀く
柱の前の磬折に、
「罪」巣くふ額をし打てよ。
美酒にうま酔ひ、

若き女に榮爵誇り、
危きわざに黄金花抱く。
三尺の兒、資を献ぐるに、
こは何事ぞ、春をゑむ。
「信」なきまつりごとは、
國を誤り、蒼生を喪ふ。

花の心は、千よろづ民の
犠牲となる胸にしあれ。
さもあれや、西びとの
同情を失ひなば、
星の冠、泥にし落ちむ。
左顧右眄みつつ政ち、
たはれ女の馴染男が、
朝の別離に見かへる涙、
思ひのみだれ断ちがてに、
家の子あるを忘るに似たり。

國と國との強き同情、
まことの情、誰かいなまむ。
思ふは唯蒼生を呪ひ、
同胞の血を售り、
ひととときの安逸偸み、
榮華を誇る耻辱とせずや。
自由の樞、光明の戸
堅うとざして、振鈴の
希望の響に耳を蔽ふ。――
立憲の治はいづこぞや。

更に思へ、闇き流
野のかたへに流れ溢れて、
政黨のひと、民の友、
半は溺れて心失ひ、
黄金の光に目くるめき、
公心を私に徇へ、
爲政者の膝に佛と仰ぐ。

市のあきびと、夏の日
魚のくされ賣るを恥づ、
愧ぢざるもの、今、國士に見る。

覺醒めよ、わが同胞、
敷島の耶麻土蒼生、
あふるる光明湧く希望、
額に照り胸に躍る。
くしきかも、靈の香浮び、
文明の常花降る。
咀ふもの、愧ぢざるもの、
神やらひ北にやらひて、
自由の樞ぎいと押し、
「憲政の美」をここに迎へむ。

光明の戸さと開き、
新しく光榮多き
「憲政の美」をここに齋かむ。

野花咲き鳥歌ひ、
山ゑまひ水睦び、
平和の活光、
照り渡りいたり渡らば、
放鳥の天雲翔り、
靈の氣に感じ鳴くごと、
蒼生とこしへの生命得む。

覺醒めよ、わが同胞、
敷島の耶麻土蒼生、
ひむがしの邦はた西の國、
今、文明の危機に臨めり。
人の道高う叫ばれ、
神の愛空しく說かる。
黃の禍は白の聲、
嫉妬、猜疑、策はらみ、
うはべのまことと約を生む。
野心の火の、とすれば燃ゆる。

貝に身を護る蝸牛の
角の上のあらそひや、
徒にただ強きを矜り、
武力の捷を勝となし、
「信念」「精神」覺醒めなくに、
「理想」の翼、永遠の
平和慕ひ悶ゆるを、
見よ、美しき文明の
樂に活くべき園にして、
乾血に清き花染むる。

さはれ、武力の夢さめて、
宇宙を抱く靈を渇仰の
新代いつか來り、
「壓制」と「迫害」との影もなく、
聖なるわざに勤しまむ
快樂を胸に描くかな。

ああ月冴えて中天に、
光の野には虫の樂、
塵寰のもだえ慰めて、
地心に遠く沁みわたるべく。

（明治三十八年中秋作）

歌

尾上柴舟選

○　長谷白眠

夕ぐれの雨にぬれ來し文使をいたはりてやる柳の戸かな

郭寒や裏の林になきしきる鵑を寝てきく里の伯母が家

大椰子の陰に歌詠む君にそひて繪筆走らす日こそ待たるれ

（中澤の君へかへし）

○　村田愛美

大砲のひびきは今ぞ天ゆする聽くに栄ありたたかひの樂

うれひ立つ江の波あはき薄月夜胸につめたき歎乃の聲

今宵わが詩にあたらしき光明(ひかり)えぬと星に筆とる秋寒の窓

夜をしばし無垢の衣につゝまれて闇の大地は眠るよ靜か

○ 若麻績長風

ルビコンの流れに秋の日は落ちてシーザーすでに羅馬に入りぬ

宵月や窓にすゝきの影ゆれて時雨おとなふ秋の山寺

○ 中澤鼎介

蔦紅葉かろう戸をうつ旅籠屋の暗き火影に泣かるゝ身かな

蘆笛に秋の日おつる江の南御寺御寺の鐘なりそめぬ

駒うちて高黍がくれ急ぐ子の檜の穗さきにきらめくよ月

○ 塚田夕波

かへりみてなほ去りあへぬ森かげや月に淋しき君が足音

○ 鷲尾美雲

袖ぬれて拾ふ汀の櫻具櫻の如き人にやらむとて

紙燭して歌の使をおくり出で門の黄菊に笑む小女房

○ 佐久間霧江

泣いて悔い悔いて悶えて神のみ名よぶ弱き子に鞭あつる世や

○ 西宮白菊

暮近き島の松原灯(ひ)の見えて磯の花藻は薄紅に

糠雨に赤土こわきあをひ阪箱馬車よけぬばら咲く垣に

○ 吉岡夕舟

夕月や東坡に似たる人ありて鱸釣るなり江の秋の風

○ 丸茂天靈

智と云ふか力と云ふかあらずあらず男の子は意氣に女は情に

○ 鈴木靜

長谷寺や月に小暗きくれ階の圓位の袖にしげき夜の露

○ 安藤安

軍終へてかへる故郷吾待ちて吾抱くらむ白き手のなき

○　小谷寒鴉

ひえ鳥のなくねに山の霧ゆれてあさの日白う松よりいでぬ

花もなきあきの淋びしさ森を吹き野吹き丘吹き風とよみゆく

あしおとにものゝよりくるけはひしてひとり行く夜を秋風の吹く

○　植松青壺

白菊に置くらむ露を見ばやとてともし呼ぶ夜の星あかりかな

何となく昔に逢へる心地して門の椎の木めぐりてもみる　（故郷にかへりて）

○　村田敏子

御教をにがしといひてひそめたる少女の眉のうつくしきかな

花ぐもり一日興なきつれ〴〵に罪なき妹を泣かせても見る

春の夜を君訪ひ來やと臙脂さして鏡に向ふはつかしさかな

はら〳〵と櫻みだるゝおぼろ夜を迴ふ子一人に袖とられけり

煤拂　繞石選

煤掃や投げ出してある古熊手　初聲

乾鮭に紙覆ひけり煤拂　同

煤掃の庭に飯食ふ際かな　同

人傭ふ女世帶や煤拂　同

煤掃やすゝけきりたる御釋迦樣　露醉

煤掃いて樓に上れば川ひろき　信一

煤掃いて十哲の像に香を焚く　みのる

煤の日に琵琶彈く法師來りけり　之子

枯芒煤掃く朝刈らせけり　三餘

煤掃やから脛寒き大書院　青龍

水洟をたらして煤を拂ひけり　四緑

煤掃いて洗ひ清めぬ閼の鉢　圭愛

煤すんで髮丸髷に結はせけり　さん子

庭の木に障子もたらせ煤拂　圓外

煤拂をせぬ無精さや句も成らず　黄村
本箱を踏臺にして煤拂　浦亭
煤はいて寒き月夜となりにけり　英子
煤掃いて古き御札をもやしけり　苦風
島原の晝販はしや煤拂　霞翠
煤拂きのふすませし隣かな　五習
煤はいて灯あかるき佛間かな　七三
煤拂屑紙賣つて薯買ひぬ　五遷
定紋の提灯箱や煤拂　羊水
禪坊や裏の茶の根に煤捨つる　同
煤を掃く壬生の小家や柚日和　脫子
煤掃の晝過ぎぬ松に鵯來鳴く　同
夕風の霰となりぬ煤拂　鵑花
まだきより煤掃く家や霜の村　同
煤掃の手に郵便を受けにけり　華子
煤掃くや子守して居る老一人　同
煤掃や袋古りたる物の種　鳳梧桐
煤掃て頭上に寒きランプかな　同

煤掃くやさむしろ敷て佛達　碧子
煤掃や煤け達磨に句を題す　同
神一机佛一几や煤拂　華水
深川に住んでぬくき日煤を掃く　同
煤掃や閣上の人眉若し　葩人
煤を掃きたらん女や門に立つ　同
煤掃や亡き母人の藥鑵　同
煤掃やころげ出たる煤達磨　石羊生
煤掃て祝の酒も獨りもの　同
煤掃や買手のつきし雛の龕　同

選者吟

煤拂や床に幾世の鎧櫃
老いたるを市にあそばせ煤拂
生け花の惜しきを棄てゝ煤拂
煤掃や承塵の槍をしごき見る
煤掃て厨子の古佛を拜しけり
煤掃の庭木に吊るす瓢かな
煤掃いて鼠の穴を塞ぎけり

盆梅に布呂敷かけて煤拂
煤掃やしまひ忘れし葭障子
煤拂形見の簪(カザシ)見當てけり
裏へ出て煤の衣物をふるひけり
煤掃いて隣の風呂によばれけり

正月分課題　福引　十二月十五日限
二月分課題　東風　正月十八日限
應募俳句は東京市本郷區駒込曙町大谷正信宛の事

▲歌募集　十二月十五日限
東京小石川區原町一三三尾上柴舟宛の事

▲豫告
新年號には　江見水蔭氏
の新作小説掲げらるべし

評論

雜誌の亂發に就て

昨年の寂寞たりしに反して、今年は誠に出版界空前の盛況を呈したる歳なりき、諸種の蕪雜なる書物も出てたりしかど、而もまた價値ある出版も甚だ多かりし樣なり、而して吾人は常に此價値ある書物の多く賣れ行きたるを聞けり、これ我國民の漸く讀書の趣味を解し、我學生の批判力の稍々發達したるを證するものにして、まことに喜ぶべき現象なりとす

單行本の多く賣れ行くと共に、諸雜誌も亦少なからず其發行部數を增加したるが如し、いづれの雜誌と雖

も昨年に比して優に五割の發行部數を增加したりといふは事實に近し、これまた大に慶賀すべき現象ならざるべからず

而して又此出版界の好況に乘じて、諸種の雜誌は新に發刊されたり、大なるあり小なるあり、奇なるあり、妙なるあり、吾人は書店の店頭に立つて、毎に其盛んなるに驚かずんばあらず。秋に入りて又多くの雜誌出でたり、且つ來春を待つて發刊せんとする計畫あるもの、尙十種を下らざるべしといふ、

或人曰く、讀者の數に限りあり、雜誌の數に限りなし、かくの如く諸雜誌の發生は、即ち彼等をして激甚なる競爭をなさしめ、優勝劣敗の理により、資本の薄弱なるもの、雜誌の眞價なきもの等、自然に陶汰されて、遂に善良健全なるもののみ生存せん、然らば今日の如く雜誌の限りなき發生は、斯界の爲め眞に賀すべき事なりと、吾人も此點に於て雜誌の發刊の多きを喜ぶものなり

然れども、近來新に發刊せられし雜誌をとつて之を檢するに、吾人はその何の爲にかゝる價値なきものを世に出さゞるべからざるやを知るに苦しむもの多し、資本の薄弱なるは、その凡てが經濟的に出來たるに知るべく、又其の內容に至つては、多く他雜誌の眞似事にして、それ以上を出でず、別に新機軸あるにあらず、大なる理想あるにあらず、立派なる主義あるにもあらず、その有する理想、主義、趣味等は在來の雜誌にて事足りぬべし、今更多少を問はず金を掛けて、勞力を損してまで之を發行せざるべからざる程のものにあらざるは、比々皆然り

或は若氣のいたりにて、其不平を漏らすに由なくて多少の文才あるを頼みにし、同志を叫合して雜誌發刊を企てる也、雜誌の一見乳臭きは此種に屬す、靑年修養にこれつとむべきの時、かゝる無益の業をなす、その不心得これに過ぎたるはなし

或は出版界の好況を見、只管金もうけ主義にて保證金の要らぬ文學雜誌などを企てるあり、二千三千の發行部數にて金の儲かるものと思惟する連中にて、素よ

り聰明なる人々にあらず

若しそれ、新なる機軸を出だし、大なる抱負を以つて、大なる主義を行はんと欲し、而してよく計畫し、よく思考し、然る後に雑誌の發刊を爲すものに至つては、一二を除きて、失禮ながら皆無なるべしと信ず、

素より其多くは三ヶ月或は半年にして倒れるべし、然れどもそが出版界に益し、又其讀者を益することそも〳〵幾許ぞ、在來の雑誌は毫も新雑誌の爲めに讀者を少くする憂なければ、從つて之と競爭するの勇氣もなし

吾人は出版界の好況を賀し、雑誌界の賑はしきを喜ぶ、然れども今のやうに二束三文の雑誌の亂發は、只國家の不經濟たるに止り、一利の之に伴ふなきを見、之が歡迎に躊躇するもの也　（美中天）

先づ中流社會を覺醒せん

今日の日本で最も健全な思想を抱き、最も着實な生活をなして居るものはいふまでもなく中流社會である。中流社會は實に日本の中堅である。

今日日本が世界に名を成したのは全く實力の發達した結果であるが、其實力といふものゝ大部分は中流社會の占めて居たものと思ふ。これはなにも不思議のない事で、世の中が進歩の潮流に棹して靜平の態度を失はぬ時は當然かくあるべきものである。上流社會は例へば天産饒かに過ぐる熱帶の如きもので怠るに流さみ、下流社會は例へば天惠薄きに過ぐる寒帶の如きもので衣食の爲めに寧日なく何れも健全なる發達が六つかしいのである。中流社會は例へば溫帶の如きもので、且つ勞し、且つ學ぶことが出來るので文明國に於ては中流社會の發達するのは理の當然である。

中流社會が最も健全な思想を抱き、最も着實な生活をなし、又最も實力の存する階級であるとすれば中流會社によつて指導せらるゝ社會は必ず健全な着實な發達をなすことが出來ると思ふ。上流社會から出て來るものは多くは金の力である。下流社會から出て來るものは多くは腕の力である、前者は動もすれば腐敗淫靡の空氣を産み出し、後者は屢ゝ墮落亂暴の行爲を敢てする。獨り思想の力を出し得るは中流社會で、思想の力は即ち穩健着實な行爲働作の母であらうと思ふ。

今日の日本には隨分不平な事も多い、又不滿な事も少くない。或人は元老を改革すべしといふ。又或人は勞働者を改良すべしといふ。兩者共に最もの議論と思ふ。吾輩も二つともに大贊成である。然しながら吾輩は思ふ、此等のことは非常によいことに違ひないがこれは第二のことで、先づ第一に定めざるべからざる先決問題はあるまいか。若し中流

社會にして未だ確固たる定見を有せず、確然たる主義を有せずんば百の改革も千の革命も全く無駄な骨折りてはあるまいか。空しき法文や、騒がしき叫喚には吾輩餘り信賴せぬのである。眞に自信あり、眞に主義あり、眞に主張あり、眞に思慮ある多數の國民が世に出てざる中は所謂根底ある動搖せざる改革は望まれまい。大海の磯もとゞろに寄る波は見る眼甚だ壯快てはあるが寄た波は必ず返る。大空の上を流るる雨雲は仰げはいとゞ戰慄に堪へぬが流れ來た雲は必ず流れ去る。吾輩の欲する所は坤軸ゆるがぬ泰山の如き固き〳〵基礎を有する改革てある。素より世の中にはたゞ一人の力によつて大改革の行はれた時代もあつた。勞働者の煽動によつて大事業の遂げられた時代も有つた。然しながらそれは過去の夢てある。世が文明になるに從て社會の神經が過敏になる少し無理な事をすると刺戟が甚しく感じられて苦痛に堪へなくなる。下等動物は其體を切られても活きて居るが高等動物は一機關を失うても又其急所に針を刺されても直ぐに死んて了ふ。野蠻時代は恰も下等動物の如く文明社會は恰かも高等動物てある。而かも今の世界は急所の澤山ある動物の如きもので手柔かに手扱はぬと手術者自身も思ひ及ばなかつた災害を生ずる。是に於て吾人は益〻「思想」によつて換言すれば「思慮ある國民」によつて、靜粛なる而かも確實なる社會改革を行ふことの至要なるを視るのてある。若し「思慮ある國民」さへ確固なる定見と確然たる主義の下に行動せば二三の元老必ずしも恐ふるに足らず、多數の勞働者亦單(メーア)なる器械(マシン)なる地位を免るゝに足ると思ふ。而して此「思慮ある國民」を作るのはいふまてもなく中流社會の覺醒に待たなければならぬのである。

共同便所の設置

初めて田舍から東京へ出て來て最も異様に感ぜらるゝとの一つは共同便所の設けの割合に少きにあつた。田舍ならば路傍の泥溝地や町端れの青草などの上にやつても誰れ憚らぬのであるが、まさかに堂々たる東京の市中て立小便する譯にもゆかぬのである、て、つらいながらも怺へて步いて居る。醫者の說によるとこれが大變身體に惡いとの事てある。それても所々に交番があり、交番は大抵便所附てあつたので、巡査樣に頭を一つ下げさへすれば事が濟んだのてある。が交番の燒打以來夫れさへ出來なくなり、今度交番は新らしく出來たが、お手輕式のもので便所の設けのないものが多い。これては市人の不便實にいふばかりないのてある。吾輩は一日も早く共同便所の增設せられんことを當局者に望むのてある。事甚だ小にして且つ俗なるが如きも實は市の衞生、市の風俗に關することが甚だ大なるものあると思ふ。若し共同便所にして增設せられたならば、所々の塀や門に貼りつけてある「小便無用」といふなかしな札も自然其形をかくすてあらうと思ふ。(以上二件霧陰生)



二百號の四小說を評す

無名氏

中央公論記者足下、予は足下の命により十一月の文壇に現はれたる作物の重なるものに向つて、聊か妄評を試みやうと思つた、そこで十一月前半に出た小說は悉く之を讀み盡した、而も讀み盡して大に失望した、予は予が讀みし小說のいづれにも向つて敢て批評するの勇氣が出なかつた、予は足下の需に應ずるとの出來ないのを悲しんで居た、それは十一月前半に出た小說は、一として眞面目に批評すべき價値のあるものがなかつたからである。

然しながらそれは予のあやまりであつた、予は中央公論二百號なるものを失念して居た、ふと氣が着くとこれも十一月前半に發行されたもので、加之も予は其の文藝欄を讀んで少からず滿足したもの丶一人である、然うだ予は二百號に出た四小說を評しやう

尤も中央公論の囑託を受けて中央公論所載のものを批評するといふのは、何やらをかしな氣味のせぬでもない、けれども事實に於て十一月の文壇は該誌の四小說以上の價値あるものを有して居ないのである、その四小說を評するは、やがて十一月文壇を評する事になると信ずるからである、又、予は記者足下の囑託を受けたとは云ひながら、予の批評は足下の爲めにするものでもなく、中央公論の爲めにするのでもない、予は文壇の爲めにする批評だと大きく出る、然らばもとより足下の御機嫌をのみこれ伺う譯には行かぬ、まづい處はまづいと云ふ、此點に於ては足下が特に寬大な處置をとつて、文辭措置の上の斧正以外、意味の上の添削は御免を蒙りたい

と恁樣に大きくは出るもの丶、實はそれ程大した批評をするのではない、只讀んで感じたまゝを筆にしたのである

○付燒刄　露伴作

◆古來日本の文壇には喜劇的の者としては全く上乘なのがないと云ッても差支ない、一九でも三馬でも、予は之を以つて喜劇の上乘なものとは云ひ得ない、其他在來の戲作を取つて之を見るに、或者は單に文字言語の上のをかしみのみを主としたのだの、或ものは其筋をして特に可笑からしめんとして遂に不自然の弊に陷つたりして居る、眞に其結構文章とも高崇自然にして、而して或るをかしみを有するものに至つては、明治今日のやうに文學の盛んな時代でも、いまだ見ることが出來ないのである

予は常に明治文學の缺點の一は實に滑稽文學のない事であると痛嘆して居る

▲然る處、こゝに付燒刄といふ劇的のものが、現代最も尊崇さるゝ小說の大家に依つて書かれたといふは、吾人の喜悅に堪へない處て、また大に注意すべき事てあらうと思ふ、由來我文壇の弊として或る滑稽的のものは頭から人が馬鹿にしてかゝる風がある、悲劇的のものに隨喜する割合に滑稽的趣味を有した文學に冷淡である、古來から喜劇の發達しないのも主因はこゝにあらうと思ふ、されば世間の人は此付燒刄に對しても至極冷淡て、フムと鼻てあしらつて居るやうな風が見えるが、それは甚だ文壇の爲めに賴もしくない、惡作なら惡作、佳作なら佳作と、思ひ切つて批評して、以後の喜劇作者及び作物の參考に供してはと思ふのである

▲處て予は此付燒刄を何う見たかといふと、决して傑作てはないと見た第一の欠點は其會話の上にあるので、彼の强いて笑はしめん爲めに無理な言葉を使ひ、同じ言葉を繰り返すことが煩に過ぎたりして居る如き其一てある、これは今一層會話を自然にして貰ひたかッた、某新聞記者の如く、全然落語家の口吻であるとする說には贊同が出來ぬが、多少其傾向がないとも云へぬ、次には作者の心中にある溫間の性格と、作物の上に表はれて居る溫間の性格とが少し相違して居る、勿論質の上の差てなくて、分量度合の差である、思ふに恐らく作者は溫間を以つて愚鈍の人間とは仕ないつもりて居たてあらう、只意志の薄弱な、そして世才のない人間にしやうと思つたのてあらう、此作の結構から云つてもさうあるべきて、予は然うてあらんことを希望する、然るに實際作の上では愚鈍なる溫間として現はれて居る、これも無理に滑稽ならしめんとした弊てある

▲今一つは結尾第四に於て何か物足らぬ處がある、即ち妻の傳子の威勢に恐ゝて、意志の薄弱な、辨才のない溫間が遂に付燒刄の空威張りてあつた事を白狀するに至る、その敍述が足りない、溫間の屈しやうが餘りに早や過ぎて、讀者はこゝて原稿紙の一二枚拔け落ちたのではあるまいかと怪むてあらう、第一の場て餘りに饒舌てあつた傳子が、こゝでは餘りに寡言てある、何故に溫間の勢が落ちたかゞ甚だ明瞭を欠ぐ、こゝは一番傳子をして大に論ぜしめ、其うちに酒の醉は醒めて來る、考へて見ると傳子の言の方が最もに聞える、又自分の戀女房をむざと離緣するにも忍びぬ、戀情の絆にも縛られる、といふやうな事にして貰ひたかつた、思ふに露伴子は此邊を書きつばなしにして、再び讀み返さなかつたものであらう

▲恁う欠點ばかりを列擧すれば、此小說の價は全ろきし零てある樣に聞えるが、さうてない

▲以上擧げたのは至極些細な欠點で、これを以て此小說の價を定めることは出來ぬ、大體の上から云へば傑作てはないが、文壇近時の佳作てある。先づ其構想が非常に巧てある、少し先きの見え透いたやうな處もあるが、普通の人が書けば此單調に陷り易い趣向が、露伴子が脚色に依つて實に複雜に面白く出來上つた、當り前なら溫間が會社へても出勤して計らず同僚の世古戸に我妻の不平を云ふべき處を、局面を面白く發展さ

す爲めに二人して遊山に出かけるなどは中々平凡な作者の考へ及ばぬ處てある、これが爲めに野外の景色も寫せるし、變化も多くなつて來て、趣味を添へることも尠少てない

▲文章は露伴子一流の渾然たるもので、手に入つたもの、會話に於て彼の美しい趣味は見出されないまでも、拔かりのない話し振りの、人物の性格も表はれ、滑稽物としての技倆もある、料理屋て温間と世古戸との會話の如きは、時として以前述べたやうな無理な滑稽もないてはないが極自然て如何にも面白く出來て居る、尤もこゝが一番面白い幕てあるが

▲それから人物の性格てある、登場の人物は三人てあるが、温間が少し愚鈍になり過ぎて居る外、傳子ても世古戸ても活働して居る、彼等の性格は決して曖昧てない、傳子の悍婆的なうちにも女らしい優しい處のある、又家庭といふものを最も神聖なるものと解して家庭さい立派なら社交などは第二にして可いといふ今時の女學生氣質のある女てあるとが知れる、世古戸ても、世才の利いた上調子な、世話燒きの、世間によくある奴て、一々讀者に首肯される

▲實を云へば喜劇作者としての露伴子は、どうてあらうか、予は喜劇は子の長所てないと信ずる、併し流石は文壇の大家てある、自分の不得手な材をもつてしても、矢張り他の企及し得ざる妙處を有して居る

▲要するに傑作てはないまでも佳作てある、而して今日最も欠けて居る喜劇を研究するに就いて、文壇は此付澆乘に向つて多大の注意を拂つて可いと思ふ

○女客　鏡花作

▲風流線以後の鏡花子は甚だ振つて居ない、だれ氣味てある、新小說の胡蝶の曲ても、其前の瓔珞品ても、鏡花の短所をのみ蒐めたもので、予をして少なからず絕望さしたものてある

▲然るに此女客は其出來が頗る佳かつた、特得の文の妙と、彼の美しい會話とが、たとへば夕映の虹をたてに、緯に花紅葉を織つたやうな、云ふに云はれぬ神々しい、花やかな調子がある、讀み了つて、如何いふ筋て、誰がどうして慫うしてと、語らうとて語られない、只その美しい空想の途を辿るべき、或る細い金線のやうなものが頭の中に殘つて居るばかりだ

▲お民といつて緣つゞき、一蒔繪師(あるまきゑし)の女房の女客と、主(あるじ)の謹(きん)さんなるものとの對話て、遂には奇しい戀の緣の結ばれんとする刹那、それを妨げる乳兒の夢にうなされての泣聲、二階と下と離れて居るのに、二人の話が乳兒の夢に現はれる、その書き振りが勿々面白い、こゝいらが鏡花特得の處て、他の筆ては直に不自然な妙なものになつて了ふ

▲瑕瑾(きず)をいへば、お民の亭主と謹さんとの關係が明瞭てないのと、謹さんの今の職業が只一筆て知らしても可いのを何とも書いてないなぞてあらう

▲若し鏡花子をして云はしむれば、瓔珞品や胡蝶の曲の方が此女客よりは苦心の作て得意の作かも知れぬ、けれども事實此方が遙かに上乘なものてあるといはればならぬ、瓔珞品ても胡蝶の曲ても不自然て餘り空想

が過ぎて、其空想な辿るべき何等の糸條も見出せない事が往々ある、鏡花子に注告したいのは實にこゝの處で、空想は如何に迯うしても可い、それを辿るべき一條の金線を殘して、そして予が陷り易い不自然な傾向を免れるやうにすれば可い、予は實に不自然を避け得べき文章の妙といふものを有つて居るから、少し注意さいすれば敢て難儀なわざてはないのてある。兎に角女客は鏡花近來の佳作に相違ない

○岸の灯　春雨作

▲着想は四小説中の隨一といつてよろしい、物語の面白い處はたしかに四小説中の白眉てある、此點に於て予は讀者の之を歡迎したてあらうといふことを疑はぬ

▲然しながら、惜しいかな描寫の筆力が乏しい、若し鏡花をして此材をもつて書かしめよ、天晴れ傑作が出來るてあらう

▲表面の主人公は黑崎辰雄といふ會社員だけれど、實際の主人公は彌七婆てある、此彌七婆の物語が面白い處へ、最近に妻を失つた辰雄を配合して、其構想が中々以つてよく出來て居る、一は無教育ながら唯一の信仰、堅い〳〵信仰をもつて居る婆さん、一は常識のある教育のある紳士が、いまだ信仰を有せず、悶々の情に堪へない有樣、着想としてはたしかに佳い

▲けれども何故だか春雨子の筆は鈍い、筆が鈍い爲めに此最も自然な趣向をもつて、遂に不自然な處を生じて居る、たとへば、これ程有名な彌七婆さんが、曾て其地に轉地療養をして居た時分知れないやうはない、それを今日迄知らなかつたとは少し受取り難い、一寸筆の廻しやうて、こんな不自然な點は直に免れ得べき筈てある

▲第一鼻に着くのはその宗教的な處て、恁程迄に宗教的にしなくても、讀者をして充二分の同情を寄せしむるのてある、强いて宗教的ならしめんとした結果、却つて讀者をして不快な感を起さしめる、こんな材は、それ自身既に宗教的に出來て居る、作者が別に宗教的に書かなくとも、讀者には充分了解し得られる、いはゞ此小説は宗教小説といふ輪廓が際立ち過ぎて居る、恰も下手な寫眞のやうに、餘りに明暸に輪廓が立ち過ぎて居る、もう一層讀者をして想像をさした方が可い

▲春雨子はいまだ小説家としては經驗が若い、無理もないとてある、併し前途は有望てある、然るに予は近來苦心といふものをせぬらしい、又多く書かないらしい、予は子の爲めに悲む、もつと苦心をし、研究をして貰いたい、もつと多く書いて貰いたい、其筆の熟せないのや、會話の拙いのなども、決して子が先天的に下手なのてはない、研究が足りないのと多く書かない罪てある、春雨子たるもの、こゝ大に奮發して可からう

▲ひつこく云ふやうだが、着想は奇拔て、美しい、ほろりとさす處もある、が描寫の筆が少し足りない、返す〴〵も殘念な氣がする。

○薤露行　漱石作

▲いくら讀んても倦きないのは恐らく此小説てあらう、美しい〳〵うつゝのやうな夢を辿つてるやうて、實に氣持の佳い小説てある、種が西洋

種であるといふので、聊か意に滿たぬ心地はするものゝ、文章に力のある花のやうな美しい、先づ讀者を眩惑さする

▲もしこれを純粹の日本種にして書いたらと、予は讀むたびに思はぬ事はない、人物の性格もよく表はれて居る、そしてそれが如何にも西洋の武士であり、西洋の女であるらしく書かれて居る、これだけは他の者の眞似の出來ない點である、又一つには、詞藻の如何にも豐富なことである、淡々として無限の泉の湧き出る如く、盡きる瀬がない、作者も恐らく自分で自分の限りなく湧いて出る詞藻を制するに困つたであらう

▲强いて難をいへば、マロリーのアーサー物語を讀んだものでなくてはよく解し得られぬと共に、それ程趣味を感ぜぬ事である、こゝは一つマロリーを讀んだ事のない讀者を對手にして書いて欲しかつた、それから次には、文章は前にも云ふ通り、如何にも力があり、美しくもあるが、時々餘計な形容詞や、餘計な助動詞が入つて、嫌味を覺える事がある、たとへば、むざと、はたと、とばかりといふ如き言葉が多過ぎて、却つて煩はしく目に着くことである、これは漱石子第一の缺點であらうと思はれる、即ち餘り文に凝り過ぎるといふのである

▲予はいつもさう思ふ、漱石子は、こんな風のものよりも、喜劇に類した方面に於て成功すべき人ではないかと、幻の盾でも、一夜でも、之を彼の吾輩は猫であると比較して、其間に非常な懸隔があると思ふ、即ち薤露行のやうな眞面目極まつたものは吾輩猫のやうに得手ものでないらしい、恰も露伴子の喜劇と同じやうに、其得意とする處でないらしい、漱石子は吾輩は猫であるを書くときは、すら〳〵と何事もなく筆の運ぶのに、幻の盾だの薤露行などを書くときは恐ろしく手間がとれて、非常に苦心するのださうな、露伴子も喜劇的のものを書くときは、頗る苦心し、筆の運びも遲いさうである、これはその互に得意でない事を示すものであらうと思はれる、予は付燒刄の如き喜劇物を漱石子に書かし、薤露行のやうなものを露伴子に書かしたらと考へる、或は傑作が出來るだらう

▲而も大家は違つたもので、何を書いてもソツはない、如何に不得手なものでも、これだけに出來れば結構である、平凡な作者が、その得意な材に據つて苦心して書いたよりも、露伴子や漱石子が不得手な材を以つて書いた方が遙かに佳い

▲聞説く、漱石子は薤露行を書く爲めに、一七日間客を謝絕して苦吟したと、予は其苦心の跡を歷々と認めて居る、思へらく、小說を書くには、それ程熱心に眞摯でなければならぬ、某々氏等のやうに、金欲しさの餘り、門下生の作に署名して、敢て自分の名聲を瀆すにお氣の著かぬなどは、小說屋にして、文學に忠なるものとは云はれないのである、其卑劣な根性は直に作物の上に出現する、爭はれない恐ろしいものだ、予は露伴でも鏡花でも、又漱石でも、其作に對して苦心するのを特に多とするものである、其作者の品性はたしかに之を作物の上に認めるのである

▲予は此四小說に向つて、今一層細評が試みたい、併し豫定の紙數を超過するので、止むなく玆に筆を擱く、只々一度云つて置きたい

いは四小說ともに近時文壇に見えなかつた佳作であるといふこと、そして其いづれもが相當の苦心の餘になつて居るといふことである或は短篇小說として、今三十八年中の最も上乘なものであるかも知れぬ、否、予はさうであると斷言したい。

記者足下、予はこれで失敬する。

駁論二則

片山正雄

一、伊吹郊人に與ふ。

近頃「讀賣新聞」の日曜附錄に連載せられた、伊吹郊人の比興詩論は、比興詩（象徵詩に非らず）の長所短所を簡明に說明し、且つ要點に於ては殆んど遺漏なしと云つて宜しい。但し「同時に文壇の偏に新樣に眩惑して溫古の根底を等閑視するの缺點を警告」せらるゝ熱心の餘り、沫は我黨にまで飛んで來て、見るに足らぬ小論文まで、多少の攻擊を免れ無かつた。

郊人の象徵詩は比興詩と云ふの、「耳目に入り易く、唱道にも便ならずや」と思はるゝのは、固より無理からぬことであるが、自分の考では象徵詩と云ふ熟字も餘り珍しくは無い。森林太郎氏纂譯の諸審美書には、夙くから用ゐて有つた。名は孰れにしても宜しい。是れはさしたる重要の問題では無い。

併しながら佛獨の象徵詩（Poëme Symbolique, Symbolistisches Gedicht）即ち情緒藝術（Stimmungskunst）は、支那の比興詩と同一物なりと云ふ郊人の主張は根本的誤謬で有る。

凡て象徵法（Symbolik）の藝術に現はるゝ方法は、三種に大別せられて居る。

第一。觀念象徵法。藝術に現はれたる人物、狀態、事件等が、簡單、直接にして自然の意義を有し、同時に其よりも更に高尙なるもの、精神的、理想的のもの、即ち或る一定の觀念を意味する場合。但しこの高尙なるものとは、一定の內容を有する人事、（即ち朦朧たる情緒（Stimmung）では無くて）一定の人間の存在、努力、行爲の謂で有る。又此場合には、象徵として人間以下のものを用ゐることは、西洋藝術では稀れて有る。例へば群盲象を評する圖を畫いて、同時に人間の偏見、臆測等と云ふ觀念を表はしたやうなもの。又郊人の擧げられた、宋玉の九辨の詩の如きもの。又所謂Allegorie はこの內に屬するので有る。

第二。一般象徵法。例へばゲーテの「ファウスト」の如

く、ファウストなる一個人の性格、運命を描寫した一巻の詩として傑作で有る許りで無く、ファウストなる一個人の運命は、同時に發展の或る階段に於ける人類全體の運命を示して居る場合。この種類の象徴詩は最高の詩、理想の詩で有る。大詩人の眼を以て宇宙萬有を見れば、何ものと雖も或る意味を有つて居る。即ち或る高尚なるもの丶象徴ならざる者は無い。この意味より云へば、象徴詩以外に詩なるものは無い。この象徴詩とは Symbolische Poesie の謂で、Symbolistische Poesie の謂では無い。

第三。情緒象徴法。藝術品の裏面に匿れて居る者が、一定の内容を有する者、人間界の存在、事變、努力、行爲等で無くて、單に情緒（Stimmung 鷗外氏の譯語）に過ぎない場合。

情緒とは感情（Gefühl）の對象を有するとは違つて、全く無對象な心的狀態で有る。感情は一定の人物事物若くは事變に對する方向を有して居るが、情緒は斯る方向を有せざる感情の一狀態で有る。喜悦、憤怒などは一定の對象に向つて居るが、斯る文字を以て表はし得べき情緒は、一定の對象が無いから、たゞうれしい、腹立たしいやうな心地で有る。從つて主觀的で、且つ朦朧として居る。

猶ほ解り易く言へば、或人を見て、憎い奴だと思ふのは、憎惡の感情で、唯、何人に向つてでもなく、何等の原因のあるでも無く、且つ一定の言語を以て直接に言ひ表はすことの出來無い。たゞ何となく憎らしい心地は即ち情緒で有る。國語の「もの丶あはれ」なる語は、即ち情緒の一で有ると思ふ。ヘルマン・バールに云はすれば、これは神經の作用で有る。だから神經質の強い人程情緒に富んで居る。

却説この象徴法に用ゐらる丶、象徴は多くは人間以下の事物で有る。若し人間及び人事を用ゐると、其象徴は象徴の用をなさずして、作品に現はれたる人間及び人事の精神的表現たるにとゞまる虞が有る

例へば、伊吹郊人が擧げられた、司空圖の「罷釣歸來不繫船、江村月落正堪眠、縱然一夜風吹去、只在蘆花淺水邊」を以て、象徴詩と解し得べくば、この詩は「人心の安住」と云ふ心的狀態を表はせる者である。若しこの不繫舟と云ふ象徴の代りに、得道大悟した高僧などを用ゐると、象徴詩又は象徴畫とはならずに、唯高僧の心的狀態を表現した詩若くは畫となつて了うだらう。

次に、斯の如き情緒象徴法が藝術上の作品に現はれて居る場合は、言ふまでも無く無數て有る。色彩、圖形、音響、風景は云ふに及ばぬ。建築術、音樂、裝飾、模様、又詩文に於ては、韻律(リユトムス)、脚韻(ライム)等はか丶る象徴に充ち滿ちて居る。例へば韻律の如きは、一種の波動で有るから、吾等は此が爲めに、或は衝かれ、或は逐はれ、或は引き停められ、或は緩めらる丶やうな心地になる。從つて詩人が惹起さむとする情緒の種類に依つて、韻律の種類も異なるので有る。

以上はヨハネス・フォルケルト氏の「審美學體系」第一卷の所論を基として、多少の解釋と自説とを加へて述べたので有るが、さて佛獨のサムボリストの主義は、情緒を象徴によつて表現せむとするので有るから、其の主義を完全に實行した詩は、即ち情緒象徴詩と云ふべき者で有ることは言を俟たぬ。

* * * * *

却説愈本題に入つて、先づ伊吹郊人に伺いたいことは、郊人の所謂支那の「比興詩」なる者は果して、近世佛獨詩人の所謂 Poème symbolique 吾人の所謂「象徴詩」詳しく言へば、情緒象徴詩で有らうか。??

伊吹郊人の所謂「比興詩」が情緒象徴詩と一致しないことは、少くとも郊人が擧げられた類例に依つて明々白々で、一點の疑ふ可き處は無い。詩經の國風、韋蘇州の「滁州西澗」、高青邱の「猛虎行」、和歌の寄花寄月述懷、司空曙の「江村即事」、屈原の楚辭、宋玉の「九辯の詩」等は悉く情緒象徴詩と云ふ可きで有らうか。否々、郊人は不幸にして一切の象徴法を混同せられたのみならず、Symbolische Poesie と Symbolistische Poesie との區別にすらお氣が付かれ無かつた。今の文壇が「偏に新様に眩惑して、溫古の根底を等閑視する」のも、惡弊であるは勿論ながら、溫古の根底に拘泥して「容態の變化錯綜に依りて」生ぜる新意義の討究を怠られた郊人の罪も輕くは無い。

次に伊吹郊人は「比興詩の難解なるは、その詩體に有勝ちなる、若くは必然なる附帶條件」であると論ぜられたが、尤も至極の議論で、自分も情緒象徴詩の朦朧たる所以を以て、この詩を非難するのでは無い。却つて美は朦朧たる所にある、日光よりも月光、晝よりも曙若しくは夕暮の方が一層美的であることは、否む可らざる事實である。藝術品の評に「興趣豐かなり(シユテンムングスフオル)」とか、「氣韻生動」とか云ふのは、この「美」を説明したので、これより外に直接な評語は無いのである。併し

ながら單に審美上より言つても詩文の要素は、朦朧たる情緒のみでは無い。詩文の要素の第一に位するものは、繰返すまでもなく(帝國文學第九號參看)空想上の觀照で、これが詩に意味、即ち何を歌つてるかを示すもので有る。例へば司空圖の詩を讀んで字義を解した次には、幾度も〳〵復誦するうちには、繋がぬ舟の水に漂へる有樣が、夢のやうに心中に浮んで來る。この空想上の觀照と、これに伴うて起る感情若くは情緒との間に、所謂享美の態度なるものが有る。其他審美學者に言はすれば、詩文の要素については色々喧しい議論も有るだらうが、右の審美論は學者若しくは詩人ならぬ人も首肯の出來る、經驗で有ると思ふ。

然るに所謂「象徴派」、「デカダン」の詩論では、空想上の觀照（Phantasieanschauung）と云ふことは、第二に置てある。これは詩文の目的ては無くして、かの音格、音韻等と同一位に位する手段の一たるに過ぎぬ。詩文に於て(技功上)最も情緒、興趣に富んで居るもの、換言すれば音韻音格情緒を起させるものは、前述の如くて有る。だから象徴派の詩文は殊に重きこの外形、即ち技巧に置いた。例へば維納新詩社のステファン・ゲオルゲ(帝國文學第九號參看)の詩の一句に

Donchen war der raum der blassen helle
der weisses licht und weissen glanz vereint,
das dach ist glas, die streu gebleichter Telle
am boden schnee und oben wolke scheint.

と云ふのがある。第一に名詞の頭字を取り捨てたことが、この詩を讀む者をして朦朧の情緒を引起さしめると。但し西洋の詩は聽くために出來て居るから、これは差支へぬかも知れぬ。第二に母音a、e、i、e等の用法が巧妙に出來居ること。これ等の母音は漢音の「哀々」等と同樣に、寂寥、悲哀の情緒を起すに適して居る。第三に blass, bleich, Helle, weiss, Licht, Glanz, Glas, Schnee, Wolke（青ざめたる、鮮かさ、白、光、玻璃、雪、雲）等の冷かな感じの有る詞を集めて居ること。其他の手段を以て一種の情緒を起さうと努めて居る。此の如く技巧過重の結果として、却て審美的享受を妨げ、讀者は何等の感興をも起さず、唯だ言語の使用の巧緻を嘆美する許りだ。日本ては某々等の詩がこの一類。彼等の詩の多くは、冷い蛇の體にさはつたやうな心地を起させる。

夫れは扨て置き、明了な（比較的）印象を與ふる要素なる、空想上觀照を閑却して果して詩と云ふ者が出來る

だらうか。出來たとすれば出來損ひて有る、所謂象徴主義の實行せられない結果で有る。但し自分の所説は帝文第九號に云つて置いたやうに、「この派の理論を演繹して、たゞ極端の場合を云つたので有る」ことは伊吹郊人の承知せらるゝ所で有らう。

又象徴主義は實に情緒を重んずるの餘り、情緒を起す緣たる緒形象すら、明かには描かうとしない。この種類の描寫は詩人の職務で無くて、記錄掛の仕事だと云ふ考だから、この派の詩人は成る可く空想上觀照を避けむとするやうに成る。極言すれば詩文(藝術)を變じて裝飾術（dekorative Kunst）となし、文字の意味を捨てゝ、唯其の情緒上の價値のみを存し、唯一種の模樣(オルナメント)とせうと云ふので有る。だから何を言つたのやら、何を歌つたやら、譯(わけ)も解らぬやうになり、難解は一歩を進めて不可解となるのは自然の勢。而して此の不可解こそ却て象徴派の誇とする所では無いか。自分の考に依れば象徴詩の上乘なる者は、象徴詩と解せずとも、既に傑作と云ふ可き價有る詩で有る。象徴詩として始めて價値ある詩は、未だ傑作とは言はれ無い。

又朦朧に美が有ると云つても、朦朧のみでは美は成立しない。朦朧とは明亮の反對で有る。だから明亮が無くては、朦朧が有る筈がない。兩者の對照調和に依つてこそ美は成立するので有る。朦朧も美で有らうが、何時も〳〵霧や烟に卷かれて居る心地は、奈何(どんな)で有らう。「情緒のみにても猶ほ且つ詩と云ふ可きものを成するに足る」と云ふ郊人の説は即ち明白な誤謬で有る。情緒は詩の一部分を成すに過ぎぬではないか。

之を要するに、象徴派の詩學の大誤謬は、部分を以て全體に代へむとした事、情緒のみが詩の內容となる値を有すと主張した事で有る。これは亦同時に郊人の誤謬。

斯く論じ來れば、伊吹郊人の比與詩論の根底は全く壞れかゝつたでは無いか。なほ進んで諸々の細目に涉つてもよいが、今回は要點だけに止めて置く。郊人以て如何となす。説あらば請ふ聽くことを得む。

猶一言す可きことは、伊吹郊人の心理學及び審美學上の用語が、曖昧に陷り易きことで有る。例へば情緒、意識の如き、甚だ要領を得ぬ。切に郊人の注意を望む。

（十月八日より十月廿九日に亘る讀賣新聞日曜附錄參看）

二、沙上行人に答ふ

Hühner, die viel gackern, legen wenig Eier.

余が先般、「神經質の文學」を完結した所が、沙上行人と云ふ人が十月の「明星」に於て、厭味たつぷりの評論を書いた。これは「讀賣」の伊吹郊人批評とは違つて、余の所論に對する批判では無くて、余が論文の出所に關する揣摩臆測に過ぎぬから、知らぬ顏をすれば濟むやうなものゝ、其評の中には余が人格に對する侮辱と藝術上の謬見とを含んで居るから、評論界一般の爲めに、辨明と駁撃とを敢てすることとしたので有る。

第一に言つて置くことは、余が論文は余が論文で有る、剽竊でも無く飜譯でも無く（全體としての）又燒直しても無い。余が批判は徹頭徹尾余が意見で有る。夫れば例令他人を宗とすること有らむとも、適當なる理會と消化とを經たものだと信ずる。この議論が例令行人の眼中には「獨逸人が書いて居るやうな氣が仕出さう」とも、「拙き遣り方」で有らうとも、將たこれが爲めに余が「所說の信用」を害せうとも、其出所を示すと否とは余が事て、行人の係る所では無い。又其出所の不明な爲めに必ずしも議論の價値が上下する者では無い。たゞそれが正しいか誤つて居るかが大切で有る。然るに行人は此點に就いても、余が叙述の巧拙（文章として）に就いても全く無言の行人だ。君の論を批判で無いと云つたのは無理は有るまい。

第二に余の小論文は叙述を主として議論を副とした積りて有る。余の叙述には所々「糊と鋏」の仕事らしい奴が有るのは決して否まないが、是れは其原文が一字を增減す可からず底の傑作で有るからで、其他の場合の引用は引用符附きの章句か、若しくは余自身の叙述に同化せられたもので有る。引用符附き若くは何某曰くとある所丈けは引用書も自然分るやうになつて居る筈だ。叙述若くは（Charakterisierung 等は余が自己の觀察に依つたのも有らうし、參考書によつたのも有らうが、一般讀者に對しては不必要と信したから別に事々しく參考書を擧げることもしなかつたので有る。余の論文の記事は余が示し得る參考書を讀みて、Orientieren し得る人々には確かに珍らしい事でも何でも無い、最近文學史の二三册でも通讀した人にはハヽア何の本に依つたのだなと云ふ大略の鑑定は着きさうなものだ。その鑑定が着かない共、少くともヘルマン・バールやフォルケルトやチーグレルなどの著書が引用せられたこと位は確かに解る。又この種の論文に於ては、相當の專門知識ある人からは、參考書が見えすくかも知れぬ（事實には獨創の意見は無いから）。其他歷史上、科學上の論文に於ても同樣である。參考書が見え透いたからとて、ちつとも論文の價値に影響は無い。論文の價値は意見の獨創の外に、材料の整理、排列に在つて、材料其物に在るのでは無い。

行人は議論々々と能く仰しやるが、僕の論文（アウフザッツ）は叙述を主として議論を副としてあることを注意せられよ。叙述の材料は事實だ。事實に Nein も Dein も有る者では無い。叙述其者が作者の所有物である。自分は叙述のために可成澤山の斷片を拾集し、無理、融合した積りだ。何處から

何處までが誰の本に依つた區別は一寸つき兼れる。若し夫れ行人は「千何百何十何年某生る」といふやうな記事にまで、張札をしろと仰しやるのか。「小生は竊かに微笑を禁ずる能はざる者に候。」

第三に行人の「思ふに片山氏の論文中純粹に氏の意見と見て差支無きは」云々の語は、確かに行人が、余の論旨を、余の意見にあらずとし、余は余の意見ならぬものを余の意見といつはる者であると信じて居ることを證明して居る、換言すれば行人は片山は欺罔者也、剽竊者也と公言することになる。斯かる侮辱は果して赦るさる可き者であらうか。是れ實に名譽事件也。生死を堵しても爭ふ可き男子の面目問題で有る。併しかゝる輕卒な無禮な言語は文壇に於ては有勝ちの事だから、自分一人忍べば圓く治まる譯では有るが、文藝批評の爲めにも有害無益の言論は、堅く迄追窮して文壇の外に放逐す可きもので有るから、敢て極言する所以。讀者諸君も余が意を諒とせらるゝだらう。

第四、行人の曰く「詩文の事は詩文を作るものゝみ論らひ得可きにて候はすや」と。審美派の「デカダン」が言ひさうな事で、恐人を成嚇するには足るだらうが、識者よりして之を見れば「然かも是れ一嘘(?)に附す可き値だに無き謬見に候」。文藝上、審美學上 l'art pour l'art 若しくは l'art pour les artistes の主義が何等の價値なきことは、言ふ丈けが野暮だ。詩文か作らずして詩文を理解し評價し得ることは常識でも解るでは無いか。技巧と云ふ專門的なものでも、審美的趣味の發達した人には、例令詩は作れないにしても、之を完全に理會し評價する能力、從つて之を論ずる權利を有すと云ふ簡單な理窟が解らぬとは不思議。十一月の「明星」に於ける行人の追加的訂正も全く無効になつた。又行人の議論によれば、一切の文學史、詩學、審美學は所謂詩人の手に成らなくては、不信用で有る。又例令詩文を作つた經驗の無い人でも、之を作る能力を有せぬとも限らぬ。行人の詩才はどんなものか知らないが、一般に鼻糞程の詩才を鼻にかけて「詩文のことは詩文を作る者のみ論らひ得可し」なぞとの御詫ほど醜い者は無い。「口幅つたい」とは玆の事。「小生はひとり行人に對して此の言を爲す者に非らず候。」

第五、且つ最後に、「近時我國にも技巧を過重する弊風」が行人の眼には映りませんか。燈臺却て甚暗しとかや。「明星」を見玉へ。余の抽象的辭句の實例は累々として集まつた居るでは無いか。「技巧無くして何の詩ぞ」と云ふ頓珍漢な議論を遣つてる人はどの雜誌の評家で有つたか。嗚呼々々嘴くも僞し。

とは言ふものゝ引用書を掲載しなかつたのは、固より自分の怠慢たることを免れぬ。玆に氣を付けられた行人の好意は篤く感謝するのであ る。猶ほ將來は大に注意して再びお叱を受けぬやう致します。併しながら「讀んで氣味惡き」揣摩臆測の駄評や、「小生は竊かに微笑を禁ずる能はず」なぞと云ふ獨りよがり、又は「詩文の事は詩文を作るものゝみ論ひ得べし」なぞと云ふ名論卓觀等は、一竊御免被り度きものに候以上。



漫評

曰く錄

白眼生

▲戸水寛人氏曰く　元老も政府も皆無能で時勢後れて、政黨も議員も皆腐敗し、墮落して居る。こんなものを頭に戴いても戰爭に大勝利を得たのは全く國民の實力が非常に發達進歩した爲めに外ならぬ。どうも日本も實にエラクなりましたよ。

▲氏又曰く　小村の支那へ行たのは支那をうまく宥めやう爲めであらうが例の手緩い仕方では駄目と思ふ。支那は米國をやりこめた矢先であるから其勢はなか〳〵しばらしいものです、ぐづ〳〵言つたら滿洲の兵を其儘支那へ差向けて談判する積てなければよい結果は得られまいと思つとる。列國の意向？ナアーニ英國さへ同意して米國が故障をいはなければどんなことでもやれますよ。

▲堺枯川氏曰く　どこの新聞雜誌でもソロ〳〵社會主義を賣物にして來ましたね、自分が確とした態度を極めて書かぬからいけませんよ。然し態度を極めると政府が恐いかも知れませんね。とにかく社會主義を書いて呉れるのは一種の廣告になるといふ見地から見れば喜ばしいのですが　。

▲島村抱月氏曰く　文士のライフのスドラッグルは實に慘憺たるものですな。この問題はどうしても解決しなければなりますまい。

▲氏又曰く　僕の小說ですか、ハヽアー、アノ新小說に噂のあつた？アレハまだ完結しないんです。主人公？英國の女を書いて見たい積てしたが何時出來ますか……。

▲德富蘆花氏曰く　黑潮ですか？一ケ月に一度のよですから成るべく多く書きたいと思うて居ました。「新紀元」の半分も書きたいと思うて居ますがどうな

りますか、一回に十頁以上？無論十頁以上は書きたいと思うて居ます。道子は女主人公だかとお聞きですか？マア其一人てせうな。晋との關係？私は水到りて渠成る主義て先き〳〵のことは考へて居ませんが、無論關係はつくんでせうな。

▲氏又曰く　少しコミカルのものを讀んで見たいと思うて居ました。人生口を開いて笑ふ幾日かあらんやて空しく憤り、徒らに憂ふるもつまらんですからな、まアコミカルなものでも讀んで大に笑ひ、ゆつくりした方がイヽてせう。。

▲氏又曰く　どうも今迄はまるで遊んで居ました。大概遊び好きなもので勉強をせなくても遊んで暮らせるものですから…。黑潮の稿を焚いたのなんといふことはまるで嘘ですよ。私が少しても書いてさへ居れば時の何たると處の何たるを問はず、世に出して居るんですれども全く遊んで居つたものですから…。

鬼面魔語

醉美生

○法學博士福田德三氏年尙ほ壯にして而かも經濟學の造詣深く、殊に其氣骨稜々として兼て研學の志深きを以て令人に推されて居る。此頃大學の生徒と一所になつて宮崎博士の日本法制史の講義を聞いて居るさうぢや。博士にてもなれば直ぐ天狗になる連中と自ら選を異にして居ると思ふ。

○堺枯川氏の門には白い半紙に黑々と書いた貼札がある。讀んで見ると「犬入るべからず但し四足の犬は此限にあらず」

○讀賣の千山万水樓主人といふは足立北鷗氏に疑ないやうであるが其材料の供給者は河上肇氏であらうとの噂がある。

○社會主義はいろ〳〵の點から研究すべき餘地のある大問題であるが、第一に精確なる經濟學の基礎に立たなければならぬことはいふまでもないことゝ思ふ。然るに今の若い連中には全く經濟學上の研究もせずに社會主義を擔ぎ廻る人のあるのは少しく輕卒に失すると思ふ。勿論經濟學といふのは必ずしも在來の學說を指すものにあらざるはいふまでもない。近頃安部磯雄氏が獨占事業論でこのことに注意せられたのは甚だ吾人の意を得たものである。

○今の若い女に最も危險なものは美しいリボンと金の指輪とであろうと思ふ。何となれば彼等は此等のもの丶爲めには何物をも犠牲にしかねまじき氣風になつて來たからである。

○これより一つ歌舞伎座の評判を申上げん。

○片市の權四郎は近來の劇壇に又となき妙技であつた。あーいふものをやらしては確かに日本一といはればならぬ。

○羽左衛門の源太。鬼太郎氏などは筆を極めて賞められたが僕は左程には思はぬ。第一形の其人にならぬのは天性止むを得ずとしても、勘當されてからのあの衣裳の好みはどうぢや。まるで徳川時代の町人の色男しか思はれぬてはないか。但し「川を渡るは拙者と某、サ、南無三寶ー」のあたり、「お暇申す母上樣」のあたりの臺辭廻しは羽左獨得の妙技、何となく胸が透く心地がした。

○八百藏の平次。全く默々兒か、はた腹黒き惡人か、一向人物の性格がわからぬ。失敗といふべきぢや。然し袖振り切つて逃げ行く千鳥を見送る形がよかつた。

○吉右衛門の郡内輕妙此上なし。梶原の年に合せてよきは無論であるが此優には矢張り由良の助とか熊谷(熊谷は是非やらしたいと思ふ)とかいふ方がよく猶るやうに思ふ。

○時藏の源太母少々ればる氣味はあるが流石に老功。

○二番目は見ないから評なし。

○僕が劇場を建てると改良の手始めとして行ひたいと思ふことは第一黑坊の廢止、第二乳呑兒を連れた人の入場拒絶、第三演劇中(即幕明き中)には一切入場を許可せぬこと。第四愁嘆場の拍手厳禁等である

○柳浪氏の新小說に出した短篇「戀のうたかた」は所々の描寫の活躍を外にして小供だましのやうな作であつた。僕は實に柳浪氏老いたる哉の嘆を發せざるを得ない。

○天外氏の報知に連載しつゝある「緣不緣」は流石に旨いものである。新聞小說を讀むこと大嫌いな僕もあれ丈けは牛乳屋で讀み續けて居る。

○僕の時々讀んで後悔するのは柳葉といふ人の「二十六文嚔」と孤劍の新體詩と、帝國文學の野の人の時文である。

○最近のホトギヽスに出た四方太氏の「宦家」は相變らず旨い。殊に「大きい縞の切れに麻の葉が刺してある」の句などは何でもないやうで而かも無限の詩趣がある。虚子氏の「蠑螈の影」も多少作爲の跟はあるが面白い作だ、兎に角ホトヽギスは僕の好きな雜誌である。



お稽古

飛燕客

これはこれ山の手は存じ申さず、苟も下町邊へまかり見れば、七歳八歳から十五六、女の子の一大學問で、例令て申すと上つ方ては、お茶やお花、女禮は小笠原で御座るとか、お花は池の坊だとか、お茶は裏でお菓子は表の風月・・だか奈何だか、それまでは奥深うして知るよしもないが、學校からお車でお歸り遊ばすと、おやつをねだつて、あうのこうのと、さんざんおむづかりの上、お稽古にお出掛け遊ばす處、町人は仲々以て、そんな我儘をさせたものでない、學校から歸る、それ庭を拂け、板の間をふけ、おまんまがこげるぞ餓鬼をだけて、この世話場一幕すむと、今度出かけるお稽古は、お茶よ花よの品さきでなく、ピヤノだの琴だのとは、どんなものやら喰つた事がないと言ふやうな有様、ヴアヰヲリンの替りに三味線を、唱歌の替りに常盤津を、ダンスの替りに踊を習ふのである。

それも女の藝として正に之れあるべきもの也と云ふ、條目的の考から、お稽古をせさるのなら、猶且つ感心すべきであるが、豈計らんや夫れ然り、斯うして毎月五十錢の月謝に三十錢の糸代を出して、お稽古に通はする所以のものは、この娘が大きくなつて年頃になつて一人前になつて、十六七になつて、鬼も何とか番茶も出花、白粉をぬたくつて臙脂をつけたら、と親は又格別美しがつて、それ相應の商賣をさせて藝にかけた元金は利に利をつけて、これで親たち左團扇を使ふつもり、まだいろはのいの字も知らぬ娘を見て、既によい旦那が出來たらの空想をなすに至つては、親たちの心底、カン心はカン心だが寒心と漢字ては書かなけりやならぬて、

勿論十人が十人、そんな量見てもなからうが、又あられてはたまらぬが、兎に角、お客様など來た時に、お酌位が出來んて奈何なる、お肴に踊の一とつ、端唄の一とつも出來んては、女としての耻はもとより、第一親達の肩身が狹いてはないか：：位の思想てある事は、小生神明に誓つて保證する、

されば說くこのお稽古、以て身を錬り體を鍛ふの具たるならば、第一日本固有のものてはあるし、某とて何條彼是申しましよう、なれども、金切聲をピー〱やつて、やつとそれか乙になつて、どうやらころがるやうになると、地震雷火事爺と、五恐の一に數へらるゝ眼玉と俗に云ひ、又藥罐とも異名するものが、其山の神と合同して、以て喰物にせんとたくらむとあつては、又憂ふべき悲しむべき現象てある、ナンテ下流社界の現今の理想をも知らず、こわいろじみた事を云ふてもあるまい、敢て下流社界ばかりてなく、野郎は閣下とか何んとか云はれ、嬶は夫人とか何んとか云はるゝ家庭にして、娘に披衣紋とやらせ、濱島田とやらせたがるもの、決して多數ては御座なく、又娘それ自身も、こんな姿をいゝ氣になつて、賣春婦のやうな風態をなし、賣春婦のやうな態度をして、しまひには賣春婦のするやうに、役者に血道を上げるに至るものも、又敢て稀れてない、チヤンが既に賣春婦を喜ぶのだもの、娘がこんな事をしたからと云ふて、つまりチヤンの志のある所に從つたのに外ならぬから、チヤンたるもの亦小言を云ふべくもあらずだ、して見れば平民共が、例ば熊や八の考が前記の如してあるからと言つて、別に驚くにも何んにも當らぬ、正に之れ當然然るべき順序てあるかもしれぬ、

扨て前置きはよい程にして、お稽古なるものに就て、いさゝか記する處あらんかな、と云ふた處、長唄もあり常盤津もあり、淸元あり新內ありて、これを一々紹介するは、到底書く方も難澁なれば、讀む方も一大事業てあらうから、今は玆には、踊に就いて一寸述べる、尤も踊と云ふた處、實は小生根本的の局外漢て、諸君の前にナマイキを云ふの資格はないが、ほんの井底の

蛙ののぞき見、即ち踊の見聞錄であるわい、さりながら、踊は人皇十百代、天のヒヨコ立の尊の御代、何處だるまの椽の下て、おかめとヒヨツトコと談合してなど〻、茲に踊の因源位は記すべきてあらうが、お恥かしい話乍ら、この方にかけては、チト不案内デナ、これは歴史家に一任しようよ、

扨てこの踊、藤間でも松賀ても、踊は踊なれば區別は致さぬ、家賃と敷金とて一樣てないは、今更申すまでもないが、先づ其家の有樣は、豆腐屋は豆腐屋らしく、湯屋は湯屋らしく、大抵似たものてあるから、東京市中の踊の師匠の、家の樣子を一々記すの愚は致しません、お定まりの格子戸をがらりやると、頭の上へぶらりと下るお神燈、小さなカツコの三ツ四ツあるは、左團扇のそれかあらぬか、大きな下駄は近い處の、職人共の稽古に來るのてある、

障子を明けると八疊ばかりの一と間、正面の上の方に、お師匠樣の札があつて左の方には、お弟子共の名がヅロ〱とある、其こつちには、扇を手拭にくるんだが、下から上へずらりとある、其下は廣さ一間程の板の間て、一段高う作られてある、これなん即ち其舞臺にして、黑うピカ〱として居ると思召せ、右の方には何やらの、神か佛かお燈明が點いて、向ふの側には、棒やら刀やらが立て〻ある、と見れば棚の上には假髮(かつら)もあり、

「お師匠さま、今日は……

と來る、いづれも堅い帯だ、

前に云ふのを忘れたが、小供は大抵夕方か、或は朝早く來る、即ち學齡兒童は普通教育を受くべきの義務があるので、學校へ行く前か、若しくは、學校から歸つてから來るからで、之れに反して半玉などは、大抵おひる前後に來る、これは云ふまでもない、お坐敷のない時だ

「みいちゃん學校は？

「いま歸つたの

「そう昨日は有り難うよ、たいへんお佳味(いしか)つたのよ、歸つたら母さんによろしくね」、師匠さん何か貰つた

「今日は老松を始めますよ、その前に好ちやんのをしましようね、さア〳〵、(申し靜さま)を一とつ、さらつて御覽なさい、まだ出來ない？困りますね」
と三味線をとる、
「文句は自分で云はなけりやいけませんよ、(申し靜さま、お女中の足とあなどり、思はぬ遲參、眞平御免下さりまし、
その御したわせは御尤樣、さり乍ら、我君このよしのに、お忍びあるはお二方、つきぬえにしの妹背川、さして行衞は春立つと、云ふばかりにやみよしのゝ今朝は見ゆらん)
もつと上を向かなきや見えないよ、見渡すのだよ、お前さんのは拾つてるやうだほゝおぼいて？おぼいたら云ふんだよ、
(申し靜さま……)
魚屋さん何かあるの
と此時來たりける魚屋に物申す
「いゝしらめはいくら？……そう、置いといておくれ、あア皿に入れてね、猫にとられないやうにして置いて下さいよ
(お女中の足とあなどり、思はぬ……
今日は……
と、今這入つて來た娘に挨拶する
(遲參、眞平御免下さりまし
但しお師匠樣が中途にして、他人と話してゐる間は、舞臺でポカンとして居ると知るべし、お次ぎがかわる、
(テントンシャン松の太夫の
師匠口三味線で自ら踊り、娘は之れに從つて踊る、尤もこの邊の小見たちは、大抵踊にかゝる前に、歌の方は上げてあるので、テントンシャンの間の手も知つて居るので、大分のまごつきもせぬけれど、其處へ行くと旦那藝は、隨分トンマなものである
抑も旦那藝と云へば、商館の番頭さん、遊び人などの藝であつて、五十錢の月謝三十錢の糸代、合せて八十錢の處、圓助出して濟ました人たち、道樂がして見た

い人達なり、こう云ふ人には師匠たるもの、勢ひ特別待遇をせざるを得ずて、つまり藝に對する目的が、根本的に小供たちとは違つてゐるので、猫でも呼んだ時にナカと云ふ方面にばかり持つて行く、

「さアあなたの番ですよ、一とつお見せなさいな、何と何が上りましたつけ、そう〳〵、紀伊の國に、梅にも春、夕ぐれてすね、夕ぐれからお見せなさいな

と云ふ調子だ、扨て松の木のやうな足をどたばた、蛙のはねるやうな事をはね終ると

「ほんとうに御きやうですね、お世辭ぢやないの、全の處近頃のお始めとは見えませんよ、三年の蹈てす

などゝ油のありたけをかける

「全く

と師匠仲々濟ましたものなり、されば奈何トンマでも小言は決して申すことなく、たまに足でも出しまちがへると、

「右のアンヨから出すのよ

なんて、アンヨ呼ばりをされる足が、十文半とは驚くだろう

斯うして、はねて居る間、外の人は、小供も共に、おチャンとして之れを拜見するので、小供などは飽きずにはゐられない、袂から毛糸が出る、編物を始める、お手玉をとる、笑ひ出す、と師匠きつとなつて、さわいでゐちや私の唄が聞えやしないよいと、小供に向つて矢は放つが、大供には、ふり返て莞爾、それでもまだ騒ぐ時には、戸棚の内から、おせんべいのやうなもの、さアおとなしいから、お褒美だよ、と喰ひもので口をふさぐ、

此の外出稽古もするが、これは多い數でないから、大抵手頃の、ひまの時を見て、一寸行つてくる、勿論三味線などは、持つて行くのではない、出稽古の月謝は、大抵包み金であるから、反つて割がよいそうだ、

其外、年のくれなどにやる大ざらひは、義太夫も長唄も、大抵同じやうなわけて、近頃上げたものを念入れにさらわせて、當日假裝で踊るのである

社會側面觀

▲奇警なる觀察の投書を歡迎す▲二百字以内楽書に限る▲締切は毎月十八日

▲其源因如何　本郷　美術家

女子美術學校の生徒諸姉を見るに悉くとは云はないが、先づ大抵非美術的の御方ばかりだ、之は諸姉が外形の非美術的なるが故に大に美術を研究し手腕を以て其欠陥を補ひ、以て世の一顧を得んとする積りで此學校へ入學したのてはあるまいか、併し或は又他に源因があるかも知れないが。

▲御注意迄に　神田　大向生

本郷座で巳が罪の櫻戸子爵に扮した小織(こをり)桂一郎を小織(こをり)と聲を掛ける人が有た、荷もだれ、正劇を見て其妙所を知り賞賛の辭を發し給ふ我劇通諸君にして役者の名前を問違て呼ぶなどは、第一役者に對して失敬なばかりてなく自身のオーソリチーに關する事少からずじやないか。

▲陥落髪　番町　嘘二〇三番

和田垣博士は指環は女子を繋ぐの具なりと仰せられたが、僕は此頃流行二〇三高地卷と云ふ髪を以て、旅順の二〇三高と同じく、攻撃せられ占領せられ、やがて陥落さるゝの意味を表はしたる髪にて、オホンちと失敬だが未婚の女子諸嬢には尤も適當にして且つ一見其未婚たるを表はすべき絶好の髪だと思ふ。

▲おめかしなさい　新宿　老婆心生

凡そ天然美の少きものは人工を加へて其缺點を補ふは普通だ、然るに天然美の尤も發達せる若き女には能ふだけ人工を加へて美しくしながら、反對に天然美の鈌乏せるお婆さんには少しも人工を施さずして醜い顔をさしてるのは甚だ奇怪なる現象て、殊にかゝる非美術的の顔を我が堂々たる男子の前に臆面もなく差出すのは甚だ失敬極はまるてはないか。

▲河合君にお尋ね　本郷　馬足生

本郷座の巳が罪に環夫人に成た河合武雄君が、作兵衛の小屋での言葉に、いゝいゝ隅田川から投身せんとしたと云ふてるが演者も觀客も氣が附かぬ様だ、川へ身を投げると云ふ事は聞いたが川から身を投げるとは隨分新らしい、新派俳優中の役者本郷座に此人なくてはと云はるゝ、河合君、之はお尋ね。

▲高尚な遊びと野卑の術語　ビリ生

キンタマといふ語が既に變な慾を起させるものだから自然、突くとか、ヒネルとか、キユーを立てるとか、牛立にするとか、大金玉(オホキンタマ)とか、溜(ロス)キンとか、抜けたとか、入れるとか、行くとか、如何はしい術語が更に如何はしき聯想を生ぜしめる、これが紳士の多く出入する玉突(ビリヤード)である、餘り人聞きのいゝ言葉てないから、これだけは何とか代へて貰ひたい、ビリヤード、ビリヤード！何といふ穢い音だ。

地方雜觀

丁字樓



（八）役員の糶賣

議政場の市場と其觀を同じうするとあるは、既に之を言へり、而して役員選擧の如きは、多くの場合に於て、全く糶賣なり、故に其選擧の標準は、人物の良否にあらず、才幹の有無にあらず、識見の高卑にあらず、一に利害の打算、二に感情、三に黨派心なり、就中最も有力なるを利害の打算となす、是に於てか糶賣行はる。

（九）用語已に商取引的なり

役員の糶賣に於て、其候補者を定むるに當り、甲は曰く誰は賣れる、乙は曰く誰は賣れぬと、此「賣れる」、「賣れぬ」の語の商取引的なるも、亦可笑しからずや。

（十）交渉又交渉

この糶賣的なる役員選擧は、其位地に對する評價の決し難きが爲に、或は二三月、或は五七を費し、甚しきは會期の大部分を費して、尚未だ交渉の纏まらざるとあり、而して是が爲に、議長又は副議長等を得ず、即ち當に有るべきの役員を得ずして、議會の成立を告ぐるに至らざるも、議員は恬として顧みるとなし、是れ豈に篤實なる紳士、善良なる人民の能く忍ふ所ならんや。

（十一）福井縣會の失態

斯く記し來りたる時、偶ま新聞紙上、福井縣會の事ありしを想ひ起せり、同縣會は本年十一月、議長選擧の爲に紛爭を生し、曠日彌久、徒らに交渉を重ねて、會期を空消せしが、縣知事は之を傍觀するに忍びず、個人として各議員を縣廳に召集し、速に議長を選擧して、議事を進捗せしむ可きとを勸告し、其極み竟に各派議員に於て候補者を選定し、知事官房に集會して、副議長立會の上、候補者の抽籤を行ふとはなれり、縣會として這般の問題に關し、知事の容喙を受くるに至りしは、失態なりと謂はざる可からず、況んや知事の勸告中には、若し尚斯の如くして決せざらんか、知事として相當の處置を執らざる可からずとの言ありしと云ふに於てをや。

（十二）自裁的能力ある可し

吾等は福井縣會の議長選擧に、如何なる内情ありしやを知らず、又敢て

之を究むるとを好まず、而して其處に如何なる內情ありしにもせよ、議長選擧の爲に、徒らに紛爭せるありしは、確かに失態なり、此失態に付縣當局者の干涉を招くに至りしは、更に失態をWにしたるものに非ずやそれ縣會は縣會なり、屹然として縣當局者の干涉外に卓立せざる可からず、而して其卓立するや、必らず自裁的能力なかる可からず、此能力は各員が「議員としての常識」を具ふるより來る、豈に深く省慮せざる可けんや。

（十三）　苦々しき知事の勸告

吾等は又、福井縣知事の如何なる人物なるやを知らず、然れども彼は、吾等の將に爲さんと欲する所を爲したり、蓋し從來彼が如きの紛爭は、其例に乏しからざるも、縣當局者はたゞ「兎角町內に事なかれ」主義を持し、吾不關焉を極め込み、絕對的に議員との衝突を忌避し、偏へに我が位地の安固ならんとを希ふのみなりしに、福井縣知事は敢て「苦々しき勸告」を試みたり、是れ凡庸の醫師の、空しく手を拱いて、其經過を看んとする時に當り、思ひ切つた一藥石を、重患の病夫に投じたるに均し、而して起死回生の効を見たるは大出來なり。

（十四）　交涉中の醜體

それは俗置き、一般地方議會の役員選擧の爲、否、寧ろ其豫備の爲に、徒らに日時を費しつゝあるの間、議員其人は如何なる醜體に於て在るかを問へば、多くは事を密議の中に決し、計を杯盤の間に定めんとす、乃ち其內情を窺へば、言ふに忍びざる者あり、是等誰か思はん、嘗て選擧人の前に叩頭百拜して、誓つて其寄託に背かずと約せしとを。

（十五）　舌を揮はんよりは筆を揮へ

それ議員の鄉村に在るや、概れ其父祖より承繼ぎし家產と、是に伴ふ多少の德望若くは信用を有し、之を其登第の階梯となし、若干の運動費を糜して、以て勝敗を選擧場裡に爭ひしなり、而して一旦其の位地を贏ち得れば、揚々として議政壇上に立つも、其人や何等の抱負たも有せざるもの多し、しかも其名を聞けば、山東耕夫と云ひ、川西漁人と云ふ、儼然たる士人の如く然り、又其姿を見れば、鼻下に美髯を蓄へ、頭より足に至る迄、一に虛飾を以て其身を裹む、居然たる富豪の如く然り、而して滋味に非ざれば嘗めず、佳肴に非ざれば食はず、曩昔の濁醪菜根は、また口に適せずと爲して之を斥く、是時又、かの糟糠の妻にも飽きて、其議政場に出づるの間は、退けば則ち香園粉陣の中に入りて、妖艶なる嬬女と戲れ、この隱情を愛すると同時に、かの虛榮を趁ふ、恁て朴質の風年に亡び、次第に輕薄の俗に泥む、一夢長きと數年、覺め來りて產を破り家を傾くるもの、往々にして之あり、古人云く、詩を作らんよりは田を作れと、われは將に言はんとす、云く、舌を揮はんよりは筆を揮へと

（十六）　必至の勞に陷らる

議員として鄉村より都會の地に出づる者は、たとひ上の如き始末に立至らざる迄も、都人士華奢の風に倣ひて、漸く贅澤三昧を事とするに至れば議員の日當の如きは、能く其出費を支辨するに足らず、それ多費なれば多求、多求なれば多營、多營なれば多事なる可きは、自然の順序なり、

彼等の多數が、或は道路改修の請願を奇貨とし、或は學校補助の問題を利用し、彼に此に、賄賂を貪るとあるも、まことに必至の勢に驅らるゝ者と謂ふ可し。

（十七）相約して盜をなす者

是等の賄賂問題は、必らず其補助金額の幾割を割きて、賄賂となすを例とすと聞く、果して然らば、是れ贈賄者受賄者と、相約して盜をなす者と謂ふ可し、惜む可きかな。

（十八）地方議會の改良と今の議員

地方議會の情況、槪ね上の如くなれば、有德の士は潛んで出でず、況んや今日の選擧は、見識あり德操あるものをして、被選者たるに堪へざらしむる事情あるをや、地方議會の改良、太だ急切なるも、しかも之を行ふと能はずして、依然舊態に安んじ、心ある者をして、今日の議員其人は、人民の如何なる階級を代表せるかを、判知するに苦ましむるの觀あるも、まことに不得已なり、吾等をして有體に言はしむれば、地方議會は、今一層眞面目に縣政を監視し、研究的態度を以てして、之に臨まんとを要す、而して其の之をなすには、篤實と熱心とを欠く可からざるなり、今の議員の多數は豈に能く此に當るに足る者ならんや。

（十九）長大息せざるを得ず

然れども、之をより高き帝國議會に見るも、篤實は欠乏し居れり、熱心も亦欠乏し居れり、吾等は去年の議會に先だつて、「議員は宜しく歲費を獻納すべし」との議を建てたるも、殆んど之に耳を傾くる者なかりき、しかも戰勝の結果として、滿洲及樺太に於て、諸種の事業興らんとするや、當局者に縋りて利を網せんとし、爭うて之に赴く者多かりしを見たり、籍を帝國議會に有する者にして尙且然り、況んや地方議會の議員に於てをや、吾等は思うて此に到る每に、長大息せざるを得ざるなり。

（二十）議員の粗製濫造

市會や、町會や、村會や、また府縣會の有する多くの弊習を有し、議員の粗製濫造にして他愛なきとは、大抵その趣きを一にせり、しかも市長等の市會に對する、町長等村町會に對する、村長等の村會に對するは、知事等の府縣會に對するよりも、一層軟弱なるもの多し、而して徒らに彼の沒分曉漢に阿媚す、市町村政の擧らざる、一に是が爲ならずんばあらず、勿論市長と云ひ、町長と云ひ、村長と云ふが如き者は、皆市會、町會、村會の選擧するものなるが故に、正に市會、町會、村會の反影を映せるものなり。故に議員の粗製濫造にして他愛なき所は、また市長、町長村長等も粗製濫造にして、他愛なきなり。

新刊批評

▲戀の畫葉書　小波著　博文館發行

これは小波子が伯林滯在中に見聞した物語を、其時なりに書い付けたのが積んで此大册となつたものである、いまだ精讀はしないが、此うちの手練手袋といふのは曾て面白く感じて讀んだ事があつた、いづれ讀ん

てから又紹介する事にするが、其内容の極めて目新らしく、そして例の小波子が輕快な筆で頗る面白く書かれてあるとは記者の保證する處である、釘裝は博文館發行に似合はぬ洒落れた美しい者である、表紙の意匠、中の揷畫は和田英作氏、定價一圓にしては少し廉に過ぎる樣に思はれる。

▲續風流線　泉鏡花著　春陽堂發行

枕に近さ夕涯や、海松のみどりの黑髮を、搠銀杏にさらりと結んだくツきりと色の白い、横顏の鼻隆きに過ぎず、屹と唇は結んだが、恍惚と眉を開いて膚に鷗の影さすばかり、(中畧)浴後の手足のび〳〵と、花enza座に褄を曳いて、人目にもすや〳〵と轉寢したる中年増は、巨山が客といつた、狩谷秀岳が丹精のお瀧の給姿を屆けに來て此日まで逗留した、幸之助の姉のお要である。

此お要此篇に於てよく活動す、其行文の美しさは此二三行を讀みても推し得らるべし、吾人は曾て前編に就いて所見を述べたる事あり、今更めて云はず、只近時文壇の珍品也といふをくり返すに過ぎず。風流線は此篇にて完結したれば、諸種の批評も出つべし、吾人は或問題に接したる時再び所見を述ぶる事あらん、定價六十錢(覺生)

▲新曲かぐや姫　坪内逍遙作　早稲田大學出版部發行

曩きに「新曲浦島」を著はして所謂新樂劇の作例を示されたる坪内博士はこたび其第二の作例として此「かぐや姫」を公けにせらる。「彼れにては舞踊を本位と立てたるに、此れにては謡唱大部を占め、彼れは序曲を舞踊となしたるに、此れは寧ろ歌樂を根幹と做せり」とは博士の序文中に見えたる語、以て彼我の異同を見るべし。

材は全く「竹取物語」に據られ、其結構は素より、其言辭、其章句、其歌等に至るまで同物語を其儘に襲用せられたる所極めて多し。されば材料に於ては博士の創意に出でたるもの殆んとなしといふも不可なし。

惟ふに此曲を讀みて或は其哲理を繹ね、或は其倫理を論ずるもの、出でんこと恰かも彼の「浦島」の世に出でたる時の如くなるべし。吾人はかゝる研究を以て所謂學者連に委ぬべし。又此曲を讀みて或は其演奏上の可否を評し、或は其舞臺上の功過を議するもの、出でんことも亦彼の「浦島」の世に出でし時の如くなるべし。吾人はかゝる研究を以て所謂專門家に委ぬべし。たゞ吾人は此曲を以て普通の文學的作物――即ち一種の讀み物として多少の批評を試むるに滿足せんと欲す。

普通の讀み物として見れば吾人は之に向て多大の讃辭を呈する能はざるを悲しむ。第一、事甚膚にして直接に吾人の胸に應ふる節少きこと。第二、文辭稍々もすれば高遠に失して他人の讀むを聞きては素より自身目に見ても多少難解の點あることは吾人の最も慊らずとする所にして、此曲が一種の文壇の珍として尊重せらるゝ外、到底多數の人望（ポピュラリチー）を得る能はざるべきを思ふ。さもあらばあれ此等の缺點を外にしては流石に老大家の筆たるに恥ぢず。全體の布置結構整然として毫も紊るゝことなく、文藻詞華燦然として人の目を眩ひ、殆んど青年文士又は假文士の追從を許さず又覬覦を許さず。此點に於ては博士をして文壇に獨歩せしめて可なり。たゞ吾人は博士が此手腕を以て一層普通にして一層平民的な

る作物に從事せられざるを惜むの情に堪へざるなり。

吾人が此曲に於て最もよしと感ずるは却て此曲の枝葉ともいふべき點に多し。例へば石の上の麿が燕らの巣より落ちし僮の物語る「きつしよきつしよ。」「てんころり」の段。同じ僮の「酒五句、飲んで浮世に怖いもの」の條。及び姫の上天時迫つて月漸々明くなり「やゝ。これは何としたことであらう。四下が凄じう明るうなつた」以下二頁等の如き博士獨得の筆致、又「呵噓して花を促さば、瓶裡の牡丹發くとも、可惜ら傷まむ花の色」「げに珊瑚は碎くべうして、其色奪ふべからず」「愛憎大かたは眼に在り」等の名句所々に散見し殆んど卒讀に忍びざるなり。

以上吾人の記する所甚だ散漫に流れたるが如きを以て之を約して一言すれば吾人は全體に於て二大缺點の存するに嫌らずと雖も、流石に他人の模擬すべからざる長所あり、又一部〳〵の巧妙、所々の名句、確かに文壇の珍什たるを失はずといふにあり。表裝用紙は凝つて且つ品よきこといふばかりなく、見れば到底買はざるを得ぬ本なり。定價八十五錢。

▲冥想詩劇 海堡技師　岩野泡鳴著　金尾文淵堂發行

口語及び口語に近き文語體を以て作られたる詩劇なり。著者が此新方面に向て先鞭を着けんとせられたる大膽男氣は吾人の嘆賞する所なりと雖も、未だ充分の成功を贏ち得られざることを惜む。殊に全體の構想何となく夢幻的（著者自らは在來の夢幻劇にあらずといへど）にして今日の口語と全く調和せざる所あるは失敗といはざるべからず。又お花の毒殺も、お杉の最後もたゞ事件を變化せしむる借物の如くなりて、寫實的活躍なく、深酷的描寫なきは吾人の甚だ取らざる所なり。吾人は氏の如き前途有望の人に於て何故に今少し適當なる取材に苦心せられざるかを怪しむ。若し時代の要求する所を看破し、人心の渇仰する所を洞觀し、一管の詩筆を揮うて之を歌はゞ、一代の嘆賞を博する必ずしも難事にあらざるべしと信ず。著者が専茲に出でずして殊更に珍奇なる材料を選ばれたるは多少の遺憾なきを得ざるなり。

全篇三幕に分れ、一幕各々亦三段に分る。最もつまらなきは序幕の二段にして最もよきは序幕第三段の金むく、銀むく、瑠璃兒の海中に躍る條なり。簡短なれども詩趣あり。かゝる種類のものにて第一の出來榮といふべし。次によきは土方踊の唄、獨立の作物としても充分の價値あり吾人は作者の長所のかゝる所に存するを見、從て此篇全體の失敗を以て作者が取材の選擇を誤りたるに歸せずんばあらず。三枚の挿畫は小林千古氏の筆、なか〳〵に面白き所あり、用紙製本共に頗る良好なり。（哲生定價四十錢。）

海潮音　上田敏譯　本郷書院發行

雜誌「明星」に四號活字を以て掲載せられ、讀詩界の嘆美玩賞を博したる上田敏氏の西詩飜譯は、こたび瀟洒雅麗なる美本となつて本郷書院より發行せられたり。「收むる所の詩五十七章、詩家二十九人」「彼の高踏派と今の象徴派とに屬するもの其大部を占」め、且つ添ふるに譯詩に對する著者の態度を明かにせる長き序文を以てせり。書中「小曲」「戀の玉

座」の如く多少俗耳に入り易からざる難解のものあるを除きては各篇皆清新幽邃の趣あり、確かに詩壇の珍たるを疑はず。殊に吾人の愛するは、ルコント、ドウ、リイルの數篇にして其雄渾莊嚴到底邦人の作に見るべからざるものあるなり。又「春の朝」「燕の歌」等は幾度讀むも新たなる詩興の涌き出づるを覺ゆ。定價一圓

▲西詩新譯　小原無絃譯　本郷書院發行

收むる所二十五篇、内十數篇はウオルヅヲスの作にかゝり、其他へりツク、ヒューマンス夫人、バーンス等の作を譯す。此書の長所は强て奇を求めず、巧を弄せず、すらくと平易に書き流せるにあり。されど其れ丈け又深き旨味なきは遺憾なり。定價三拾錢

▲評釋日本絶句選　久保天隨著　本郷書院發行

上は菅原道眞より下は成島柳北、竹添井々に至るまで日本の漢詩人二十八家の作九十餘首を收め、天隨一流の面白き評釋を附せり。天隨は餘りに多作するの故を以て多少輕蔑の眼を以て其詩文を眺むるものありと雖もかゝる類のものを作りては殆んど他に比肩する人なきを見る。青年の志氣次第に銷沈せんとする折柄、かゝるものを一讀せば大に益する所あるべし。定價三拾錢

▲白馬會紀念畫集　白馬會編輯　金尾文淵堂發行

創立以來十週年の紀念として開かれたる今年の白馬會の重もなる作品百種の寫眞を收めたり、印刷鮮明にして、用紙佳良、白馬會を見たる人は之によつて記憶を新たにすることを得、見ざる人も亦之によつて其觀賞的を想像することを得べし、多少の美術的趣味ある人及び客間の裝飾に心を用ふる人には缺くべからざるものなり。(背文、定價九十錢)

▲吉備姿　凉月、江村合著　岡山血汐會發行

入澤凉月氏の短歌及び長詩と神尾江村氏の長詩とを收む。青年詩人の作流石に捨てがたきものなきにあらず、添ふるに泣菫、泡鳴、蘆風、御風諸氏の序を以てす。(定價二拾錢)

▲邦文日本少女の米國日記　野口米次郎著　東亞堂發行

曩きに同氏が非常の好評を博したる英文「日本少女の米國日記」を邦文に譯したるものなり、吾人は氏が邦文よりも却て英文に達者なるを見、從て此編よりも英文の方を愛讀するものなりと雖も英文の智識なき人にとつては此書が大に便利なるべく、且つ同じく人の手に成りたれば決して誤譯などのあるべき筈なく、英和對照して學ばんとする人にとつては甚だ都合よかるべきを信ず。(定價七拾五錢)

▲海賊の子　江見水蔭著　隆文館發行

『余は海洋の研究家にあらず、好愛家にもあらず、著作の水に縁多きは偶然のみ、唯、何故かは知らず余の運命は怪しきまでに海と伴ふにこそ戯れに西洋骨牌占ひを取りて余の死所を探し求めたるに「暴風雨の夜、海の上にて」との神の默示を得たりけり』

とは其序の中に云ふ所なり、水蔭子が得意の作なるは云ふまでもなし、曾て二六新聞に連載されて、好評嘖々たりしもの、材を北海道に取り、傑人[illegible]の遺子を主人公とす、アイヌの美人あり、内地の美人あり、露[illegible]

亞人あり、人物頗る多きに拘らず、其性格の如き最もよく描かれたり、其構想の面白きと、アイヌ研究、北海道研究、特に海洋の研究の行き屆きたるは吾人の最も喜ぶ處なり、こは前編にて後編は尙一層面白からんと信ず、吾人はその後篇一日も早く出版せられんことを希望す、三・數十頁にて釘裝極めて美麗、定價七十五錢(覺生)

・

▲プリウターク英雄傳卷五　森晋太郎譯　尙文館發行

此卷にはペリクリーズとフエービアスとを收む、譯文卷を逐ふて圓熟し來るは喜ぶべし、世界の大著プリーターク英雄傳を我國に紹介するは此度を以つて嚆矢とす、予は閑を得て重ねて此有益なる出版に對して具に妄評を加ふる處あらん。(定價三十五錢)

・

二百號に對する新聞雜誌の評

▲二六新聞▼我中央公論は早くも茲に第二百の紀念號を發行するに至りし乎、論壇に介立して常に靜平の見地に立ち、敢へて衒奇の態なく敢へて俗流を逐ふ態なく、超然として以て其穩健の思想を表白するに從まず、幾十雜誌の起伏を冷眼に見て、穩健舊に渝はらざる今日の中央公論子は、また是れ尋常碌々の雜誌に非ざるを覺らずんばあらず、本號には特に紙數を增して名家の論議を掲載すること平素に倍し附錄として露伴、鏡花、春雨、漱石の小說、晚翠、泣菫、花外の詩を載せたり

▲電報新聞▼月刊雜誌にして二百號に達せしものは現今の雜誌界にても稀なる方なるべし中央公論の二百號が殊に盛粧して出でたるも所以なきにあらず而かも外形や體裁の粧にあらずして內容の充實に努めたるは最も欣ぶべし、▲紙數は殆んど平素の倍以上ありて大部分は小說にて占めたり露伴の「付燒刄」諷刺小說として上乘なるもの輕妙の筆致味ふべし鏡花の「女客」は强ひて凄からしめんとせし跡少く且艷つぽき處に鏡花の特色見えたり春雨の「岸の灯」は最も詩趣に富めり「薤露行」は漱石の溫蓄を傾けて成せるもの、自ら描寫の深きものあり新體詩にては泣菫の「磯邊の黑百合」「夕ごゝろ」花外の「ある夜」晚翠の「バイロン」等誦すべし▲「男女學生交際論」は每號諸家の說ありて本號には安部磯雄の談を載せたり上田、高田兩博士の戰後教育論、中村進午の「恒產と恒心」皆時事に適切の文字▲雜錄、海外、海內思潮、評論、文藝、漫評、社會等皆材料を精選せり兎に角本月の雜誌界にて最も光彩を放てるは本誌なること疑ふべからず。

▲精神界▼先づ、公論には、上田、中村、高田の三博士を初めとし雜錄には、野口、坪井、有磯それ〴〵の名家を集め、時潮の登張氏、餘材の浩々歌客、各欄讀むべきの文少なからず。殊に、文藝の一欄に至つては、露伴の「付燒刄」あり、鏡花の「女客」あり、春雨の「岸の灯」晚翠、泣菫の新體詩、その他、和歌、俳句をおさめて、彪然たる大册子。我友の一夜、深更まで眠らず、時々隣室より獨笑を漏らしければ、翌朝起きて昨夜は何事であつたかといへば、「付燒刄」がおもしろくてと答へたり。

▲大阪每日新聞▼近來著しく內容の新鮮に努むるは中央公論なるべし近刊二百號紀念のものは紙數平生に倍し內容は安倍、上田(萬年)福來、中村、山路、高田、山根、福本諸家の社會政治倫理の諸問題說論を收ら

雜纂に明治闇黒史と片山、野口、坪井諸家の隨筆あり文藝には特に付燒刄(露伴)女客(鏡花)岸の汀(春雨)薤露行(漱石)の四小說晚翠泣菫の新體詩を收めたるは近來の異彩なり其他竹風の東西同調、浩々歌客の汽車百景論見るべく笑中天其外匿名家の隨筆は例の如く興あり

▲萬朝報▼「中央公論」は其の二百號の紙數を倍加し、特に其文藝欄を賑はせり、小說四、詩二章其の重もなるものにして、小說『付燒刄』は作者露伴氏が到底滑稽に適せざるを思はしむ、其の作『七碗歌』と同じく氏の滑稽は乾枯びたる滑稽にして『付燒刄』の如き、滑稽としては勿論小說としても價値なきものなり、一口落語に類して而も落語の如く放笑せしむる能はず、失敗の作と斷ずるの外なし、鏡花の『女客』は春雨の『岸の灯』と共に一讀せしを悔ゆ前者は書き流しにて、後者は不出來の作、馬鹿を見しは獨り讀者のみにあらざるべきか、晚翠の『バイロン』泣菫の詩二章は例に依つて例の如し、彼等は先づ其の眠りより醒ざるべからず(記者曰く此評の當れるや否やは讀者の最も知らんと欲する處なるべし、乞ふ本號無名氏の四小說評を見よ)此の衆凡の間に於いて漱石の『薤露行』のみ獨り異彩を放つ、然り、異彩と形容することの最も適當なるを覺ゆ、『薤露行』は詩の如き小說にして、マロリーの『アーサー物語』より材を採り來る、讀者其の文のゝと其の筋を知らんと欲せば宜しく一讀すべし、會話を文にし地の文を言にしたる一種の言文一致、云はゞ雅俗折衷の言文一致を以てして極めて自由極めて典雅に、警句金言を纏む原作の妙與つて力あるべしと雖も、文壇斯の如き文章を草する人あるは心强しとせざるべからず

漱石の名今や大に喧傳せらる、『薤露行』中の左の一節の如きにも、其の決して空名にあらざるを知るなり

　本に倚るは寡、まつはりて幾世を離れず。背に逢ひて朝に分るゝ君と我のわれにはまつはるべき月日もあらず。繊き身の寄り添はゞ、幹吹く嵐に、根なしかづらと倒れもやせん。探り添はずは、人知らずひそかに括る戀の糸、振り切つて君は去るべし。愛溶けて瞼に餘る、露の底なる光りを見ずや。「わが住める館こそ古るけれ、春を知る事は生れて十八度に過ぎず。物の憐れの胸に漲るは、鎖せる雲の自ら晴れて麗かなる日影の大地を渡るに異ならず。野をうづめ谷を埋めて千里の外に暖かき光りをひく明かなる君が眉目にはたと行き逢へる今の思は坑を出てゝ天下の春風に吹かれたるが如きを——言葉さへ交はさず、あすの別れとはつれなし

外に『公論』欄に於ける安部磯雄氏の『男女學生交際論』は男女の交際を自由にすべしと主張し、一二の交際法を述ぶ、男女交際自由說は次第に勢力を得來れるが如し、ヨネ野口氏對末松氏の爭論は最早無用ならずや兩氏共重ねて面目を失ふなかれ

▲報知新聞▼紀念雜誌として常にも優りて堂々たる論陣を布きたるは眼覺まし而して小說には露伴の付燒刄鏡花の女客春雨の岸の灯漱石の薤露行あり、「付燒刄」は老煉なる露伴の筆になりたるもの人情の精微に觸れ楚々人を動かすものあり「女客」は例の如く怪氣に滿ちたるものにして暗示を主題としたれ共氏の惡癖たる筋の紛亂は無し「岸の灯」は心理小說とても名づく可きか全體の構造餘り論理的にして自然ならず會話に於ても亦此癖の著るしく顯はれたるを見る假令其構造論理的なりとするもエリオットの如く深刻ならす讀んで玩味すべきの味はあるも此點に於ては然らす露薤行は中世のアーサー物語を主題としたるものにして描寫精密を極はめ人物の性格紙上に活躍す此點殆んど凡て歷史的現在を用ゐたれば文章の力餘りに充實して硬きを覺ゆ然れど氏の特色たる觀察の精緻と警句に富める點とは毫も氏の他の諸篇に讓らず

▲鷲城新聞▼本號は二百號紀念として平常の倍册となせり折からの菊紅葉眼も綾なる心地す男女學生交際論（安部磯雄）戰後の教育（上田万年、高田早苗）暗示の社會に及す影響（福來友吉）拜び末松博士に質す（野口米次郎）アイヌノ家（坪井正五郎）其他文藝欄には露伴、鏡花、春雨、漱石、晩翠、泣菫、花外の作物を聚め別に竹風浩々の評論、其他綺羅星の如し

▲北國新聞▼第廿年第十一號で其二百號に達した今月の中央公論はズラリと諸大家の顏を並べて、紙數も殆んど何時もの倍以上である△平和克復を祝す、新なる日英同盟、之が社説で次には安部磯雄の男女學生交際論、山路愛山の和戰利害など讀者の眼をひく題目がある、上田博士の戰後の教育、高田博士の戰後經營としての教育など何れも一家の説として見るべきもので福來文學士の暗示の社界に及ぼす影響、中村博士の恒産と恒心など亦必讀の文字であらう△雜錄の明治閨黑史は其十一を重れて愈佳境に入つたが之は僅かに本誌の呼物の一つであらう、片山文學士の思考の惰性、坪井博士のアイヌの家は却々面白い、野口米次郎の詩に就て「重て末松博士に質す所あり」互に理窟をこね返して居る△文藝欄は却々に賑かた先づ露伴の付燒刃を始めとして鏡花の女客、春雨の岸の灯、漱石の薤露行の四小説、取り〳〵に讀むべき佳作たるを失はない△次いては晩翠のバイロン、泣菫の詩歌二章、花外のある夜の新體詩、何れも各自得意の調を謡ふたもの、和歌は柴舟選で俳句は繞石選である△評論には平民社の解散を評し公會に於ける藝妓を論じた外、樗陰生の千山萬水樓主人に與ふの文がある、這は「讀賣」に社會主義を論じて居る同主人へ一矢を酬いたもので△竹風の東西同調は氣焔萬丈である△夫から浩々の滊車百景論も見落されぬもので、庄野生の挿畫秋十題は趣味が深い△兎に角政治教育社會文藝各方面に亘る記事材料が豐富だから却々に賑つて居る

▲德島日々新聞▼本號は特に紙數を倍加しその文藝欄を增したり、小説には露伴の「付燒刃」、鏡花の「女客」、春雨の「岸の灯」、夏目漱石の「薤露行」あり、「付燒刃」は意志弱きこと病鼠のごとき良人に對して悍馬の如き式部上りの細君を配したる滑稽もの、宛として落語家の口吻、彼の「珍饒舍」のそれに類して更に非なるもの歟、鏡花の「女客」例によつて例のごとき筆致、筋は云ふまでもあらずこれ又アマリ得意の作にはあらざるべく春雨の「岸の灯」に至つては更にツマラヌこと一層、陳にして腐一言以つて　れを悉すべし、獨り漱石の「薤露行」は情景文致大に見るべきものあり實にこれ壓卷の文字たるをおぼゆ、原著はマロリーのアーサー物語、原文の妙なるにもよるべけれど其叙景その抒情實に一篇無韻の詩なり而かも文體は一種獨創の古文一致體（寧ろ雅俗折衷體といふべき）を用ひ讀者をして毫も翻譯臭を覺えざらしめ神韻縹渺たるものあるは實に譯者の妙腕によるか、左はその起首「夢」の一節なり

百、二百、簇がる騎士は數をつくして北の方なる試合へと急げば、石に古りたるカメロットの館には只王妃ギニヰアの長く曳く衣の裾の響のみ殘る。

薄紅の一枚をむざと許りに肩より投げ懸けて、白き二の腕さへ明らさまなるに、裳のみは輕く捌く珠の履をつゝみて、猶餘りあるを後ろざまに石階の二級に垂れて登る、登り詰めたる階の正面には大いなる花を鈍色の奥に織り込める戸帳が、人なきをかこち顏なる樣にてそよとも動かぬ。ギニヰアは幕の前に耳押しつけて一重向ふに何事をか聽く。――濃やかに斑を流したる大理石の上は、こゝかしこに白き薔薇が暗きを洩れて和かき香りを放つ。君見よと宵に贈れる花輪のいつ摧けたる名殘か。しばらくは吾が足に纏はる絹の音にさへ心置ける人の、何

の思案か、屹と立直りて、繰き手の動くと見れば、深き幕の波を描いて、眩ゆき光り矢の如く向ひ側なる室の中よりヤニキアの頭に戴ける冠を照らす、輝けるは眉間に中る金剛石ぞ。

以てその一斑を窺ふべし。長詩には晩翠の「バイロン」泣菫の「磯辺の黒百合」「夕ごゑ」、花外の「ある夜」等いづれも取り立てゝいふべきほどにあらず、晩翠のは比較的長篇なれどしかも依々然たる漢詩直譯調、人をして殆ど倦厭せしむ、公論側には安部磯雄氏の「男女學生交際論」上田万年博士の「戰後の敎育」、中村進午博士の「恒産と恒心」山路愛山氏の「和戰利害」、高田早苗氏の「戰後經營としての敎育」、福本日南氏の「露獨兩帝會合の眞相」など、海外新潮、海内思潮、雜錄、評論等、文藝時觀には登張竹風の「東西同調」讀むべし

▲土陽新聞▼當今の雜誌界に於て長き壽命を有せる中央公論は本月を以て二百號の紀念號外を發するに至れり堂々二百三十頁の大册にして收むる處、安部磯雄氏の男女學生交際論、上田万年氏の戰後の敎育、福來友吉氏の暗示の社會に及ぼす影響、中村進午氏の恒産と恒心、山路愛山氏の和戰利害、高田早苗氏の戰後經營としての敎育、山根正次氏の軍隊歡迎に關する注意、福本日南氏の露獨兩帝會合の眞相、有礎逸郎氏の明治闇黑史、片山孤村氏の個性、野口米次郎氏の重れて末松博士に質す處あり、坪井正五郎氏のアイヌの家、幸田露伴氏の付燒刄小說、泉鏡花氏の女客、中村春雨氏の岸の灯、夏目漱石氏の薤露行、土井晩翠氏のバイロン、薄田泣菫氏の詩歌二章、登張竹風氏の東西同調、角田浩々氏の海軍百景論ありて大に賑へり

▲藝備日々新聞▼中央公論は近刊第廿年第十一號に於て其二百號(累號二百に及ぶ)を紀念し倍號の同誌を發行せしが上田萬年、中村進午、高田早苗、坪井正五郎の四博士の外夏目、福來、登張の三學士其他安部、山路、山根、福本、幸田、泉、中村、土井、薄田、角田、野口の諸名家の寄稿ありて論文に小說に全誌を飾れると紅黄緑の諸葉の秋山を彩り秋水を染むるに似たり趣味津々として盡きず平生本誌を讀まざるの人も必らず一部を購ひて文學界に於ける此晩秋の一景勝を觀賞するの風流に負くを勿れ

▲小樽新聞▼本號は同誌第二百の紀念號として公論には上田、中村、高田の三博士安部磯雄氏山路愛山氏等の時局に對する意見を揭げ、文藝には露伴の付燒刄、鏡花の女客、春雨の岸の灯、漱石の薤露行等の小說の外に晩翠泣菫等の新體詩あり若な近時稀に見る傑作にして特に夏目漱石の薤露行は英文學の神韻を傳へて妙味掬す可きものあり其他海外新潮、雜錄、評論以下の各欄趣味橫溢文藝に志ある者必讀の値あり

▲秋田魁新報▼社說平和克復は條件は不完全とせるも媾和の時期を得たりとし安部磯雄の男女學生交際を可とし隔離するを却て弊多しとし有礎逸郎の明治闇黑史は福島事件の前提に入り本號の附錄たる文藝は百花爛熳にて露伴の付燒刄は友人の借智惡にて妻を離緣せんとし却つて落城せし滑稽鏡花の女客は主人と女客との戀を巧に描きて例の死神及醜も邪魔にならず春雨の岸の灯は元傳道師たりし會社員が妻の死と兒の母に逢はれ狂女の亡人に逢はるゝといふ信念の强きに懺悔に質きし動機を寫し一種の光明を認む漱石の薤露行アーサー王の妃ギニヴイアが勇士ランスロットに於ける罪ある戀とエレンがランスロットに對する聖なる戀を寫し文體古意を帶びしも結語に失敗せる如し

▲西肥日報▼社論として「平和克復を祝す」「新たなる日英同盟論」二篇あり其他安部磯雄氏の「男女交際論」は男女學生の交際を出來得る丈け自由ならしむ可しと說き其方法として男女混合敎育を主張したるは自ら研究の價値ある可く又上田文學博士の「戰後の敎育」及高田法學

博士の「戰後經營としての教育」は共に實業教育に重を置けるは大に注目すべき議論なり而して「評論」及「社會研觀」の奇抜なる其他「海外新潮」「文藝時觀」の如き大に見る可きものあり尚ほ附錄には露伴外數氏の清新なる小說及新體詩を添ふ

▲信濃日報▼常に雜誌の雜誌を以て任する本誌は今二百號を發行せり戰爭繼續を非なりとして平和克復を祝する一篇は吾人の主張と相容れずと雖も立論井然讀者の心を動かすの力あり尙男女學生交際論安部磯雄、戰後の教育上田萬年、恒產と恒心中村進午、和戰利害山路彌吉、戰後經營としての教育高田早苗、露獨兩帝會合の眞相福本誠諸氏の議論は經世者の一讀すべき文字也、文藝に於ては幸田露伴、泉鏡花、中村春雨、夏目漱石の諸氏各名作を出し其他、雜錄、評論漫評、文藝時觀、餘材の諸欄皆として良材の長茂せるあり本誌當號の如き實に得易からさるの新籍といふべし

▲富山日報▼十一月一日を以て發行したる本誌第廿年第十一號は創刊以來二百號に相當するとて其紀念の爲め紙數を倍加し内容體裁共に意を凝して發行せり、即ち社論には『平和克復を祝す』『新なる日英同盟』あり、安部磯雄の『男女學生交際論』、上田文學博士の『戰後の教育』、中村法學博士の『恒產と恒心』高田法學博士の『戰後經營としての教育』等時世に適切なる論說數編あり、雜錄欄には例の有磯逸郎の『明治閨閥史』の續編を始め面白きもの數編あり、文藝欄には殊に本號の意を用ゐたる裝飾場にて露伴の『付燒刄』鏡花の『女客』春雨の『岸の灯』漱石の『薤露行』以上四編の小說と晚翠の『バイロン』、泣菫の『詩歌章』等の新韻詩あり其他各欄共に異彩を放てり

▲朝鮮時報▼ 本誌は中央公論臨時增刊として發行せられたるなるが二百數十頁の冊子にして社說には「平和克復を祝す」と題し講和の是非を決せんとせば先づ我が戰爭を繼續するの利害を明白ならしめざる可らずと獨佛戰爭其他の戰爭を引證して繼戰の不可を論じ結果には講和條約に由て東洋の平和を確保するは素より輕卒也既に露國の東洋に於ける大野心大經營の一半を粉碎したる以上我れは佛國に對する獨逸の地步に立ざる可らずと爲し更に日英同盟の善果を收受するの外無と說き其他安部磯雄氏の「男女學生交際論」上田萬年氏の「戰後の教育」中村進午氏の「恒產と恒心」をはじめ山路愛山、山根正次、福本日南諸氏の時局に對する所論を掲げ文藝欄には幸田露伴氏の小說付燒刄泉鏡花氏の女客等何れも面白く記事頗る豐富にして再讀すべき好冊子たるを疑はず

▲九州日日新聞▼號數二百に達したるを以て特に「二百號」と稱す、紙數を例號の倍以上に增加し、其の過半は文藝を以て塡めらる、公論、雜錄等の例號に比して賑々しきは言ふまでもなけれど、編輯者が此の號の價値を世に問はむとするは即ち文藝欄に在ることを知るべし、小說に幸田露伴の「付燒刄」、泉鏡花の「女客」、中村春雨の「岸の灯」、夏目漱石の「薤露行」詩に土井晚翠の「バイロン」、薄田泣菫の「磯邊の黑百合」外數篇あり、文藝を專門とせざる本誌にして、これだけの新作物を輯めむは、恐らく非常の難事たりしならん、露伴ほか三氏の小說中にて最も吾人の感興を深うしたるは、夏目漱石の「薤露行」也、過日東都の批評家が某誌上に於て、「薤露行」中の好文章として抄出したる章句のみを見て、其の典雅にして神韻に富める「薤露行」の全豹を想像し居たるが故に、今日「二百號」を手にし得るや、吾人の眼は先づ此の薤露行に向つて最も鋭敏に注がれたり、而して首尾讀了するに及びて其の結構の多趣にして幽遠、文章の典雅にして而かも警句に富めること遙かに豫想の上に出づるを見て、彼の「吾輩は猫である」の出版以來、作者が頓みに文壇の寵兒となれるとの宜なるを覺りぬ、「薤露行」は材をマロリーのアー

サア物語に取れり、「戀に敵なければ吾が戴ける冠を長れず」「疚しき中に蜜あるは嬉し、疚しければこそ蜜をも釀せ」と思ふ騎士ランスロット。アーサアを嫌ふに非ずランスロットを愛する也」と自らの胸に語る王妃ギニヰア。「天が下に慕へる人は君ひとり也、君一人の爲に死ぬるわれを憐れと思へ、陽炎燃ゆる黑髮の、長き亂れの土となるとも、胸に彫めるランスロットの名は、星變る後の世までも消えじ、愛の炎に染めたる文字の、土水の因果を受くる理なしと思へば。睫に宿る露の珠に、寫ると見れば碎けたる、君の面影のもろくもあるかな――息絶えて身の暖かなるうち右の手に此文を握らせ給へ。手も足も冷え盡したる後、ありとある美しき衣にわれを着飾り給へ、隙間なく黑き布しき詰めたる小船の中にわれを載せ給へ、山に野に白き薔薇、白き百合を採り盡して舟に投入れ給へ、舟は流し給へ」その舟の流れ〱てカメロットの水門に漂ひ着き、美はしき亡骸を騎士等の前に曝らされたる少女エレーン、皆な離れ美しき詩中の人也、吾人は此編を再讀して尙ほ詩興の津々たるを禁ずる能はざりき

▲此他同樣の評を掲載されし新聞雜誌數十種あるも煩はしければ掲げず。

▲新年號豫告

二百號を以つて世間を驚かしたる本誌は新年號に於ても亦花々しき粧を凝らして諸君に見えんとす、附記す、本誌は每號趣味の充實に全力を注ぐもの也、本誌締切迄に寄稿の快諾を與へられしは

坪内　逍遙氏　　綱島　梁川氏
三上　參次氏　　福本　日南氏
河　津　暹氏　　下田歌子女史
坪井正五郎氏　　江見　水蔭氏
内田　魯庵氏　　柳川　春葉氏
野口米次郎氏

等なり、尙依囑中の大家數名あり、乞ふ目覺ましき我新年號の出づるを俟て

The letter reached Kimura just before the battle. After reading this inspiring missive the warrior's heart was more than ever strengthened in its resolve to fight to the death rather than to survive defeat. As has been told, he fell with six hundred of his men at Yao, where he attempted to check the advance of the enemies' troops on the castle.

He was found as he lay dead on the field, and his head, as the chief trophy of the day, was cut off and carried in triumph to the Shogun.

Ieyasu and his generals all noticed the aroma proceeding from under the incensed helmet. They understood from this and from the knotted chin-strap the resolution of this brave warrior to sacrifice his life for loyalty even in a cause he knew to be hopeless, and tears rose to their eyes as they gazed upon his face.

Ieyasn the Shogun confronted the head and addressed Kimura as if he were alive.

'Who taught you this refined taste, for you are a young man to know such things? A veteran warrior, it is true, contrives to distinguish his head from those of common soldiers. But this contrivance of yours surpasses that of any old Samurai I have yet seen. Oh the pity of it that you should have died! Had you lived you would have made a great general!'

The odour of the incensed helmet has passed away, but the fragrance of the happy memory of the Knight Kimura and of his brave wife Aoyagi will be stirred and wafted forever along the everlengthening vistas of time, and their story will be told and venerated as long as the empire of Japan lasts.

Tokio. Yei Theodora Ozaki.

In the *Nineteenth Century and After.*

prove a little of my faithfulness will therefore take my life while you are still living, and I shall respectfully await you along the Way of Death. Without fail, oh! without fail do not forget the many years of favour you have received from our Lord Hideyóri.

I petition for this with all respect and joyfully congratulate you.

From your wife.

To Shigenari,

The Lord of the Province of Nagato.

V.

Having despatched this letter in a lacquer box tied about with a silken cord and tassels, by a trusty messenger, Aoyagi went to her room. From the shrine-shelf tenderly she took the small incense-burner which had been used in the impromptu ceremony of perfuming her husband's head and helmet, and, putting it on her table, set alight a tiny rod of incense.

Beneath her she spread a large white mat which she fetched from the corner of her room, and seating herself on this she tied her *obi* in front as for the dead. With great deliberation she took her short dirk from her girdle, and unsheathing it held it in her right hand while in her left she grasped a rosary. For a few minutes she stayed thus, repeating a holy invocation to Buddha—'Namu Amida Butsu, Namu Amida Butsu,' and sending her soul and thought out to the husband she loved so well that rather than be a source of weakness to him in doing his duty, she chose to die. Suddenly her right hand went upwards, and the knife was plunged up to the hilt in her slender white throat, severing the great artery. All Samurai women were trained to know the vital spot, and Aoyagi's hand, wondrous small and slender though it was, erred not, and it was strong, for she was a trained fencer with the *naginata* (halberd) like the women of her time. She fell forward with a moan on the white mat while the life-blood ebbed away in a crimson, gurgling stream. So the household found her.

Before the letter reached her husband, Aoyagi had crossed the river of Death (Sanzu no kawa), and was waiting on the 'further shore' (Higan), as it had been her daily wont to wait to give him glad and humble greeting on the threshold of their home.

too resolved to die. Sinking down in front of her writing-table, Aoyagi prepared some ink, and taking up a roll of soft, creamy paper, composed the following letter to her husband, which has been the admiration of every Japanese man and woman ever since.

IV.

Ichijiu no kage, ikka no nagare, koretasho no yen to uketamawari soro ni koso. Somo ototose no koro yori shite kairo no makura wo nashite, tada kage no katachi ni soga gotoku omoimairase soro. Konogoro uketamawari soraeba kono yo kagiri no yoshi, kage nagara ureshiu zonji mairase soro.

Morokoshi no Kowo to yaran wa yoni takeki mononofu naredo, Gushi no tame nagori wo oshimi, Kiso Yoshinaka wa Matsudono no tsubone ni wakare wo oshimishi to yara, sareba yoni nozomi kiwamaritaru warawa ga mi nite wa, semete wa onmi gozonjo no uchi ni saigo wo itashi, shide no michi to yaran nite machiage tatematsuri soro.

Kanarazu, kanarazu Hideyori ko tanen umiyama no ko-on on wasure naki yo, tanomi agemairase soro.

Ara ara medetaku kashiku.

Tsuma yori.

Shigenari Sama Nagato no kami.

Even to rest together in the shadow of one tree, or to drink together from the current of one stream, I hear that this is the result of an affinity in a previous life. So for the same reason since the year before last our pillows growing old together, as the shadow is always with the substance, so has my heart been always with you

In these times I hear that you are preparing for a last battle in the world, and though I am only in the shadow, I am pleased to hear it.

Ko of China was very sorrowful at parting with Gushi, fierce soldier though he was, and Yoshinaka of Kiso also grieved at leaving his wife the Lady Matsu—at least I am told so. I must not allow you to hesitate on the field because of the remembrance of me. I—your humble servant, who has no more hope in life—to

vanquished foe's head, and to carry it to the general in command as evidence of his exploits; the nobler the victim the greater the merit did the slayer obtain. Kimura, feeling himself doomed, with that wonderful premonition that so often comes to those about to die, had anointed himself in this way to preserve his knightly honour and his pride of birth unstained among the promiscuous dead before the enemy even in death.

Aoyagi, as we see her in the picture, helped him anoint and perfume his head. Kimura then took the helmet from the attendant's hands, and, placing it on his head, he tied the cords in a tight knot instead of the usual bow, and cut off the ends to show that it was the last one he would ever strap, and that he never intended to undo it.

Great must have been the young knight's anxiety at leaving Aoyagi at this time, and his heart must have been torn with sorrow as he turned away from the porch and left her bowing to him in farewell, for the hopes of motherhood had overshadowed her, and the young lives thrilled to the pulsing of a child-heart to be born to them. But no tears no weakening expressions of regret or pain, no clinging hand-clasps or embraces marred the marmoreal calmness of that parting. They passed away from each other's sight with only the usual greeting, though their souls must have been strung with the tension of a drawn bow by the knowledge that no more in life would they behold each other.

With her servants kneeling on the mats around her, Aoyagi knelt on reverentially in the porch till the sound of the horse's hoofs died away in the distance. Dismissing all her attendants, she then retired to her room. She needed time to think, for as her husband had proceeded with pathetic sacrificial rite of incensing his helmet, Aoyagi had divined his resolution—she knew full well that he had made up his mind to die. In the stillness of her room, as the shock of realisation shook her and then passed away leaving her pale as the petals of the white lotus, while her eyes darkened with pain and unshed tears, a great fear seized her. In the hour of battle, in the stress of the fight, the memory of their great mutual love might weaken his courage—his determination to fight to the death. She must not allow the remotest possibility of such a chance, and so she

Kimura's mother had been nurse to Hideyori, and he and his wife Aoyagi were devoted to the house of Toyotomi.

Aoyagi, our heroine, whose name means 'Green Willow,' was a daughter of Susukida, one of the commanders of Hideyori's forces. She was renowned for her beauty, which surpassed that of all the other ladies in the castle. One had loved her before her marriage with Shigenari, but she had repulsed his suit, for she was clever enough to discern the weakness of his man's character. Her marriage with his rival, Kimura, proved to be a very happy one.

When Kimura Shigenari saw that all hope was lost for Hideyori's cause, he decided to strike one more desperate blow for his lord, and to die on the field if the battle want against him. There was perhaps in his heart a forlorn hope that he might for a time drive back the attacking enemy as he had done six months before in January, when with 8,000 men he had completely routed them from before the castle. At any rate, with the courage that comes of desperation he determined not to survive defeat. On the 1st of June 1615, while Sanada the Ronin was fighting a stubborn battle at Domyoji, twelve miles from the castle, Kimura at the head of 10,000 troops threw himself in the way of Yao six miles from the castle to check the Tokugawa advance on that side. The brave young knight with six hundred of his men went down in this engagement, and in the flight which ensued several hundred more were lost. It was the beginning of the end. Everyone knows the fate of the great castle, how the last disastrous battle was fought two days later, and how, traitors having set fire to the fortress from within, Hideyori committed suicide and Yodogimi was killed by a retainer in the midst of the flames.

And now, having devoted so much time to the historical setting, we turn back to the hero and heroine, Kimura and his beautiful young wife, Aoyagi.

Before setting out for the fatal fight, Kimura took a small incense burner in which he had set alight some of the rarest incense he could obtain—made probably, as they are still, in miniature tablets or flower-shaped tabloids, flecked with gold and over the rising spirals of fragrant smoke he placed his helmet.

It was the cnstom in those times for the conqueror to cut off the

against him, became so exorbitant in his demands that Hideyori was driven to throw down the gage for battle. The crisis came in 1615. Even Hideyori's partisans knew that the fall of the castle was only a question of time, for the General Ono in command was an inefficient soldier, who owed his position to the favour of Yodogimi, who had long taken the young and handsome soldier as a lover; indeed, though Hideyoshi had evinced the greatest rejoicing over Hideyori's birth, there were few Japanese who believed that he was in reality the Taiko's son.

Owing to the General Ono's paramount influence with Yodogimi, there was much discord and discontent among the other captains in the Osaka camp. All the powerful Daimios had deserted Hideyori's cause and gone over to the enemy, actuated by Ieyasu's bribes and selfish motives, or by the grudge they owed the General Ono.

III.

Kimura Shigenari, a young warrior of only twenty-one years of age, of great valour and determination, and as handsome as he was brave, was the only lord who remained with the unfortunate house to the last, and owing to this, though so young, he took a prominent position in Hideyori's affairs. In the many negotiations carried on between the court of Osaka and Ieyasu he took part, and displayed great shrewdness in the way he concluded his missions.

In the last momentous embassy, when two of Yodogimi's ladies were sent down to Ieyasu at Shidzuoka to apologise for the inscription on the great bell cast for the new Daibutsu Temple, at which Ieyasu had taken umbrage on the ground that the hieroglyphics forming his name had been used in a derogative sense to himself, Kimura had accompanied them, disguised as a woman. It was considered necessary that the ladies should have the support of a trusty Samurai who understood the conditions of the Shogun's court, and Kimura was chosen for this delicate task. It was prohibited by the court regulations that a man should form part of a lady's suite, so Kimura was disguised as a young woman. This proves, says the Japanese chronicler, how handsome the young knight was, for effeminate beauty was the style in vogue in court circles.

House of Toyotomi—a story of the fall of the castle of Osaka in the beginning of the seventeenth century.

II.

The Great Taiko Hideyoshi's plans and arrangements to secure the inheritance to Hideyori, the son of his old age, his favourite Yodogimi's child, had all been frustrated by the ambition of Ieyasu Tokugawa. Aiming at absolute dominion, Ieyasu, on the death of Hideyoshi, entirely disregarded his obligations and oath of fealty to the Taiko's heir. By the decisive battle of Sekigahara in 1600, Iyeyasu asserted his authority over the House of Toyotomi, but the long struggle then begun only culminated with the fall of the castle of Osaka in 1615.

For years Ieyasu planned and waited, and waited and planned, and his relentless web of machinations was woven closer and closer round the fated House of Toyotomi. With wily diplomacy the astute statesman affected a policy of clemency towards the defeated, and as time stepped slowly by he drew to his side through bribery, first distracting them by making them quarrel amongst themselves, all those powerful Daimios who would have risen in arms to punish him for his disloyalty to his late master's son had he hastened, after Sekigahara, then and there to sweep Hideyori from his path.

Meanwhile, Yodogimi and Hideyori, both bent on restoring their house to its former power, were safely ensconced in the castle of Osaka, the strongest fortress in the empire, and while watching them develop their futile conspiracies against himself in much the same way as a spider watches a fly, Ieyasu schemed to draw them from the stronghold and thus obtain peaceable possession of it. But though morally weak, Yodogimi was an intelligent woman, and was wise enough to prevent herself and her son from falling into this trap. In 1605 she finally sent word to the Shogun that rather than quit the castle, she and her son would commit *Harakiri*. And so the great and tragic struggle, seething with dramatic side-issues, wore on to its bitter close.

At last the Shogun determined to crush the house of Toyotomi before he died, and on the pretext that Hideyori was plotting

and this passion for loyalty to lord and country has with the roll of years gained such an impetus that it has mounted to a flaming of patriotism that burns away all before it in its onward-rushing zeal.

In what way, it may be asked, does their patriotism differ from that of the West? The essential difference is an ethical one. In the West the ultimate salvotion and expression of the self in things both great and small, materially and spiritually, temporarily and eternally, is the goal of life and religion: 'What does it profit me if I gain the whole world and lose my own soul?' says the Christian. The Japanese would say: 'What does it matter if I lose my body and soul in doing my duty?' The doctrine of self-effacement, of the subject for the Emperor, of the retainer for his lord, of the son for the father, of the wife for her husband, has been since the dawn of history the religion of Japan.

And for the Japanese woman in all ages, and under all circumstances, loyalty to her husband or master was the supreme duty. The fire of zeal and constancy to purpose with which she has at times risen to accept her fate has often transformed the simple childlike slave into an unconscious heroine, and the influence of such women is at times as powerful to gird men with strength as they go forth to war as in countries where the worship of woman is the more open—the inspiration as strong though its source be hidden.

And the spirit of the Spartan woman who gave her warrior son his sword with the words: 'Return, my son, with thy shield or upon it,' finds its counterpart in every true Japanese woman's heart. Death for her husband and son on the battlefield is embraced with chastened joy rather than defeat or surrender, the last being a word synonymous with cowardice in the sentiment of the nation. There are stories of olden times where a devoted and loving wife, fearing that the thought of her and of their mutual love might weaken her husband's courage in facing death, and scorning to be a source of weakness to him, has died by her own hand first, consumed with longing to transmute herself and her love into an inspiration of strength to him in doing his duty.

Such is the story of the unflinching heroism of Aoyagi, brave wife and patriotic to Lord Kimura Shigenari, tributary Daimio to the



AOYAGI (Green Willow):

THE STORY OF A JAPANESE HEROINE.

I do love
My country's good, with a respect more tender,
More holy, and profound, than mine own life.

—*Shakespeare.*

Who would not bleed with transports for his country,
Tear every tender passion from his heart,
And gladly die to make a people happy?

—*Thomson.*

I.

The little historical story of an heroic woman in mediæval Japan may elucidate something of the spirit which is the primal cause of the phenomenal patriotism found in the Japanese people, which has been so markedly made manifest in the present war with Russia, and which has created so much comment and aroused not only admiration but wonder and curiosity in the minds of both friendly and hostile critics.

The courage which has made the Samurai of a past day and the Japanese soldier of the present so supremely indifferent to death has been attributed to mere Oriental fatalism. But this is a mistake. The Japanese soldier goes forth to war not with the belief that his fate is unalterably fixed outside all individual effort or action on his part, but with the burning desire, the consuming hope, that he may be called upon to die for the glory of his country. 'A man can only die once,' said a convalescent soldier at the Red Cross Hospital to a friend of mine, 'and it is best to die on the battlefield.'

In Japan the individual life, soul, honour, and virtue, if necessary, must be sacrificed to duty; and the higest duty is summed up in one word—loyalty; loyalty to his lord for the Samurai in feudal times, loyalty to the Emperor for the subject and soldier nowadays;

此廣告により御注文の方は**中央公論**に依る旨御附記を乞ふ

青年文學雜誌

文庫

事實は有力なる權利の主張者也。誰か今日にしてわが文庫の青年文學雜誌中の覇王なる事を否まむ。今や青年文士の輩出、前古その比なく、各々其特色を持して天下に滿つ、吾等はこゝにます〳〵本誌が青年文士唯一の壇場を以て自ら任じ來りし主義主張を發展し擴張し、此等の青年と一堂に會して共に新しき文藝の清趣を酌み、その二十年一日の如く文壇に貢獻し來りし歷史に、更に一層の光輝を加へんことを期す。天下の俊髦、希くは競うて趨り來り、吾等の志を成さしめよ。

散文

論評と言はず、小説と言はず、美文といはず、寫生文といはず、日記文といはず、苟くも青年眞摯熱實の氣滿つるあるものは之れを容れて洩らすところなし。心あるものは請ふ見よ、本誌の散文壇のいかに欝として天下の文壇を壓するの勢あるかを。

韻文

韻文の盛なる今日の如きは前古その比を見ざるところ、而して文學雜誌中、韻文の盛なる本誌の如きは七里結灰見るべからざるところ、詩壇に於ける文庫派の位置や大なる哉、殊に徹頭徹尾新詩人の紹介を以て自ら任ずる事本誌詩壇の如く自由公平なるはあらず、爭ふて來り會せよ。

俳句

內藤鳴雪翁の俳句選評は天下一品、世既に定評あり。翁が本誌俳句の選にあたられてより幾久年、天下の俊髦、招かざれども自ら來り會して、今や文庫の俳壇は全俳句界に於ける一大敵國、一大勢力として儼然卓立するに至れり。世間の文庫の俳句を知らずして[illegible]

和歌

混沌たる現時の歌界にありて、本誌ひとり、天下青年の戟を拔いて一隊となし、清新の調、流麗の體、卓然として一大勢力をなす。世の才も雋なるもの必ずや作を世に問ふ、まず本誌によりその特色を天下に標榜せざるべからずとなすもの、偶然にあらざる也。

斯の如くして本誌は首尾を通じて最も自由に最も公平に青年文士を天下に紹介するを以て任となす、記者編輯員等、日夜黽勉努力して止まず、その趣味の清新、材料の豐富等に到りては竊かに自ら許すところ、願くは事實に之れを撿せられん事を。若し夫れ本社同人が現今の文壇に接觸して直言讜筆するところの評論に到ては洽ねく天下の認むるところ、[illegible]

毎月一回發行年四回定期增刊●寄稿は十行二十字詰不問何種類●定價一冊金拾五錢郵税一錢六冊前金郵税共九十錢●見本郵券代用金十六[illegible]

版元　東京本鄉區駒込西片町十番地　**內外出版協會**

此廣告によりご注文の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

早稻田大學講師 中島半次郎先生著

戰後の教育

▲定價 金五拾錢 郵稅不要

本月十五日發賣

○本書上編に於ては戰捷の原因を論じこれ國力一般の發達に依ると斷じ其國力の發展につきて批評を試み進んで我國家は世界に立ちて何事を行ふべき天職を帶び居るかを說き此天職を果さんには教育に依らざるべからざるを明にし

○中篇に於ては我政府從來の教育施政の方針か十分確立せさるを指摘し今の所謂學制改革論者の着眼點の足らさる所あるを示し更に我國民教育の理想に論及して新興國の教育方針を明にし

○下篇に於ては文部省の事業を擴張し教育者及學生の志氣を一洗し專門普通の各學校の改革し擴張すべき點を說き遂に滿韓に於ける我教育經營に及べり教育及經世家の一讀を望む

發行元 東京市京橋區南傳馬町二丁目五番地 目黑書店

此廣告により御注文の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

此廣告により御注文の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

◎發行所……東京牛込 早稻田大學出版部◎

新刊

新曲かぐや姫

坪内逍遙著

◎和裝新意匠美本

正價金八拾五錢
郵稅金四錢

五版

新曲浦島

正價金八拾五錢
郵稅金四錢

◎發賣所……東京日本橋區本町三丁目 博文館◎

▲定價改正

中央公論 定價表	
一冊	前金拾五錢
六冊	前金八拾五錢
十二冊	前金壹圓六十五錢
郵税共	

●但海外（清國は本邦郵便局所在地を除く）は一部郵税六錢を要す

中央公論 廣告料		
一行（五號文字二十四字詰）	一回	金貳拾錢
四分の一頁	一回	金貳圓五拾錢
半頁	一回	金四圓
一頁	一回	金八圓
表紙の二三四一頁	一回	金拾五圓

送金注意

一郵便爲替は受取人指定欄へ必ず弊社町名幷に社名を記し拂渡局所を**東京駒込**と指定せられたし

一郵劵代用の場合は必す壹割增のこと

一誌代、廣告料とも總て前金にあらされは御需めに應せす

一前金切の節は帶封に朱書いたすべくに付早速拂込まれたし然らされは其號限にて發送を止むべし

一雜誌の發送を以て領收の證といたすべくに付別に領收證を望まるゝ向は返信料を添えられたし

都下大賣捌所

神田表神保町	東京堂
神田裏神保町	上田屋
京橋銀座四	東海堂
日本橋呉服町	北隆館
本鄕四丁目	文明堂
本鄕本富士町	盛春堂

明治三十八年十一月廿七日印刷
明治三十八年十二月一日發行

發行兼編輯人　武田福松
印刷人　清水金右衛門

發行所　東京市本鄕區駒込西片町十番地　反省社（電話下谷九一九）

印刷所　東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地　秀英舍第一工場

